

祈りによる心の変容過程が宗教性発達に及ぼす影響の検討
——ロヨラのイグナチオの『靈操』による宗教的意味システムの形成——

2019年2月20日
白百合女子大学大学院 文学研究科
博士課程 発達心理学専攻
森本 真由美

目次

目次	i
Table 一覧	vi
Figure 一覧	vii
付録一覧	viii
序章 心理学からみた宗教性発達	
第1節 宗教的に解釈された人間の在り方への問い	9
第2節 先行研究の概観	11
第1項 宗教の定義と宗教的意味システム	11
第2項 発達心理学の視点からみた宗教的意味システム	12
第3項 宗教性の変化を捉える宗教性発達	13
第4項 宗教的体験である回心	14
第5項 媒介として祈り	15
第3節 本研究の目的および構成	17
第1項 本研究の目的	17
第2項 本研究の理論的背景	18
第3項 本論文の構成	20
第1章 「霊操」(祈り)の動機と促進的記号発生の探索的検討	
第1節 カトリック信者の宗教性発達過程に関する検討(研究1)	25
第1項 問題と目的	25
第2項 方法	26
1. 協力者	26
2. 語りデータの収集	26
3. データ分析と方法論的妥当性の検討	27
第3項 結果および考察	27
1. 複線径路・等至性アプローチの概念説明と本研究による位置づけ	27
2. 時間軸と次元の構築による理解	28

第4項	結論	37
第2節	ロヨラのイグナチオの伝記研究：生育史分析による宗教性発達の検討（研究2）	44
第1項	問題と目的	44
第2項	方法	45
1.	分析対象	45
2.	分析手順	45
3.	方法論的妥当性の検討	47
第3項	結果および考察	47
1.	TEAを用いた生育史分析の概念説明と本研究による位置づけ	47
2.	時間軸と次元の構築による理解	49
第4項	結論	54
第3節	総合考察	61
第2章	「霊操」（祈り）の構造と機能の分析	
第1節	霊操の構造と宗教的意味システム形成の検討（研究3）	63
第1項	問題と目的	63
第2項	方法	66
1.	分析対象，協力者および語りデータの収集	66
2.	分析手続き	66
(1)	IPAのテーマ分析手続き	67
(2)	プログラム評価分析手続き	68
3.	データ分析と方法論的妥当性の検討	68
第3項	結果と考察	70
1.	プログラム目標とプログラムの構造	70
2.	インパクト理論	73
3.	リサーチ・クエスチョン	77
4.	ロジックモデル	78
第4項	結論	79

第2節	祈る「場所の設定」受難劇に見る、宗教性発達の検討（研究4）	82
第1項	問題と目的	82
第2項	方法	84
	1. 協力者及び語りデータの収集	84
	2. 分析手続き	85
	3. データ分析と方法論的妥当性の検討	86
第3項	結果と考察	86
	1. テーマ分析	86
	2. リサーチ・クエスチョン	95
	3. テーマ間の関係の図式化	96
第4項	結論	96
第3節	総合考察	100
第3章	「霊操」（祈り）の一般化による宗教性発達支援の検討	
第1節	ミッションスクールにおける教育の中の宗教性発達の検討（研究5）	102
	青年期の意味形成の質問紙調査（研究5-1）	
第1項	問題と目的	102
第2項	方法	105
	1. 調査協力者	105
	2. 調査時期および手続き	105
	3. 調査内容	105
	（1）共同体感覚尺度	105
	（2）自我体験尺度	106
	（3）人生の意味（MLQ）	106
	（4）Important Meaning Index(IMI)	106
第3項	結果と考察	107
	1. キリスト教との接点	107
	2. 共同体感覚の測定	108
	3. 自我体験の体験喚起の測定	111
	4. 自我体験と人生の意味の問い	115

5. MLQ の保有・探求と IMI の追求・実現得点の関係	118
第 4 項 結論	120
第 2 節 ミッションスクールにおける教育の中の宗教性発達の検討（研究 5）	122
自我体験と意味形成（研究 5-2）	
第 1 項 問題と目的	122
第 2 項 方法	122
1. 調査手続き	122
2. 分析手続き	123
3. データ分析と方法論的妥当性の検討	123
第 3 項 結果と考察	124
1. 全体分析	125
(1) 自我体験の体験率と喚起	125
(2) 基本情報	126
(3) 出現頻度分析	127
(4) 感性分析	129
(5) 注目語分析	130
第 4 項 結論	131
第 3 節 ミッションスクールで過ごす青年期の宗教性発達の可能性（研究 6）	
第 1 項 問題と目的	133
第 2 項 方法	134
1. 分析対象	134
2. 分析手続き	134
3. データ分析と方法論的妥当性の検討	135
第 3 項 結果と考察	136
1. 全体分析	136
(1) 基本情報	136
(2) 出現頻度分析	137
(3) 感性分析	139
(4) 注目語分析	140
第 4 項 結論	141

第4節 総合考察	142
終章 総合考察	
第1節 本研究のまとめ	144
第2節 今後の展望	147
文献	148
要約	156
付録	159
謝辞	166

Table 一覧

第1章

Table 2-1	研究協力者のプロフィール	40
Table 2-2	TEA 及び TEM 図で用いた概念と「カトリック信者の宗教性 発達過程」における意味	41
Table 3-1	生育史分析法の理論的枠組みと「生育史分析による宗教性 発達の検討」による解釈	56
Table 3-2	TEA 及び TEM 図で用いた概念と「生育史分析による宗教性 発達の検討」における意味	57

第2章

Table 5-1	テーマ全体の要約表とテーマの出現頻度の一覧	99
-----------	-----------------------	----

第3章

Table 6-1	キリスト教信者認識の有無	107
Table 6-2	共同体感覚因子分析結果（最尤法・プロマックス回転）	109
Table 6-3	共同体感覚の下位尺度間相関	110
Table 6-4	自我体験因子分析結果（最尤法・プロマックス回転）	113
Table 6-5	自我体験の下位尺度間相関	114
Table 6-6	自我体験喚起	114
Table 6-7	人生の意味（MLQ）因子分析結果（最尤法・プロマックス回転）	116
Table 7-1	テキスト基本統計量	127
Table 7-2	係り受け解析	129
Table 7-3	パターン分析〈悪い-悪い〉〈悪い-不満〉	130
Table 7-4	パターン分析〈良い-賞賛〉〈良い-幸福〉	130
Table 8-1	テキスト基本統計量	137
Table 8-2	係り受け解析	139
Table 8-3	パターン分析〈良い-良い〉	140
Table 8-4	パターン分析〈悪い-悪い〉	140

Figure 一覧

序章

Figure 1-1 本研究の目的	22
Figure 1-2 本研究の構成図	23
Figure 1-3 3つのフェーズで構成した探索的順次デザインによるデータ収集	24

第1章

Figure 2-1 カトリック信者の宗教性発達過程 TEM 図	42
Figure 2-2 発生の三層モデル	43
Figure 3-1 イグナチオの生活空間要因連関 TEM 図第Ⅰ期～第Ⅱ期	58
Figure 3-2 イグナチオの生活空間要因連関 TEM 図第Ⅲ期～第Ⅳ期	59

第2章

Figure 4-1 『霊操』の構造と方向性	80
Figure 4-2 本研究から整理されたインパクト理論	81
Figure 4-3 本研究から整理されたロジックモデル	82
Figure 5-1 2010年上演オーバーアマガウ村人による Passion Play	100
Figure 5-2 オーバーアマガウ村人の宗教性発達過程	100

第3章

Figure 6-1 キリスト教を知るきっかけ	107
Figure 6-2 共同体感覚の所属感・信頼感	110
Figure 6-3 共同体感覚の自己受容	110
Figure 6-4 共同体感覚の貢献感	110
Figure 6-5 自我体験と意味保有 (MLQ)	117
Figure 6-6 自我体験と意味追求 (MLQ)	117
Figure 6-7 MLQ の追求得点	119
Figure 6-7 MLQ の実現得点	119
Figure 7-1 自我体験の体験率	125
Figure 7-2 自我体験カテゴリと体験率	126
Figure 7-3 名詞出現頻度分析 (5回以上)	128
Figure 7-4 形容詞・形容動詞出現頻度分析 (2回以上)	128
Figure 7-5 「自分」注目語情報	131
Figure 8-1 名詞出現頻度分析 (10回以上)	138
Figure 8-2 形容詞・形容動詞出現頻度分析 (5回以上)	138
Figure 8-3 「イエズス会学校」注目語情報	140

付録

付録 1 研究 5 (青年期の生活意識調査) の質問紙

序章 心理学からみた宗教性発達

第1節 宗教的に解釈された人間の在り方への問い

宗教の様々な影響による深刻な紛争や排他的な宗派（セクト）による社会の分断化が、世界のいたるところで起きてきたのは周知のことだ。北アイルランド（カトリック対プロテスタント）、スリランカ（仏教徒対ヒンズー教徒）、アチェ・インドネシア（キリスト教徒対イスラム教徒）などの地域での紛争をはじめ、1995年に発生したオウム真理教による東京の地下鉄におけるサリン攻撃、2001年9月11日にニューヨークとワシントンで起こった同時多発テロ事件など、宗教テロリズムは世界に衝撃を与えた。また、2015年11月にはフランスでも同時多発テロが起きたことが記憶に新しい。しかし、テロリズムや民族政治学的戦争状態、民族間および宗教間の紛争や戦争といったテーマに関する心理学の研究文献はまだ少なく、異質な社会同士が会合するとき重要な役割を果たすとされる心理学に与えられた使命が期待されている（Levant, Barbanel, De Leon. 2008）。宗教そのものがテロリズムを生み出しているのではないが、集団アイデンティティにおいて宗教の影響力は小さくはない。「宗教は戦争と争いのもとだ」と考える人は多いのではないだろうか。

それでは、世界社会（ワールドコミュニティ）にとって、宗教はどのようなものなのだろうか。宗教の一般的理解を目指す「宗教現象学」において、華園（2016）は、「宗教的生」の特質に関する研究内容を比較すると、宗教を通じて「人間」もしくは、「人間であること」あるいは、「人間として生きること」の特徴や意義を明らかにしようとする問題意識や問題の方向が指摘できるとしている。そして、宗教を文化あるいは社会現象として捉え、その意味を理解し、異なる文化や社会のものと比較する Waardendurg（1993）の試みを、「宗教」を人間の具体的な「生」の脈絡で理解することを目指す、広い意味での「人間学」であることを論じている。宗教的に解釈された人間の在り方を考察することは、社会や世界の中で宗教がどのような意味を持つのか、意義のある問いであると思われる。

日本では生活の中に慣習的な諸行事の一つとして宗教的な行事が定着しているが、その精神風土の中に宗教性を持っていても、意識されることが少ない。橘木（2013）は、電通総研・日本リサーチによるデータから「日本人は自分を無宗教と思っている人が多数派で

あるが、かなりの人は宗教心は大切だし、神や仏の存在を認めている」としている。

例えば、文化庁の宗教統計調査（2016）では、国内のキリスト教信者数は人口の約 1.6%（約 200 万人）で、うちカトリック信者は 0.3%（約 44 万人）、キリスト教信者はマイノリティである。しかし、公益財団法人国際宗教研究所情報リサーチセンター及び文部省「学校基本調査（2016）」では、キリスト教系大学・短大は全私学の 1 割超（約 120 校）を占める。ミッション校の教育を受けてきた者は多く、ミッション校の「人格教育」（*cura personalis*）の果たしてきた役割は小さくはないと言えるだろう。一方、今日のミッション校はキリスト教主義の維持に腐心している。カトリックのミッション校ではカトリックの理念を体現する司祭やシスターなどの修道者の姿が、キャンパス内で少なくなった。このように宗教色が薄まるなかで、今日の宗教教育は多文化社会にふさわしい道徳的、市民的、精神的価値を育成する価値教育をどう提供するかが問われている（江原，2003）。

ミッション校の一つの役割として、私たちが日常を生きるなかで生まれるさまざまな問いを、人生の意味と目的の追究に関わる問いにつないでいく教育をすることが挙げられる。信仰を持つ者、持たない者を問わず、人は人生の意味を問う。人生の意味を発見すること、それが方向づけられることで、私たちがここに存在していることを理解し、人生の分岐点で何を優先させ、選び取るかの基準を与えてくれる。宗教は、芸術やそのほかの創造性の表現形式のように意味を作り出そうとする人間の試みの一部であり（Clack, 2011）、移ろいやすい意味の世界に生きている人間が、意味を生き、自己と世界の理解を解釈する（塚本，1995）、一つの方法であると言える。したがって、ある人の人生で宗教がどのような意味を持つのかを問うことは、意味を作り出そうとし、意味の世界に生きる人間を理解するうえでも重要な問いであると思われる。

世界や出来事に意味づけをする顕在化・意識化された信仰形態がどのように個人に取り込まれていき、変化していくのかという宗教性発達について、欧米では多くの知見が提供されている。一方、日本での宗教心理学的研究は体系的に行われておらず（金児，1997；杉山，2004；西脇，2005）、その知見の蓄積が継承されていない。さらに発達の視点から宗教性を検討した実証的研究はほとんど行われていない。「人間は生涯にわたって環境に働きかけ、また応答し得る（学習によって行動を変容させ得る）」（鈴木，2014）という仮説を持って発達を研究する生涯発達心理学で、宗教的意味づけとそれによって何がもたらされるのかを検討する意義を、先行研究を取り上げながら、次節で考察してみたい。

第2節 先行研究の概観

第1項 宗教の定義と宗教的意味システム

宗教は多くの文化において、善悪の最も強力な判断の源とされる (Baumeister, 1991; Saroglou&Cohen, 2013 ; 島園, 2016). しかし、宗教の定義は宗教学者によって異なると言われてきた。Pargament(1992)は、宗教とは聖性を探索する方法としており、礼拝への参加、宗教的信念、祈りや慣習への参加、宗教的対処を含むものとしている。このような宗教的信念や感情が、経験に意味を提供し、死や災い、不正義といった実際の根源的問題に対する対処を促進し、自己コントロールと社会的結束を高めるかもしれないという研究の知見も提示されてきた (Oman,2013)。聖性の探索という精神的な目標は日々の活力と結びつくと論じられており、そのダイナミズムを理解するために、(a) 人々はどのように宗教を使っているか、(b) 精神的な目標をどのように選び、何を聖なるものとするか、どのように追求しているか、(c) もともと非宗教的であった目標はどのように、聖なる意味と有意義性によって染められたかを記述していく必要があるとされている (eg.,sanctification ,Pargament & Mahoney,2005)。

“*Handbook of The psychology of Religion and Spirituality*” (Palouyzian&Park, 2013) では、宗教とスピリチュアリティ心理学における中心的テーマとして、発達モデルを統合した宗教的意味システムを取り上げている。Palouyzian & Park によると今日、宗教は心理学的には意味システムの一部をなすもので、宗教的意味システムと考えられている。意味システムとは、個々の人の人生を位置づけ、それに基づいて個々の出来事を理解し、予測し、制御しようとするシステムであり (Park, 2004), その枠組みに照らして情報を評価し、信念や感情、行動を変化させる (Palouyzian & Park, 2013)。Park& Folkman (1997) は、心理学では聖性を探索するプロセスをより一般的な意味形成や評価のプロセスとみる必要があるとしている。意味形成は (a) 実際には部分である刺激を全体として知覚し、(b) 曖昧なものからパターンやつながり、示唆されるものを見出して、(c) そこにある不確かなところにも連続性を推察する過程である。意味評価は、新しい情報を過去の情報を処理した方法で評価する過程を通して行われる (Park,2005a,b)。宗教的意味システムの発達モデルは意味形成と意味評価が相互に影響し合う、宗教的世界観を作り出すプロセスを通して理解されるべきと要約される。

宗教的意味システムは、(a) 包括性：報酬や罰といった因果や期待、目標、共感などの行為、愛や平和などの情動や信念などの問題について言及できる、(b) 接近可能性：自分たちにあった宗教的スピリチュアルなものを見つけることが出来る、(c) 超越性：自分たちよりも偉大な何かに繋がる機会を提供する、(d) 直接的言明：自分たちの能力や存在は意味を持っているという感覚を提供する (Hood,Hill,and Williamson, 2005)。それゆえ、個々人の日々の生活の目標が、宗教的な意味づけによって、宗教的価値を帯びることにもなり (Martos, Kezdy,& Horvith-Szabo,2011)、意志決定を導き、目標到達までのその人の行動に影響するとされる (Baumeister,1991;Pargment,1997)。

今日、脱宗教化のなかで、宗教や特定の教義に言及しないスピリチュアリティ (spirituality) という概念の台頭に対し、宗教とは礼拝への参加、宗教的信念、祈りや慣習への参加、宗教的対処を含む組織の文脈で行われる、聖性を探索するものと定義したい。さらに、心理学的アプローチでは宗教を宗教的意味システムの発達モデルとして、意味形成や意味価値の相互の影響を丁寧に検討していく必要があると考える。

第2項 発達心理学の視点からみた宗教的意味システム

Piaget の認知的発達や Kohlberg の道徳性発達理論、Erikson のライフサイクル論など発達心理学の知見の影響を受けたとされる、Fowler (1981) の宗教性発達段階論 (stage theories of religious development) も、信仰 (faith) を人生の意味形成活動と捉えた 7 側面からなる、6 段階説を唱えている。Fowler は 3~83 歳の男女 359 名を対象に、実証的研究を行い、7 側面の (a) 論理の形態、(b) 他者の視点取得、(c) 道徳的判断の形態、(d) 社会的意識の境界、(e) 権威の所在、(f) 世界を統一する形式、(g) 象徴機能と、6 段階の (a) 「直観的・投影的信仰」段階、(b) 「神話的・字義的信仰」段階、(c) 「総合的・慣習的信仰」段階、(d) 「個別的・反省的信仰」段階、(e) 「接合的信仰」段階、(f) 「普遍的信仰」段階によって、信仰構造を説明している。

西脇 (2000) は、1970 年代後半~1981 年に萌芽した信仰発達理論はその後、社会分析を視野に入れた理論へと展開されたとして紹介している。信仰と道徳性間に有意な正の相関があることを見いだした Mischey (1992) や、信仰発達理論をもとに作成した尺度と宗教的信念項目を訊ねる質問紙調査で、宗教的信念の反応タイプと信仰段階との分布が一貫していることで、信仰発達理論の内的整合性と概念妥当性を確かめた Barnes, Doyle& Johnson (1992)、発達段階の 6 側面のうち「社会意識の境界」に注目した Grenn&Hoffman

(1992)の研究、信仰発達理論は世俗化された世界における宗教多元主義の手法の一つとして、特定の宗教によらない信仰を定義したところに意義があるとする Parks(1992)の研究などである。宗教多元主義は 1980 年代に登場した。「信仰の特殊性・排他性（どれでもよいのではないこと）を堅持しつつも、従来の他宗教観を克服し、他者の価値を認めて、他者に開かれる（他のものもやはり同様に素晴らしいのだと認める）」（保呂，2008）という宗教的課題を探究する理論である。

宗教的意味システムは、宗教的という定義が研究者によって様々に操作されることから、特定の宗教に限定された記述になるとしているが（Palouyzian & Park，2013）、宗教の中に埋め込まれている普遍的な真理の探究がどのようなプロセスを経ていくのか。多元主義を背景とした宗教教育を議論するうえでも、意味形成や意味価値が相互に影響しあうプロセスの実証的な研究が望まれる。

第3項 宗教性の変化を捉える宗教性発達

Park (2010)は、意味形成の構成モデルには、信念や目標、判断時の基準などといった動機付けや目的に影響する「グローバルな意味」と、ストレスイベント状況などでの「状況的な意味」があるとしている。グローバルな意味に与える宗教の影響は、個々人によって大きくことなり（Dezutter et al., 2010）、宗教性と関係している。祈りのような行為を通して、宗教性と信念との関係も明らかになっている（Rothbaum, Weisz, & Snyder, 1982; Young & Morris, 2004）。宗教性とは、「個人がどの程度宗教に関与しているかを測定する指標であり、個人が宗教についてどの程度、信じるのか、感じるのか（宗教意識）、振る舞うのか（宗教行動）を表している」（松島, 2011a）。

宗教性に関する研究では多くの研究者が、Glock(1962)が提示した信念、知識、体験、行動、効果の5次元を重要な指標として引用している（金児, 1997; 杉山, 2004; 松島, 2011a, b）。この5次元とは、宗教的な教えを信じるという「信念」、教義や経典に関する情報という「知識」、宗教的感情や回心体験など宗教的経験の「体験」、祈りなどといった宗教的な「行動」という4つの次元と、これが信者に及ぼす社会的、世俗的な「効果」として、個人における心の平安や悩みからの解放と幸福感という報酬、倫理的禁止の受容や共同体における責務を担う責任で宗教性の構造を説明している。

また、宗教性は規範やストレスイベントの影響を受けて、ライフスパンで変化することも明らかになっている（Leevson, Aldwin & Igarashi, 2013; Palouyzian, Murken, Streib

&RoBler-Namini,2013)。Reich(1992)によれば、宗教性発達には(a)精神(知・情・意)のプロセスへの言及、(b)個人の精神と生物物理学的・社会文化的・霊的な現実との調整プロセスとしての発達像の描写、(c)個人の宗教性発達と関連する社会的状況への視点、(d)個人差と同様、宗教性発達の普遍的と特徴の説明、(e)発達的变化が生起するメカニズムや、発達を促進/抑制する要因と、5つの条件を踏まえて記述される必要があるとしている。宗教的な意味のどの側面がどのような条件で変化するかを検討することは、宗教的意味システムのプロセスを理解するための知見を提供してくれるであろう。

さらに、宗教性の変化を捉える枠組みとして、社会的学習を中心に展開されている、宗教的社会化(菊池, 2011)で捉える視点もある。心理学における社会化とは、「個人がそのパーソナリティ特徴、動機、価値、意見、行動の標準、および信念を獲得していくあらゆる過程」と定義される(Mussen,1967)。社会学、文化人類学においても定義される社会化は学際的概念でもあり、そこには主体が獲得する何らかの「内容」や「変化」、および「社会」「集団」あるいは「文化」などの共通の概念が見出されている(大江, 2010)。このような学際的概念である社会化には、行動領域別の個別的社会化という動向があり、その1つが宗教的社会化である。

この宗教的社会化(religious socialization)は宗教心理学において、加齢に伴う宗教性の変化を捉える枠組みの1つと考えられており、社会的学習を中心に展開されている。宗教的社会化では、宗教性に影響を与える要因として、家族、学校、友人、教会や寺院(宗教組織)、本やマスメディアなどが挙げられ、Berger&Luckman(1966)はこれらを第一次的社会化としている。第二次的社会化としては回心という概念が用いられることが多い(杉山, 2011)。個人がどの程度宗教に関与しているか(宗教意識と宗教行動)を測定する指標である宗教性がどのように意識され、表出されるのか。宗教的な意味がその個人に取り込まれていくなかで、意味形成や意味価値が最も顕在化・意識化されるのは、おそらく回心と言われる宗教的体験であろうと思われる。

第4項 宗教的体験である回心

回心とは、キリスト教の神学的用語として定着しており、過去の罪の意識や生活を悔い改め神の正しい信仰へ心を向けるという宗教的体験を指す(青野, 2002)。近年の回心研究では、回心のプロセスが生じる社会的な文脈が重視されている。Rambo(1993)の提唱した回心モデルは7段階で、(a)文脈:文化的、社会的、個人的、宗教的要因など回心を促した

り妨げたりする要因、(b)危機：危機が現状の限界に気づかせ、変化を促す、(c)探求：問題の解決を積極的に求め、意味や目的を見出そうとする、(d)出会い：新しい宗教的な選択をもたらす人との出会い、(e)相互作用：人々との関係が新たな生活の基礎を築く、(f)コミットメント：新たなアイデンティティが形成される、(g)成果：信念や行動、感じ方が変化する、と体系的な回心モデルを提示している。

荒川 (2016) は Rambo の回心研究を引用しながら、信仰をもつと意識することのプロセスや信仰を持たないという人を理解するうえで、回心の起こる微視的文脈（個人の家族、友人、民族集団、宗教的共同体、隣人など）と巨視的文脈（社会全体の信仰に対する態度や、それ以外の選択肢など）を考慮することが必要であると述べている。例えば、1920年代以降は教育の普及によって「突発的な回心」よりも、宗教教育に裏打ちされた「漸次的な回心」が注目され、Selbie(1926)は回心を「道徳的自己」の「統合的過程」とみなした。

また、Strabuk(1899)の回心モデル以降の研究では、回心は緊張に満ちた生活状況における「対処」(coping)と評価し、「生活上の差し迫った問題に対処するための防衛的技術」と想定したものが多く。宇都宮 (2012) は人生の変化や危機を契機として、入信や回心といった信仰上の大きな出来事が生じることを指摘している。

宗教的意味システムにおける意味形成では、危機は各個人が体験しているストレスフルなイベントの意味評価と、自分たちの信念や目標とのずれを解消しようと試行錯誤することが、意味形成処理のトリガーになることが示されている (Baumeister&Vohs, 2002; Park, 2010)。例えば神を信仰していない人であっても神に対して怒りを感じることもあることが指摘されているように (Exline&Rose,2013), 人は必要なときだけ神を探し、一般的な意味システムをも維持しようとする。

宗教的意味システムのプロセスは、意味形成処理のトリガーとなる人生の変化や危機を、人生の出来事に宗教的意味づけをして取り込んでいく自己物語として捉えることが出来る。意味形成と意味評価が相互に影響し合うプロセスでは、個人的な価値思考として深く内化された個人に作用する記号、個人の判断や行為をガイドする未来志向的な動的な記号 (Valsiner, 2007) が発生されると考えられる。何がその記号発生を促進/抑制するのか。それらを検討することで、宗教的意味システムのプロセスが示されるであろう。

第5項 媒介としての祈り

個人がどのような宗教を求めるかについては、初期の愛着対象 (Richert&Granqvist,

2013)と、その個人的特徴によって異なって機能する。例えば初期の愛着対象にあった人を求めること（一致）や、反対に得られなかった愛着対象を保障する神のイメージを求める（補償）とされている（Kirkpatrick,1992,2005）。また、宗教的意味システムのプロセスにおいて、宗教について知っている情報は取り込まれやすく（Goldstein, 2011）、個人の欲求に宗教が提示するものが合致し、意味をもたらすものとして知覚されるとき、宗教的感情の喚起や回心といった宗教的体験に繋がることが示唆されている。

人生の出来事に宗教的意味づけをして取り込んでいく、宗教的意味システムでは祈りといった宗教的な行動が重要であることが推測できる。なぜならば、祈り（聖典を読むことを含む）や儀式は時代と地域を超えて広がる重要な宗教現象の一つであり、宗教あるいは信仰の中心となるもの、本質的なものとみなされているからである（斎藤、2008；石川、2010）。Heieler(1918)は、多くの資料から祈りの本質を「自由で自発的な、神と人間の生き生きとした交わり」と定義した。祈りや儀式を扱う心理学的な研究では、神と自身の関係性を扱うコミュニケーションとしての祈りのモデルが提案され、議論されている(Baesler, 2003; Benson,1960; Childs, 1983; Crocker,1984; Ellens,1977; Foster,1992)。

例えば、祈りや宗教的経験を重視し、宗教性を個人と歴史の相互性として心理学的考察を試みたものとして、古今の「宗教的天才」の伝記資料を用いて分析し記述した、Jamesの『宗教的経験の諸相』（1902）がある。宗教を個人の「経験」という次元で捉えたもので、ある。Jamesは「独創的で力強い宗教的経験をもつ人々のその経験が何らかの制度で伝えられることは、ある種の二番煎じであり、伝播するにつれて根源にあった独創的な経験の力と強度は失われる傾向にある」と考えている。一方、Taylor（2002）はJamesの議論に欠落している要素があることを指摘している。信者と神的なものの間にある結びつきを「媒介」するものは、個人的な祈りだけでなく、共同体の伝統的な祈りや礼拝（ミサ）、共同体が信じて受け継いできた聖典であったりもすること、信者と神的なものの間にある結びつきが、本質的に共同的で教会的な生活によって「媒介」させるようなあり方もあるという点を主張している。

発達心理学者 Vygotsky(1978)は、人間の高次精神機能の発達を文化-歴史的文脈に埋め込まれた意味や資源を獲得する活動の過程として捉え、主体が対象に関わる際に、社会的相互行為の道具としての記号・言語による「媒介」が必須であることを主張している。Vygotskyのこの「文化的発達の一般的発生法則」から宗教体験を捉えると、主体（信者）が対象（神）に関わる際に、祈りや儀式、聖典といった社会的相互行為の道具としての記

号・言語による「媒介」が必須であると言えるのではないだろうか。すべての人間はある社会文化的環境から意味と資源を捉え、それを使用する過程を通して、自己の主観性および精神生活を変えているとされている。その際に、精神発達が立ち現れる意味のある記号による媒介、社会的・シンボリックに媒介された出来事についての表象、そして意味を作り出していく過程の構造に注目して、分析していくことが必要とされている (Bruner, 1990 ; Shweder, 1984)。

意味の生成において、Bakhtin(1981)は「権威主義的なことば」として単声型の伝達モデル的な発話として宗教を挙げているが、田島(2003)は、意味が生み出されてくるプロセスの解明として「誰がその発話を代弁するのか (Who is doing the talking?) という問いにあり、意味は特定の個人が所有しているわけでもなく、また、誰も意味を所有しないというものでもなく、対話に基づく二つ以上の声によって社会的に構成されるものである」としている。Vygotsky が提唱する理論で考察すると、宗教的意味システムでは祈りが「媒介」として重要であり、その祈りは神との関係性を扱うコミュニケーションであり、対話によって社会的に構成される。それは個人的な祈りだけでなく、Taylor が提示した共同体の伝統的な祈りや礼拝 (ミサ)、共同体が信じて受け継いできた聖典なども含むものと考えられる。

第3節 本研究の目的および構成

第1項 本研究の目的

第1節の問題提起を踏まえ、第2節では先行研究をレビューした。それらを要約すると、今日、宗教は心理学的には意味システムの一部をなすもので、宗教的意味システムと考えられている。意味システムとは、個々の人の人生を位置づけ、それに基づいて個々の出来事を理解し、予測し、制御しようとするシステムであり、その枠組みに照らして情報を評価し、信念や感情、行動を変化させる。宗教性とは、意味システムによる宗教的信念や感情、宗教行動に個人がその程度関与しているかを示すものである。

宗教的意味システムの発達モデルは、曖昧なものからつながりや示唆を見いだす意味形成と、新しく取り込む情報で評価する意味価値が相互に影響しあうプロセスを通して理解されるべきとされ、それらは宗教性発達として見る事が出来る。その際、祈りが「媒介」

となると考えられ、その祈りの体験によって、Valsiner (2007) の提唱する個人的な価値思考として深く内化された個人に作用する記号、個人の判断や行為をガイドする未来志向的な動的な記号が発生すると考えられる。

ある社会（共同体・歴史・価値観）からどのように影響を受け、与え返し（相互作用）、その結果としてどのように宗教性を帯びた人格が形成されるのか。日本における宗教的意味システムのプロセス、宗教性発達の実証的な研究の知見の蓄積はまだ少ない。世界や出来事に宗教的意味づけをしていく宗教性発達について検討することは、意味を作り出そうとし、意味の世界に生きる人間を理解するうえでも重要な問いであると思われる。

そこで本研究では、ある宗教の理解の深化をはかることは、他宗教を理解する手立てとなるという、ディルタイモデル (Dilthey,2003) に依拠し、特定の宗教・教団に限定しながらも、そこに特異的な心理過程であることを承知した上で探索的にデータ収集を行い、第 1 に、宗教的意味システムのプロセスを検討すること、第 2 に、意味システムにおける「祈り」に注目して、その構造と機能を明らかにすること、第 3 に、「祈り」の一般化としての宗教教育について検討する。「祈り」という媒介によって、どのような宗教的意味形成、意味価値が生じ、宗教性発達に影響を及ぼすかを検討し、宗教的意味システムの発達モデルの仮説を生成することを全体目的とする。

世界の中で最も宗教信者人口が多いとされるキリスト教 (35%) のなかで、最大宗派であるカトリック教会 (キリスト教徒信者人口の 48%) の歴史には、信仰者のさまざまな祈りの実践があるが、一般に「黙想」と呼ばれる、特別な祈りがある (カトリック中央協議会, 2002)。黙想とは、思考、想像、感情、および望みを働かせて、祈りながら行う探究とされている。その目的は、考察した主題を生活の現実と結びつけながら、信仰をもって自分に適応させることにある。具体的には、本研究ではカトリック教会の黙想の一つの方法である「霊操」を取り上げる。

『霊操』はイエズス会 (16 世紀に設立されたカトリックの男子修道会) 初代総長であるイグナチオ・デ・ロヨラの著書であり、そのプログラムを基に行われる「霊操」はイグナチオによる黙想の全体を意味する。その目的は、「霊操者 (祈る人) が秩序づけられていない心の動きや愛着に流されることなく、真の自由を持って選び、決断できるためである」 (Fleming, 1986)。『霊操』は *Spiritual Exercises* と表記され、いろいろな霊的な運動 (*Exercises*) から成り立っており、祈る人が徐々に日常生活の価値基準を整えていくよう、同伴する霊的同伴者 (指導者) のために書かれたものである。

第2項 本研究の理論的背景

本研究では「宗教」を取り扱うが、学問的な中立性と客観性が原則的にどれほど保証されているか、方法論的な議論が繰り返されているものの、一致した見解が形成されていないことにまず言及しておきたい。宗教学者である華園（2016）は宗教および宗教現象の理解に際して、可能な限り特定の宗教的信条や信仰あるいは神学的な立場から自由になり、研究成果に客観性を保証するための動きや研究者の「宗教」の概念についての「予備理解」が研究結果に及ぼす影響など、宗教学的な議論があるとしている。宗教心理を心理学的な視座から理解しようとする宗教心理学はさまざまな定義はあるものの、「非宗教的な行動の研究から得られた心理学的原理を宗教行動に適用しようとしている研究である」（Thouless, 1971）と定義される。

宗教性の変化は、Kohlberg の道徳性発達や Piaget の認知的発達の理論に基づいた Fowler(1981)の信仰の発達段階や宗教的社会化（Berger & Luckmann,1966）など発達と社会化で捉える枠組みが考えられる（西脇・斎藤，2010，西脇，2011；杉山，2011）。人間の宗教性がどのような発達の变化をたどるのかという問いは、発達する人間がどのような歴史・文化・社会環境によって形成されるのかということと切り離すことはできない。本研究は、精神の働きは人々の社会的な結びつきに発生的起源があるという、社会文化的アプローチに基づいた文化心理学の方法論に依拠して議論を進めていく。

文化心理学の基本的方向の一つとして、文化は組織化された心的機能のシステムの一部である記号（サイン）的媒介として見る事が出来るとしている（Valsiner, 2013）。記号的媒介とは、Vygotsky の記号による高次精神機能の媒介の強調であり、文化心理学にとって重要な概念である。サトウ(2013)は、記号の総体が文化であるとし、その記号の読み解きは人によって異なり、また同じ人でも時空の範囲においても異なるとしている。記号の読みときは意味形成と捉えることができるだろう。「意味」は、文化心理学の中核的概念である。箕浦（1997）は、意味体系のあるものを取り入れて、自分自身の意味空間を築くプロセスを発達とし、信念体系（belief system）などの研究は、現象的社会理論（phenomenological social theory）の系譜で、社会的相互作用のなかで個々人が自分の意味世界を構築するという立場を取ったものとしている。

Valsinerによると、文化心理学の方法論の中心課題は、階層的でダイナミックな構造の機能を説明することにあるため、機能する構造への焦点化に、組織化の媒体（記号）の研究をつけ加えることが必要であると提案する。それゆえ、方法論は包括的体系的で、個別

性の中に普遍性が存在しているという個性記述的科学 (Moleenaar,2004; Moleenaar & Valsiner, 2005)と呼ばれる質的なものであり、さまざまな分野との方法論的混成を必要 (Rubolph, 2006a,b,c) とすることを強調している。方法論的混成とは、社会科学の研究アプローチとして90年代以降本格的に理論化が進んだ質的研究と量的研究の混合研究方法である。また近年では、単一の研究の中に複数の質的研究手法を用いるアプローチも混合研究方法として議論されている (抱井, 2015)。

宗教的体験の記述的研究では、インタビューや告白録といった回心的資料に依るものがある。記述的研究では、回心者の「語り」に着目した Beckford や Taylor といった研究者によって、回心者自身による回心説明の客観性を疑問視する見解があることを指摘されている (徳田, 2005)。Taylor が示したように回心説明は回心者の実存的基盤を構成し、語りは回心体験を構成する作業であるとされる。そこで、「理解」あるいは「解釈」という作業に、現象学的手法が結びつけられる可能性がある解釈学的現象学的個性記述の方法が用いられることが望ましい。「生々しい現実」(第1の次元)を「回心者の説明」(第2の次元)、「研究者の解釈」(第3の次元) (Lofland & Skonovd,1981) と捉える。解釈学的現象学的分析 (Interpretative Phenomenological Analysis: IPA) は、「現象を見つめるまなざしとそれを言葉にして理解する内省を両方扱うもの」のである (岩壁, 2010)。

研究方法の選択は、何を明らかにするのかというリサーチクエスチョンとの適合性が最も重要な点である。「祈り」という媒介によって、どのような宗教的意味形成、意味価値が生じ、宗教性発達に影響を及ぼすかを検討し、宗教的意味システムの発達モデルの仮説を生成することを全体目的とする本研究では、「意味」や「記号的媒介」を中核的概念とする文化心理学を哲学的基盤とする方法論を用いて、包括的体系的で個別性の中に普遍性が存在しているという個性記述的科学と呼ばれる質的研究主導型混合研究方法を用いる。

研究手法のデザインは、第3項の本論の構成と研究方法とのジョイントディスプレイ (3つのフェーズで構成したデザインの組み合わせによるデータ収集の図) で示す。

第3項 本論文の構成と研究方法

第1項の本研究の課題と目的について、本論文では以下のような構成で実証的研究を進めることとする (Figure1-1, Figure1-2)。本研究は質的研究主導型混合研究方法を用いる。その理由はデータを組み合わせて包括的な理解を得ること、背景状況を考慮し探索することのために、質的結果から量的結果までの探索的順次デザインを用いる (Figure1-3)。

第1章では、「霊操」(祈り)の動機と促進的記号の発生の仮説モデルを提示し、宗教的意味システムのプロセスを検討する。研究1では、非キリスト教文化の中で、カトリックの信仰を選んでいく経路から日本のカトリック信者の宗教性発達過程を複線経路・等至性アプローチ (Trajectory Equifinality Approach : TEA) を用いて仮説モデル生成し、宗教的意味形成プロセスの知見を提出する。研究2では、個人と歴史の相互性の中から、信仰を深め、信仰を生きる人の特徴を明らかにし、その宗教性発達を検討する。伝記資料による TEA を用いた生育史分析を行い、祈りへの動機、祈ろうとする欲求および祈りによって何がもたらされるのかを明らかにすることで宗教性発達の要件についての知見を提出する。

第2章では、意味システムにおける「霊操」(祈り)に注目して、その構造と機能を明らかにする。研究3では、「霊操」のプログラム構造に連動して、どのように宗教性が深まるのか、その変容過程を段階毎に検討する。プログラム評価の理論や解釈学的現象学的分析 (Interpretative Phenomenological Analysis: IPA) を用いて、「霊操」を通してどのような心の変容過程が担保されれば、宗教性発達が促進されるのかを提示する。研究4では、オーバーアマガウの受難劇を事例に、祈りにおける「場所の設定」により、実存的な解釈、宗教的意味づけがどのように深まるのかを検討する。IPA を用いて、「祈り」としての演劇の、何がどのように演者に機能して、教育的意義をもっているのかという理論的整理を行う。

第3章では、霊操(祈り)の一般化としての、教育の中の宗教性を検討する。ミッションスクール校の役割は信者を教育することでも、信者を増やすことでもない。ではミッション校における、教育の中の宗教性とは何か。そしてそれはどのような影響をもたらし、どのような教育的意義があるのかを検討する。研究5では、青年期の教育の中の宗教性の発芽の測定を行う。質問紙調査を行い、日常の問いを人生の問いに繋げていく、宗教的意味形成の発芽となる要因を提出する。研究6では、成人期になってから青年期の教育的環境を振り返ったとき、どのような意味形成を成すのかを検討する。卒業生のインタビュー記事・対談資料のテキストマイニング分析により、生涯学習としての宗教的意味形成プロセスの支援の要件を提出する。

終章では、第3章までの宗教的意味システムの発達モデルの実証的研究によって得られた知見に基づいて、心理学の立場から宗教的に解釈された人間の在り方および今日の宗教の諸相を考察する。

全体目的

「祈り」という媒介によって、どのような宗教的意味形成、意味価値が生じ、宗教性発達に影響を及ぼすかを検討し、宗教的意味システムの発達モデルの仮説を生成し、そのモデルの検証をすることを全体目的とする。

第1に、宗教的意味システムのプロセスを検討する
(モデル生成)

第2に、意味システムにおける「祈り」に注目して、その構造と機能を明らかにする
(モデル生成)

第3に、「祈り」の一般化として宗教教育について検討する
(モデルの検証)

Figure 1-1 本研究の目的

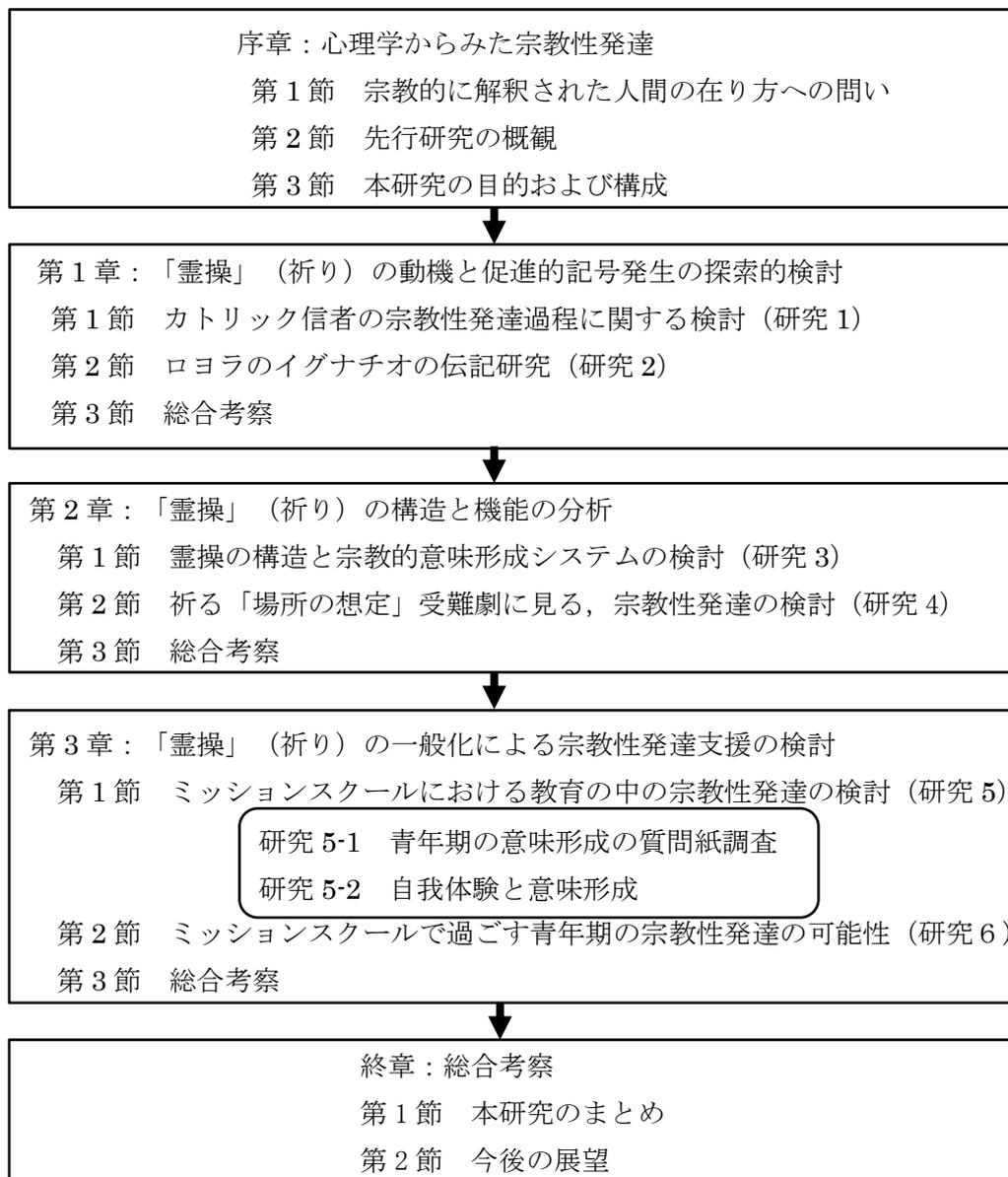
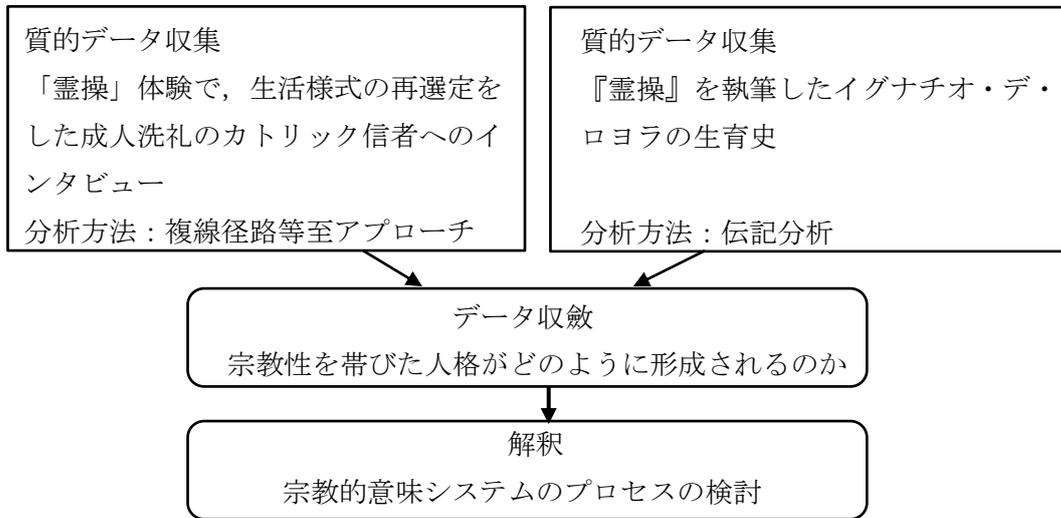
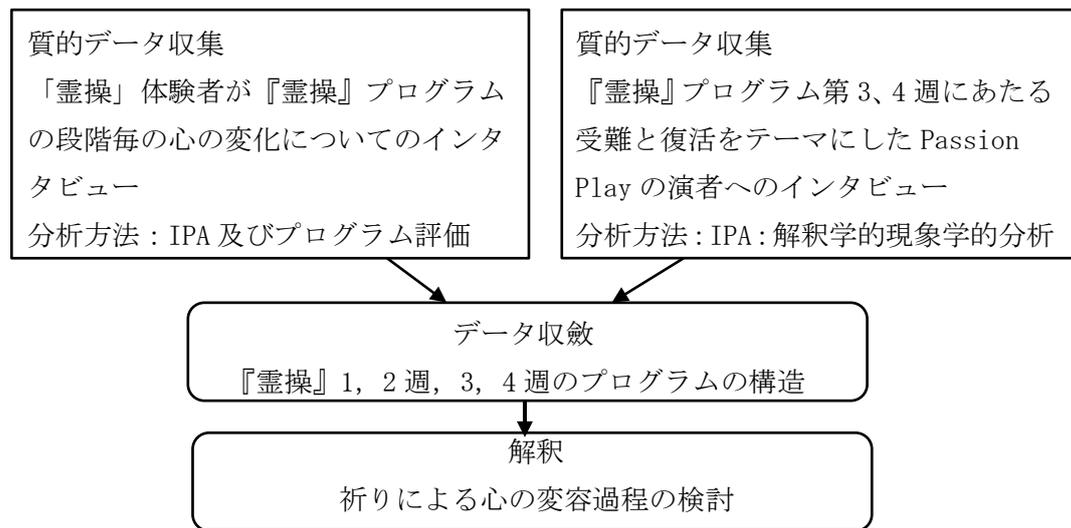


Figure 1-2 本研究の構成図

フェーズ1



フェーズ2



フェーズ3

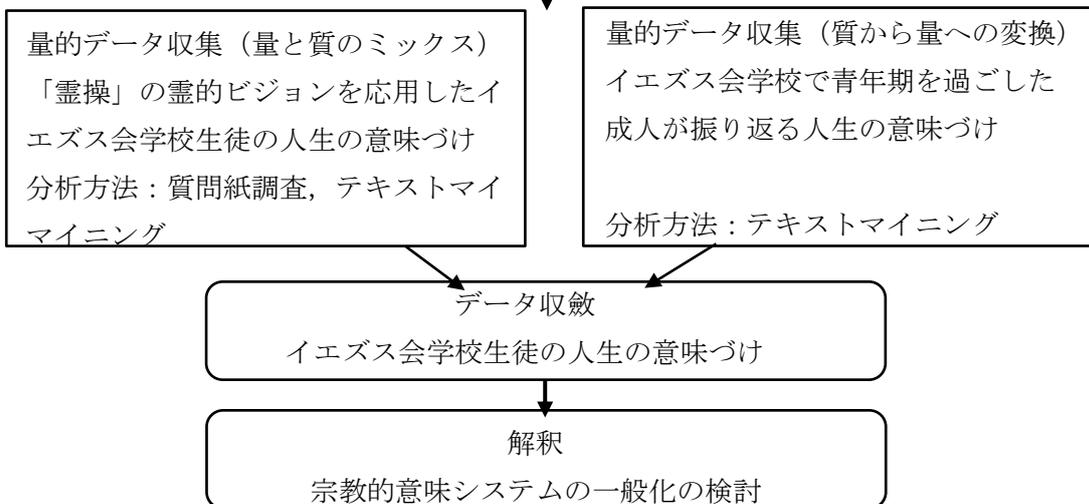


Figure 1-3 3 フェーズで構成した探索的順次デザインによるデータ収集

第1章 「霊操」(祈り)の動機と促進的記号発生の探索的検討

人生においての様々な出来事や節目は宗教性と深い関係がある。Hill&Hood (1999)は、「重要なライフイベントの理解と対処にどの程度宗教が関わっているか」宗教コーピングを測定するものとして、5つの項目を挙げた。(a)誰が(聖職者, 信者, 神), (b)手段(祈り, 聖典を読むこと, 儀式), (c)いつ(急性ストレッサー, 慢性ストレッサー), (d)どこで(集会, 私的な場所) (e)なぜ(意味を見いだすため, 状況をコントロールするため)の5項目の量と質で測定可能とした。コーピングにおける宗教の役割は, 不安の低減, 意味の生成, 親密さ, ストレス関連の成長, 自己調整, 聖なる存在の探究など多面的な機能があり, 問題解決には神に委ねる回避方略, 神から自分で問題を解決する能力や資源を与えられていると見る自己決定方略, 神を問題解決の責任を共有するパートナーと考える協働方略がある (Pargament, Falb, Ano, And Waxholtz, 2013)。

本章では, 人生においての様々な出来事や節目に祈りに向かう動機と促進的記号の発生の仮説モデルを提示し, 意味形成がどのように行われるのか, 宗教性を帯びた人格がどのように形成されるのか, 宗教的意味システムのプロセスを検討する。

第1節 カトリック信者の宗教性発達過程に関する検討 (研究1)

第1項 問題と目的

宗教的発達に関しては, 心理学的な視点に立つ研究がなされてきた。たとえば発達心理学の知見を用いて, 信仰論を展開し記述しようとした先駆者である Fowler (1981)は Piaget, Selman, Kohlberg, Erikson の発達理論の影響を受けているとされる (伊藤, 1996; 西脇, 1998; 松島, 2011a)。宗教性を扱う心理学では, 非宗教的な行動の研究から得られた心理学的原理を宗教行動に適用する研究が実施されてきた (Thouless, 1971; 金児, 2011)。

しかし, 一方 Hintersteiner (2013)は発達の構造遺伝学的な捉え方で, 宗教性の発達が歴史的文化的背景を無視して語られたり, 解釈されたりすることには無理があるとし, 伝統的な信仰や宗教の多様化と個人化が進む中, 発達理論だけでは宗教性の発達を的確に説明することは難しいと指摘している。我が国の歴史的文化的背景では今日, 日常生活の中で

宗教性を意識することは少ない。松島(2011b)は日本人の一般の宗教性発達を捉えることは困難だが、研究対象を特定の宗教集団にすることで、宗教性発達のプロセスを明らかにすることができ、それが日本における宗教性発達に新たな視点を提供するものと述べている。非キリスト教文化の中で、カトリックの信仰を選んでいく経路から、日本のカトリック信者の宗教性発達を検討することは、どのように宗教性が意識され、深められていくのかを探索的に見て行くことができるものとする。

宗教性発達のプロセスは個人的な内的な世界を扱う意味領域である。そのための有効な研究方法としては、特定の個人の生活における宗教性を記述する、個性記述的方法としての質的分析が適している。しかし、Hintersteiner が指摘したように、宗教性の発達には歴史的文化的背景を理解することが必要であり、人間の宗教性がどのような発達の变化をたどるのかという問いは、発達する人間がどのような歴史・文化・社会環境によって形成されるのかということと切り離すことはできない。宗教的経験事象は、個人々の主観的な宗教的意味づけという精神的な働きと、社会・文化を通じて形成される。そこで、本研究では精神の働きは人々の社会的な結びつきに発生的起源があるという、社会文化的アプローチに基づいた文化心理学の新しい方法論の体系を提唱する複線径路・等至性アプローチ

(Trajectory Equifinality Approach : TEA) に注目する。文化心理学は「生を享けた個人がその環境の中で生命を維持し生活し人生をまっとうするために記号を取り入れつつ生きていくプロセスを描く」ものである(Sato,Yasuda,Kanzaki&Valsiner,2014)。

TEA は人間の経験を、時間的変化と文化・社会的文脈で捉える特徴をもった、過程(プロセス)と発生を捉える質的研究方法である(安田・滑田・福田・サトウ, 2015)。TEA はひとつの等至点(Equifinality Point : EFP) に対して複数の異なる径路、「複線径路等至性モデル」(Trajectory Equifinality Model:TEM) を描くものであり、等至点に至る前の経路で生じる分岐点において、促進的記号の発生が人を新しい選択肢へと誘うという「発生の三層モデル」(Three Layers Model of Genesis:TLMG), さらに等至点的なイベントを実際に経験している人を対象者とする「歴史的構造化招待」(Historically Structured Inviting: HSI)を統合・統括するものである。

Reich(1992)によれば、宗教性発達は(a)精神(知・情・意)のプロセスへの言及、(b)個人の精神と生物物理学的・社会文化的・霊的な現実との調整プロセスとしての発達像の描写、(c)個人の宗教性発達と関連する社会的状況への視点、(d)個人差と同様、宗教性発達の普遍性と特徴の説明、(e)発達の变化が生起するメカニズムや、発達を促進/抑制する要因の5つ

の条件を踏まえて記述される必要があるとしている。宗教心理学領域の方法論として TEA の概念ツールを用いることで、この 5 条件に留意し、宗教性発達のプロセスを理解することができる。さらに宗教性発達を宗教的社会化から論じ、第二次的社会化である回心を Rambo, Selbie の理論や Glock の 5 次元の指標を用いてそのプロセスと構造を検討することによって、宗教性発達を捉えることが出来るのではないかと考える。

そこで本研究は、これらの方法論を用いて、非キリスト教会文化の中でカトリックの信仰を選んでいく経路から、宗教性発達の仮説モデルを生成し、宗教的意味形成プロセスの知見を提出する。

第 2 項 方法

1. 協力者

祈りとキリスト教的な生活とは切り離すことはできない。カトリック教会の祈りの伝統のなかには、黙想や観想として知られる啓示的な祈りの分野がある。黙想とは、思考、想像、感情、および望みを働かせて、祈りながら行う探究である（カトリック中央協議会、2002）。

そこで TEA の EFP と HSI に基づき、祈りで考察した主題を生活の現実と結びつけながら、信仰をもって自分に適応させることを目的とした黙想体験で、生活様式の再選定をした（EFP）カトリック信者を歴史的構造化招待（HIS）として選定をした（Table 2-1）。さらに、非キリスト教的文化背景を持つ社会や文化の中で、カトリックの信仰を選んでいく経路を検討するために、非クリスチャン家庭で育ち、成人洗礼によりカトリック信者になった語りを分析対象とすることが適切であると考え、選定条件とした。そして、選定条件に該当した信者の中で研究倫理規定にそった誓約を協力者に対して行い、インタビュー調査に承諾を得た。「1・4±1・9±2 の法則」という経験則（荒川・安田・サトウ、2012）に依拠し、9±2 人により経路の類型化を把握することができることから、成人前期（30～40 代）・成人後期（50 代～65 歳未満）・老年期（65 歳以上）のカトリック信者 8 人（男性 4 人、女性 4 人）とした（Table 2-2）。

なお、指導者のもとで聖書の特定の箇所についての講話を聞き、黙想を展開する体験や方法は多数あるが（カトリック中央協議会、2002）、本研究では、黙想中に指導者または訓練された同伴者との面談を行う、16 世紀のカトリック教会の霊性家のひとりであるロヨラのイグナチオの「霊操」による 8 日間の黙想プログラム体験を EFP とした。

2. 語りデータの収集

本研究では基幹質問をあらかじめ準備し、1対1の半構造化面接法で行なった。TEAのEFPに焦点を当てた研究は2通りある。1つは等至点から過去を振り返り、そこに至った過程に関する情報を協力者から採取する回顧型研究と、2つめは等至点からの発達に関心をもたれる場合の前向型研究である。本研究の目的は、日本におけるカトリック信者の宗教性発達の仮説モデルを生成することから、〈黙想による生活様式の再選定〉前と後、回顧型と前向型の質問を設定した。

面接は1~2回行い、第1回目の面接では(a)信仰を持つきっかけとなるまでの自分史、(b)信仰を持ち黙想体験をするまで、(c)黙想体験後の信仰や生活様式を中心とした自分史と、各時期区分での重要な出来事とした。第1回目の面接終了後、面接の逐語記録を起して発話データとし、それを基にTEM図を作成した。第2回目の面接では、第1回目の面接から作成したTEM図を協力者の言葉や意志が正確に反映されているかを確認してもらい、TEM図を基に(d)黙想体験を通して最も変化を感じたこと、(e)自身の信仰や生活様式の変化についての振り返りをし、第1回目の面接のTEM図に修正や記述などを加えていった。

面接は、2013年5月~11月で1人あたり2時間~4時間で、面接の場所は協力者との合意により決定し、面接過程はインタビュー開始時に協力者の承諾を得て、ICレコーダーに録音した。面接・テキストデータ化は著者自身が行った。

3. データ分析と方法論的妥当性の検討

8人の協力者によって得られたデータをもとに、作成した逐語録を繰り返し精読し、全体像を把握したうえで、1人ずつの逐語録を意味のまとまりで区切るデータのユニット化を行い、時系列に並べ、関係図をTEM図によって可視化した。さらに8人のTEM図をひとつのTEM図の上に重ね合わせる作図を行った。

一連の作業は著者一人で行なったが、各概念の設定、図化の方法、図の解釈・検討においては、TEA研究会に参加し、TEM図の分析方法や作成手順について理解を深めた。次に作成したTEM図を基に、TEA開発に携わった専門家による約120分の個別スーパービジョンを受けた。そしてさらなる綿密な妥当性の検討のために、心理学を専門とする大学院生・教員らによるTEA研究会において発表を行った。議論や助言を基に適宜修正を加え、TEM図の作成(Figure 2-1)とTEM図で用いた概念と本研究における意味の記述(Table 2-2)を行った。

第3項 結果および考察

1. 複線径路・等至性アプローチの概念説明と本研究による位置づけ

TEA は実存性を目指すもので、過程を明らかにするものである。TEA ではプロセスを見るために出来事の記述を実際に起きた時間順に並べる。その先には個々人が固有な径路をたどっても、時間経過のなかで、等しく (Equi) と到達する (Final) ポイントがあるという等至点 (Equifinality Point: EFP) があり、EFP は TEA の根幹をなす概念である。そのプロセスにおいて歴史的・文化的・社会的な諸力の影響のもとにある出来事や経験を分岐点 (Bifurcation Point: BFP) や必須通過点 (Obligatory Passage Point: OPP), 文化的・社会的な諸力を社会的方向づけ (Social Direction: SD), 社会的助成 (Social Guidance) として概念化している。また SD と SG がせめぎ合う分岐点で文化的記号を取り入れて変容するシステムとしての人間の内的メカニズムを理解する理論として、発生の三層モデル (Three Layers Model of Genesis: TLMG) を記述する。TLMG は個人の変容を個別活動レベル、記号レベル、信念・価値観レベルの 3 つの層で記述・理解するための自己モデルである。TEA における概念は Table 2-2 に示した。

宗教行動は多種多様なものが考えられるが、個人が宗教信念を内在化させるように努力し、自身のパーソナリティの一側面として、その信念を生き生活を営む内発的宗教性 (Allot&Ross, 1967) の発達を促進するものとして、日常生活の中で祈りを実践することは、カトリック教会の伝統からも推測される。カトリック教会の歴史には、信仰者のさまざまな祈りの実践があるが、一般に「黙想」と呼ばれる、特別な祈りがある (カトリック中央協議会, 2002)。本研究では〈黙想による生活様式の再選定〉を「霊操」として EFP に位置付けた。「霊操」は、心の動きの方向だけでなく、その動きはどこから生じているのかと、内的な動きを識別する (見分ける) 祈り方で (Fleming, 1986), 黙想と省察について構造化されたプログラムは、神と自己の両方についての考察を可能にし、回心と信仰の刷新をすることへと導くものであると評価されている (McGrath, 1999)。「霊操」は、訓練を受けた同伴者が付くことが特徴である。

EFP までの径路は、非キリスト教文化である我が国では、〈信仰を生きている人との出会い〉が結果的必須通過点 (OPP) として立ち現れ、〈キリスト教入門講座受講〉制度的必須通過点 (OPP) を経て、〈洗礼を受ける〉制度的必須通過点 (OPP) から〈祈りの試行錯誤〉慣習的必須通過点 (OPP) へ経ていくことが示された。〈洗礼を受ける〉、〈祈りの試行錯誤〉は語りデータから、宗教的価値観が統合されて〈新しいアイデンティティの形成〉がされ

るか、統合されず〈アイデンティティの危機〉が生じる分岐点(BFP)として特定した。

また、〈黙想体験による生活様式の再選定〉EFPは価値変容経験(VTE)であることも示された。対話的自己(DS)によって、自分の内に入ってきた情報が価値思考として内化、作用する促進的記号(SP)が発生し、個人史とのすり合わせが行なわれ、統合への価値変容が発生していることが示唆された。その結果、〈神の無条件の愛を感じる〉宗教体験が結果的OPPとして特定され、それによって統合された個人的指向性(SPO)と目標の領域(ZOF)が見いだされた。各地点についてはTable 2-2に整理している。

本研究では〈黙想体験による生活様式の再選定〉をEFPに設定し、非可逆的時間の中で何が立ちあがり、刻まれるかを示すとともに、神への希求と内圧・外圧による葛藤のせめぎ合いが立ち現れる複線径路を描けた。矢印は視覚上の工夫として時間を単位化したりせず、ただ質的な時間の持続性を表現しようとするものなので、EFPに向けて直線的に進むということではない。また、TEM図は経路の多様な経験事象の記述を可能にするものであることから語りから得られなかった論理的に存在しうる行為・選択の可能性も併せて図に示した(Figure 2-1)。

2. 時間軸と次元の構築による理解

8人の事例について、エピソードごとに経験を区分し、等至点(EFP)と必須通過点(OPP)と分岐点(BFP)とに関わる経験、そこに収束していく経験、そこから分かれていく経験を抽出した。それらを基準に〈洗礼を受けようと思う契機となる、信仰を生きる人との出会い〉結果的OPPまでを第Ⅰ期、〈キリスト教入門講座〉制度的OPPから〈洗礼を受ける〉制度的OPP・BFPまでの時期を第Ⅱ期、受洗後〈祈りの試行錯誤〉慣習的OPPから〈黙想体験による生活様式の再選定〉EFP・VTEに至るまでを第Ⅲ期、〈黙想体験による生活様式の再選定〉EFP・VTEの個人の意味世界の変容、生活様式の選定などの変容プロセスを第Ⅳ期に分類できた。

経験事象への理解を深めるために、協力者の代表的な語りについて、EFP、OPP、BFPや状況・出来事・選択ごとに、次元別に経験を記述した。本文中に提示したエピソードは、面接で得られた語りを最小単位に分け、分析単位とした言葉を著者がまとめ、提示した。そして語られた言葉を生かし、抽出した経験を端的に表すような一文を考え、各々のタイトルとして付与した。提示したエピソードは□で囲い、協力者が強調した箇所は「」で記した。()内は注記及び考察によって著者が示した。結果とともに、期間毎のTEMに

よる分析から得られた示唆を考察として記述した。

第 I 期：洗礼を受けようと思う契機となる、信仰を生きている人との出会い（OPP）まで
〈宗教の中でもキリスト教ならば安心だと感じる〉（宗教性に影響を与える要因：家族）

C:母の影響でデーケン神父（死生学）と曾野綾子氏の対談書を読んだ。宗教は危ないイメージがあったが、デーケン神父は公的な NHK にも出ているので、キリスト教ならば安心だと思った。それからキリスト教入門講座に通い始め、30代で洗礼を受ける。

H:両親は信者ではないが、親と聖書読書会に通っていたことがあり、近所の教会の日曜学校にも友人と通った。カトリックの病院に入院し、宗教の本を読む機会があり、「死を身近に感じる」体験を通して宗教を意識。キリスト教ならば安心だと思い、30代で受洗。

〈ミッションスクールの文化の中で育つ〉（宗教性に影響を与える要因：学校）

B:中高一貫のカトリックのミッションスクールは、カトリックは世界に繋がっている感じがした。中3で同級生と一緒に受洗、今思うとそれは「見栄っ張りの信仰」。高3で受難の黙想をし、どんな困難でも耐えられる信仰が作られるのではないかと思った。

F:高3のときに曾野綾子の小説「奇跡」のコレベ神父に興味を持った。プロテスタントの短大だったが、カトリック教会を紹介され、キリスト教の自由さが信頼できると感じた。入門講座に通い、「人はなぜ生きるか」の問いに答えがあると感じ、20歳で受洗。

G:80人の司祭が教鞭をとっていたカトリック系の大学に残り研究者になるには、信者になったほうが有利だと思い、カトリックに興味を持った。修士2年で受洗。

〈カトリック信者の友人との繋がり〉（宗教性に影響を与える要因：友人）

D:好意を持っていた女友人がカトリックの教会に通っていることを知り、会えるのではないかと思い、その教会に通うことにした。大好きな祖父の死で教会から一旦離れ、その後父の死を契機に再び教会に通うようになり、28歳で洗礼を受ける。

E:大学2年のとき、カトリック信者の友人から声をかけてもらい、ローマに行った。ヨハネ・パウロⅡ世が各国語で復活祭の挨拶をするのに感動し、50ヶ国の信徒と一緒に祝うという、国際性を体験。その後、教会に通うようになり、半年後に洗礼を受ける。

幼児洗礼が基本となるキリスト教文化を背景とする欧米と異なり、非キリスト教文化を背景とする我が国では、成人になって自分の意思でキリスト教を、自分の宗教として選ぶ成人洗礼も少なくない。〈洗礼を受けたいと思う契機となる、信仰を生きる人との出会い〉結果 OPP までの径路は〈家族〉〈学校〉〈友人〉や、副次的に〈協会（宗教団体）〉〈本・マスメディア〉の第一次的社会化が社会的助勢（SG）となっている。また、死生学や死を身

近に感じる体験も契機となっているなど、自分の内部からの変化による内圧を要因として宗教性が発芽していることも示唆された。

〈洗礼を受けようと思う契機となる、信仰を生きている人との出会い〉（結果的 OPP）

- B: ミッションスクールでのバスケットボール、チェコスロバキア、ハンガリーからの宣教師の姿。
C: キリスト教入門講座での信仰を持って生きる人たちと出会い。
E: フィリピンタラセタ慰問時、国立ハンセン病院の信者のロドルフおじいさんとの出会い。
F: ヨハネ・パウロ II 世の日本来日やノーベル平和賞のマザー・テレサが心に残った。
H: 病院で同室だったシスターのお母様がシスターと一緒に感謝の祈りをささげている姿。

宗教への関心の要因として第一次的社会化が挙げられたが、受洗に至るまでの経験事象語りデータから、信仰を生きている人との出会いが宗教性に影響を与えていることがうかがえる。〈信仰を生きている人との出会い〉結果的 OPP は、Rambo (1993) が提唱した回心モデルの 7 段階の第 4 段階〈新しい宗教的な選択をもたらす人との出会い〉と重なる。日本人一般の宗教性は、金児 (1997) や西脇 (2004) の研究からも季節にまつわる年中行事や生涯の節目に伴う通過儀礼という宗教性に密着した生活を送ってきているにもかかわらず、宗教的意識が低いとされている。宗教的意識が低い中、キリスト教との出会いとは異なる価値観との出会いとして語られているが、Rambo が提唱した回心モデルのような第 1 段階、第 2 段階、第 3 段階とはっきりしたプロセスは TEM 図では立ち現れてきていない。

第 II 期：洗礼を受ける (制度的 OPP・BFP) に至るまで

〈コミュニティへの所属感が深まる、キリスト教入門講座〉（制度的 OPP）

- C: キリスト教入門講座や「聖書 100 週間」の講座などに通い、信仰を考える仲間ができた。
「聖書 100 週間」は聖書を一緒に 3 年間で読むので、家族のようになっていった。
H: キリスト教入門講座で世代や職業を超えて、同じ講座のメンバーと深く知り合うことができ、講座を通して社会的弱者の存在を初めて自分の中で問うことができた。

宗教性への影響は第一次的社会化の概念で括ると、〈家庭〉〈学校〉〈友人〉であり、協力者の内的な意味世界は各々異なる経路を描き、〈洗礼を受けようと思う、信仰を生きている人との出会い〉結果的 OPP に至る。そして、その後〈教会 (宗教組織) 〉へと収束してく様子が描かれていく。キリスト教入門講座や「聖書 100 週間」の講座は、Rambo の第 3 段階〈探究〉の意味や目的を見出そうとする場として考えられ、さらに第 5 段階〈新たな生活の基盤を築く人々の関係性〉へのプロセスに沿うものである。一般的に洗礼志願者は教会で開催しているキリスト教入門講座を受講し、宗教コミュニティの関係性の中に入らなければ

ならない。TEM 図では〈コミュニティへの所属感が深まる〉制度的 OPP として立ち現れてくる。

〈洗礼を受ける，でもまだ自分のものではない信仰〉（制度的 OPP，BFP）

C: 受洗までは入門講座があるが，受洗後はミサしかない。講座がなくなってフォローしてもらえないものが何もない。祈り方もわからなかった。

H: 教会活動雑務が増えミサにも出られない。バザーのために信者になったわけではない。

〈洗礼を受ける，新しいアイデンティティの形成〉（制度的 OPP，BFP）

E: 受洗後，召命を確認する集いにも参加し，のちに修道会の修道者の養成コースに入った。

F: 土日の教会活動が楽しかったので，毎日土日だといいなと思い，修道会に入会した。

G: 「キリストを伝える」というのが自分のミッションになり，自分の人生が変わった。

第Ⅱ期は〈洗礼を受ける〉制度的 OPP までを設定した。受洗はカトリック信者になるための制度的 OPP であるが，青年期で洗礼を受けた者と成人前期で洗礼を受けた者との経路が分かれる BFP も立ち現れてくる。青年期で洗礼を受けた者の語りデータでは，コミュニティへの所属感の深まりは「サークル活動のように楽しく」，受洗はその延長にあると推測される。受洗の高揚は信仰を深め，Rambo の提示している〈新たなアイデンティティの形成〉，〈信念や行動，感じ方の変容〉というプロセスに沿っている。しかし，成人前期での受洗者は，受洗による自分の内部からの変化による「内圧」と社会からの要求・要請・期待という「外圧」とによって，アイデンティティの危機が生じていると大きな差異が見られた。

第Ⅲ期：黙想体験による生活様式の再選定（EFP・VTE）に至るまで

〈祈りの試行錯誤〉（慣習的 OPP・BFP）

A: 4 日間の沈黙の中で祈れなかった。どうしたら自分の祈りができるのか？

C: 初めは祈り方が分からず，シスターから「神様が何を言っているのか聴いて下さい」と言われ何のことなのかよく分からなかったが，だんだん気づきを通して神の思いに気づくということがわかってきた。その後 1 泊 2 日の祈りに行くようになった。

D: 祈りながら，「自分はどうしても許されたい」という思いがあったが，神父から「それは愛されたいということでは？」と言われた。

E: 自分の召命を確認するために，神にいろいろ尋ねる祈りをしてみた。

H: 祈りというものがよくわからず，祈りに慣れるために，住まいの近くの修道院でシスター方と一緒に毎朝ミサに与るようにした。

第Ⅲ期は〈黙想体験による生活様式の再選定〉EFP および価値変容経験（VTE）までを

設定した。〈洗礼を受ける〉制度的 OPP の後に〈祈りの試行錯誤〉慣習的 OPP が現れ、祈りを意識しはじめている。教会は信者に日常の祈り、「教会の祈り」、主日の感謝の祭儀（ミサ）、典礼歴の祝日を中心とする定期的な祈りを勧めているが、語りデータでは「祈り方が分からない」、また祈り方をよく「意識していない」まま黙想体験をしているなど、祈り試行錯誤の段階がうかがえる。

カトリック教会の伝統ではさまざまな祈り方があり、祈りは口禱、黙想、念禱と進むとされている（カトリック中央協議会，2002）。しかし、一般的に祈り方を学ぶ機会は少なく、祈る習慣を作る、自分の内面に気づく祈りの体験を希求することは、個人差があり、その祈りへの希求が宗教性発達に大きく影響を与えていくことが語りデータから推測される。

〈祈りによる、新しいアイデンティティの形成〉

C: 祈り方がわかってきてから、福音書 1 つあれば祈ることができる。コンスタントに祈っていると、御言葉が光ってくる。祈りから神の呼びかけや自分の生き方を学んだ。

H: 祈りと振り返りの面接を通して、聖書の言葉が自分の生き方と馴染んできた。

〈底打ち体験による、アイデンティティの危機〉

A: 自分の存在を認めてもらいたいと思い仕事に依存していたこと、自分の子供に気を配っていないことに気づき、ふと夜中に死を感じて不安になる。「誰にも自分をわかってもらえない気持ち」。

B: 「労働者になりたい」と思い職業選択をした。しかし「教えること、教育者になりたい」という気持ちもあったことがわかったのが、15 年後のこと。「私はこれからどうしたらよいか」自分では決めることが出来なかった。

C: 修道者になろうと思った時には年齢がいていたので、受け入れてくれる修道会が限られていたが、その修道会との霊性と合わず退会。リーマンショックで生活の先行きが見えなくなり、不安になった。

D: 新宗教に入信した妻からの一方的な別居生活が 10 年続いたのち、離婚が成立。命をかけても守りたいと思っている子供に「会うことができない苦悩」が続いた。

E: 祈っているときに、初めて自覚していないに心の状態に触れた。心の奥の「寂しい」という気持ちに気づき、同時にイエスの孤独もわかった。

F: 修道者になってハンセン病療養所に派遣されたが、無資格な立場では何もできない。やりたいけどやれない、もどかしさがあった。「いつもブレーキ握りながら、自転車に乗っている感じ」。

G:多くの研究に携わり、多数の論文を発表してきた。しかし、その研究は「何も社会に貢献していないのではないか」と疑念を持つ

語りデータから、自分の心の動きや気づきを意識する祈りの習慣を通して、受洗後の揺らぎから、新しいアイデンティティを形成していく過程や、一方安定していたアイデンティティが生活様式や職業の再選定によって揺らいでゆき、その心の動きを祈りによって確認していこうとする過程が立ち現れてきている。自己の生き方や意識の連続性が断たれる危機は、人生に数多く存在している。TEMでは揺らぎのような内的状態を表す概念として「未定状況」を設定している。TEMにおける質的な変容を捉える分岐点(EFP)の「変容が発生するその前段には、常態化した有り様が、あるいは時に膠着したような俊巡や揺らぎ」(安田, 2015)が生じていることが見られる。

「未定状況」は、外圧・内圧による混沌(SD)と神への希求(SG)のせめぎ合いであり、〈アイデンティティの危機〉を立ち上がらせていることがTEMから示唆される。内省的な祈りの深化や「未定状況」からの解決を求める祈りとして、心の動きの方向だけでなく、その動きはどこから生じているのかと、内的な動きを識別する「霊操」へ向かい、〈黙想体験による生活様式の再選定〉経路へと収束していき、TEMの第IV段階へと繋がっていく。語りデータではこの〈底打ち体験による、アイデンティティの危機〉を振り返り、「底打ち体験で神と出会う」「底打ち体験がなければ神と出会うことがない」と語られている。この〈アイデンティティの危機〉からの経路が第二次的社会化(回心)のプロセスであると考えられる。〈洗礼を受ける〉制度的OPPは回心ではなく、第一次的社会化のプロセスと見ることができる。

第IV期：〈霊操体験による生活様式の再選定〉(EFP・VTE)変容プロセス

〈霊操を体験するー混沌から繋がりに気づき統合されていく〉(EFP・VTE)

- A:「自分の中の泉(本質)を探す」、ありのままを認めてくれる神の愛を感じた。
- B:職業の選び直しに際して、祈りのコミュニティの共同識別でメンバーが出した祈りの結論で、自分はどうしたらいいのか、自分の本当の心を気づいた。
- C:神の言葉は直接聞こえないが、気づきを通して神の思いに気づいていく。「パン(聖体)を探しなさい。いくつあるか見てきなさい」というビジョンに、あれこれ探し回って(選定)みたが、そのパン(聖なるもの)は自分の中にあることに気づいた。

- D:「何でこんなに酷い目に合わせるか」神への怒り，恨みをぶつけたとき，自分が味わった苦しみのパターンにとらわれていたことに気づいた。苦しい状態を解放するのは神しかいない。自分はイエスに大切にされていると感じた。
- E:準備し，祈り，自分が選ぶべき道はこっちだとわかると，それをまた振り返る。自分の心はどう動いていたのか，振り返ると大事なところのポイントの確信がもてる。
- F:黙想で「創られた通り」と答えが出た。「創られた通りの私」を掘り下げていきたい。
- G:神は限りなく私を愛してくれていると感じたこと，これが自己変容のポイントだ。神は語らない，心がセンサーだ。同伴するイエスを中心に置いているから自身を統合できる，自分の立ち位置やミッションの基本姿勢を持つことができた。
- H:良いことも，悪いことも，すべてが繋がっていること，意味のあることに気づき，そこに神の計らい，深い愛があると感じた。私もそれに応えたい。

第Ⅳ期は〈黙想体験による生活様式の再選定〉(EFP・VTE)変容プロセスを設定した。この過程までで，第一次的社会化では〈家族〉，〈学校〉，〈友人〉の類型が見られ，その経路が〈キリスト教入門講座〉や〈洗礼を受ける〉制度的OPPで収束していく。そして第Ⅱ期，第Ⅲ期ではアイデンティティの危機型(30歳前後の受洗)と新しいアイデンティティの形成型(20歳前後の受洗)と異なるプロセスを辿るが，人生の危機に出会う度に祈りの体験を通して，アイデンティティ再体制化のプロセスが行なわれていることが語りデータから示唆された。さらに，祈りの体験を深め，〈霊操体験による生活様式の再選定〉FEPに収束していく過程が見られた。語りデータから，黙想によって「神との出会い」があり，「神の思い」「神の計らいや深い愛」を感じ，「自分の本当の心」に気づき，生き方の選定をする識別という体験をしていることがわかる。

黙想は思考，想像，感情，および望みを働かせて，祈りながら行う探究とされ，考察した主題を生活の現実と結びつけながら，信仰をもって自分に適応させる目的としている祈り方(カトリック中央協議会，2002)であることから，対話的自己(DS)による状況変化が新しいポジションをもたらすものであると言えよう。それは発生の三層モデルで記述することができる。まず第1層に入ってきた福音(聖書)から汲み取ったメッセージは，第2層において，そのメッセージを個人史に結びつけ，意味づけされることで「同伴するイエス」という，個人を動かす機能を持った促進的記号(PS)が発生し，第3層で「未定状態」の混沌から出来事の繋がりや心の動きがどこから来るものか気づき，主観的意味が価値に統合されていくという，価値変容経験が起きていると解釈される。(Figure 2-2)

〈神の無条件の愛を感じ、内発的に動機づけられた宗教性へ〉（結果的 OPP, SPO）

A:神に愛されていることを感じてから、自分の囚われを手放せるようになり、自然に内面的生活が整えられていった。今与えられているもので、世の中に関わっていきたい。

B:職業選定の際に識別をした。祈りで識別をしながら仕事していると皆、心がひとつになる時がある。心がひとつになり、取り組む仕事は祈りそのものを感じる。

C:その時は気づかないが、振り返ると神の恵み、今の仕事に就いている計らいに気づく。今までの社会経験を生かせる司書教諭として工夫し、生徒たちに接したい。

D:社会的価値観から神の価値観による「識別」で仕事の見直しをした。

F・H:自分のタレントを生かす喜びが、神に応えているという確認になった。

G:教職や理事など多くの仕事に携わっているが、自分の仕事のメインは葬儀屋だと思っている。愛する人を失った人は、その時から深い祈りに入る。そこに寄り添いたい。

TEMにおける目標領域(ZOF)とは等至点の幅であり、将来の見通しに関する概念であるが、「神の無条件の愛を感じる」結果的 OPPにより内的に動機づけられた、統合された個人的指向性(SPO)によって、キリストに倣うというZOFが設定される。つまり、キリスト者になるということは、キリストに倣う、一つの生き方を選び取ることであり、それが成就できるかできないか、一生涯試行錯誤(絶えざる努力を行う力を志向するというSPO)していく生き方の決断の連続にほかならない。そしてそれは選び取ることができる自由な選択である。イグナチオの黙想は、プロセスをよく見て心の動きがどこから来るものなのか、どの方向へ向かっているのかを見るように促している。信者になり、そして修道生活を選んだ協力者3人は、その祈りによる識別で生き方の選定として修道生活を辞めることを選び取っている。

以上、TEMを用いて〈黙想体験による生活様式の再選定〉EFPを設定し、カトリック信者の宗教性発達過程を描いてきた。その経路において「外圧・内圧」による混沌という社会的方向づけと、神への希求という社会的助勢のせめぎ合いが、分岐点(BFP)を立ち上がらせていることがわかる。

第4項 結論

本研究の目的は、非キリスト教的文化背景を持つ社会や文化の中で、カトリックの信仰を選んでいく径路を、Reich(1992)の宗教性発達の5条件に留意しながらTEAの概念ツールを用いて記述することで、日本のカトリック信者の宗教性発達の仮説モデルを生成し、

宗教的意味システムのプロセスの知見を提出することであった。

非キリスト教文化の中で、宗教性に影響を与える要因として家族、学校、友人、宗教組織、本やマスメディアなどを第一次的宗教的社会化とする先行研究（Berger&Luckman, 1996）が示す通り、カトリックの信仰を選んでいく経路に影響を与える要因として第1に家族、第2に学校、第3に友人が挙げられた。受洗のきっかけはライフステージによって異なり、青年期に受洗した者は「共同体感覚」が受洗の動機となり、成人前期に受洗した者は「身近な死」を感じたことが受洗の契機となっている。

一般に回心とは、啓示や悟りといった宗教経験を境に、その人の人格や生活様式、生などが根本から一変するような過程（徳田, 2010）を指す。受洗しても、実存的に「神に出会う」体験をするまでは宗教的な第一次的社会化であると考えられる。祈りの習慣を経て、さらに深い祈りを通して、「同伴するイエス」という促進的記号が発生することで、初めて第二次的社会化である回心体験が生じていることが示された。〈祈りの試行錯誤〉から見られるように、祈りの習慣や深化は宗教教育によるものであり、これらの「漸次的な回心」は Selbie (1926) の「道徳的自己」の「統合的過程」と言える。

回心をアイデンティティの変化や世界観の変化として見ると、岡本（2007）が示すように、自分を取り巻く人々、家族、所属集団、社会からの要求・要請・期待という「外圧」と身体的機能や知的機能の変化、心理的発達・分化による自分の内部からの変化による「内圧」のいずれか、または両方によって心が揺さぶられ、自己の生き方や意識の連続性が断たれることで、アイデンティティの危機が生じている。その「外圧」「内圧」による混沌状態と、その危機からの回復を支える力として、困難な局面に直面した時、誰か信頼できる人が見守ってくれているという基本的信頼感（Erikson, 1950）、つまり神への希求とのせめぎ合いにより分岐点（BRP）が立ちあがり、それが祈りの深化という宗教行動に向かわせている。

人生の危機は数多く存在しており、その度祈りを通し、アイデンティティの再体制化のプロセスを描いていくものと推測できる。発生の三層モデルで示されたように、促進的記号（PS）「同伴するイエス」は、強化され内在化した「親性」となって、人生の危機や心が弱ったときに、その人を支える力（岡本, 2007）、となっているのではないかと考えられる。人生における「底打ち体験（祈る意外には解決の方法がない）でこそ神に出会う」という語りデータに表れているように、発達的变化が生起するメカニズムや、発達を促進する要因が示された。

また、Glock(1962)が提示した宗教性の構造のうち、イグナチオ的黙想という宗教「行動」は、その黙想プログラムの構造から教義や教典に関する情報を有する「知識」、宗教的な教えを信じる「信念」を同時に養い、それによって宗教的感情や回心体験などの宗教的経験の「体験」が生じていると推測される。黙想により人生の困難の意味づけが行われ、それによって愛着・執着・囚われから解放され、「ありのままの私を受け入れてくれる、神の無条件の愛を感じる」という「個のアイデンティティ」の獲得という「報酬」が得られており、さらに自分は他者の役に立つ「関係性にもとづくアイデンティティ」の確立により、共同体における「責任」を担うという宗教性の構造が語りデータから得ることが出来た。

以上、霊操の体験を通し、アイデンティティの再体制化のプロセスを描いていくモデルが示された、外圧、内圧による混沌状態が発達を促進する要因となり、困難な局面に直面した時、その危機からの回復を支える力として、神への希求が発達を促進する要因として働いている。そのせめぎ合いによる内的な対話が宗教性発達の契機となっていることが明らかになった。祈りの体験による変容プロセスは、混沌とした未定状態から日々の出来事や個人史のつながりに気づいていく「漸次的な回心」であり、それは統合的過程であることが示唆された。

また、霊操という祈りの体験を通して、記号の読み解きである、意味形成のプロセスが促進的記号発生 of 三層モデルで示唆された。霊操プログラムは黙想で与えられた『聖書』のメッセージを受け取り、個人史とのすり合わせで、意味づけがされ「同伴するイエス」という促進的記号が発生することで、宗教的価値観へ統合されていくことが明らかになった。

Table 2-1 研究協力者のプロフィール

事例	性別	年代(調査時)	受洗	最終学歴
A	女性	50代前半	20代前半で受洗(プロテスタント), 30代前半でカトリックに改宗	短大
B	男性	60代後半	中学3年生	大学院(修士)
C	女性	50代前半	30代前半	大学
D	男性	50代後半	20代後半	大学院(修士)
E	男性	40代後半	20代前半	大学院(修士)
F	女性	40代後半	20代前半	短大
G	男性	60代後半	20代前半	大学院(博士)
H	女性	50代前半	30代前半	大学院(修士)

Table 2-2 TEA 及び TEM 図で用いた概念と「カトリック信者の宗教性発達過程」における意味

概念	本研究における意味
「歴史的構造化招待」 HSI (Historically Structured Inviting) [意味] 等至点的なイベントを経験している協力者を集める	非クリスチャン家庭に育ち成人洗礼で、「黙想体験による生活様式の再選定」(EFP)をしたカトリック信者
「等至点」 EFP (Equifinality Point) [意味] ひとつのゴール・目標となるイベント	黙想体験による生活様式の再選定
「目標の領域」 ZOF (zone of Finality)	キリストに倣う、一生涯試行錯誤
「統合された個人的指向性」 SPO (Synthesized Personal Orientation)	内発的に動機づけられ、宗教を実践(lives)する内発的宗教性
「両極化した等至点」 P-EFP (Polarized Equifinality Point) [意味] 理論上想定できる等至点と対極の意味をもつイベント	生活様式の混沌 (P-EFP は等至点を定めることによってある種の価値付けを回避するためのもの)
「発生の三層モデル」 TLMG (Three Layers Model of Genesis) [意味] 個人の内的変容を個別活動レベル, 記号レベル, 信念・価値観レベルの 3 つの層で促進的記号の発生と価値変容を記述・理解するための自己モデル	価値変容経験 : VTE (Value Transformation Experience) は混沌から繋がりに気づき, 統合されていくこと。促進的記号 : PS (Promoter Sign) は価値思考として深く内化され作用する記号としての「同伴するイエス」
「対話的自己」 DS (Dialogical Self)	祈りながら心の動きをみる自己内対話
「必須通過点」 OPP (Obligatory Passage Point) [意味] ある経験をするにあたり, 必ずゆきあたる出来事やつきつけられる行動選択	制度的 OPP (制度的存在) : 入門講座受講, 洗礼を受ける, 慣習的 OPP (多数が経験) : 祈りの体験, 結果的 OPP (制度でも慣習でもないが多数が経験) : 神の無条件の愛を感じる
「分岐点」 BFP (Bifurcation Point) [意味] 何らかの局面において転換点が立ちあがる	①制度的 OPP (受洗) ②慣習的 OPP (祈りの試行錯誤)
「社会的方向づけ」 SD (Social Direction) [意味] 等至点に向かうのを阻害する力	外圧・内圧による混沌(愛着・執着・囚われ)
「社会的助勢」 SG (Social Guidance) [意味] 等至点への歩みを後押しする力	①第一次的社会化 ②神への希求

情報の外在化：内的に動機づけられた宗教性

(人生の困難の受け入れ, 与えられた使命で「実」を結ばせたい, 共同体感覚)

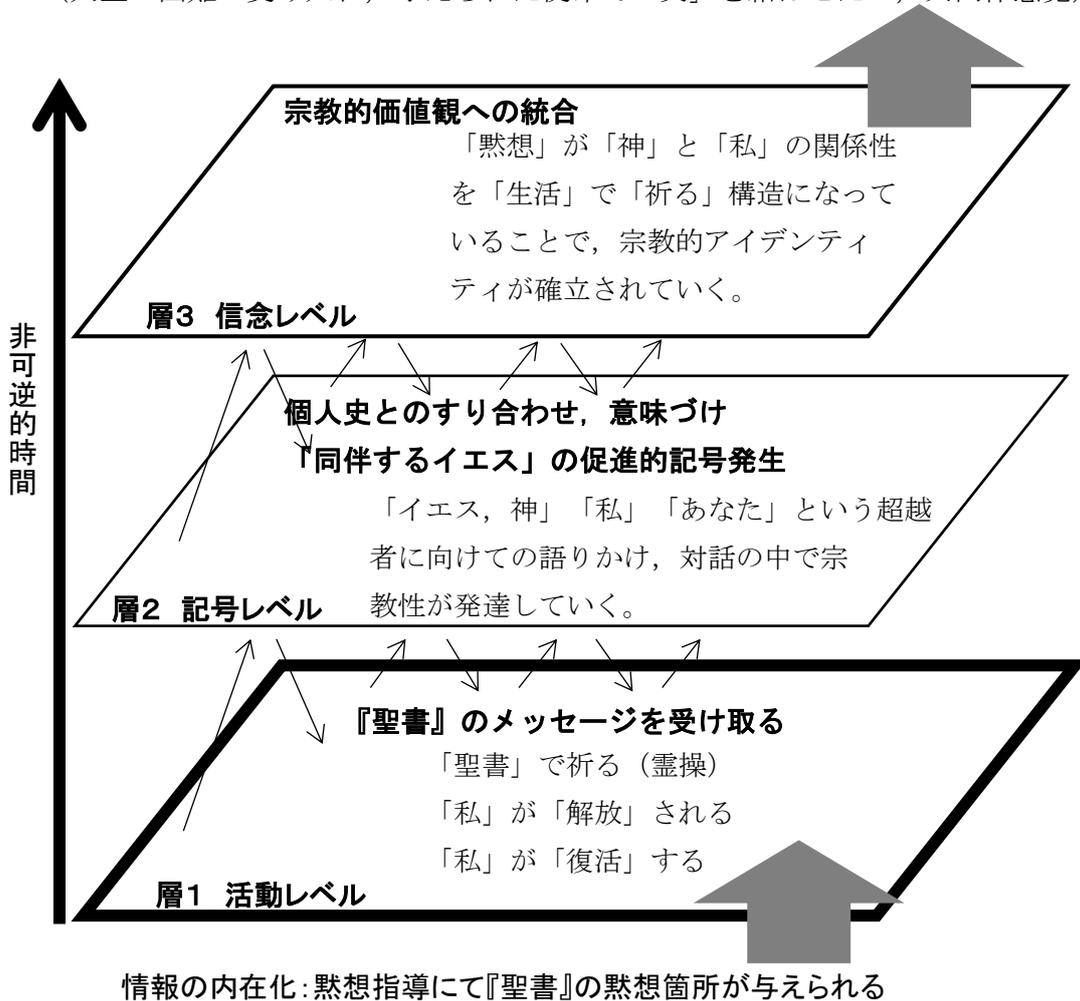


Figure2-2. 発生の三層モデル

第2節

ロヨラのイグナチオの伝記研究：生育史分析による宗教性発達の検討（研究2）

第1項 問題と目的

第1節で取り上げたカトリック教会の伝統的な祈りのひとつである「霊操」は、イエズス会（16世紀に設立されたカトリックの男子修道会）初代総長であるイグナチオ・デ・ロヨラが体験し、記録、教導した黙想および観想の祈りの方法である。その目的は、神との相互の交わりに深く入ってゆくことで、「霊操者（祈る人）が秩序づけられていない心の動きや愛着に流されることなく、真の自由を持って選び、決断できるためである」（Fleming, 1986）。祈りと霊的指導（祈りの同伴）を基盤とし、一定の期間の黙想を通じて行われる、順序の整然とした霊的訓練の一つの過程である。その過程には3つの基本的要素（祈り、静修、霊的指導）が含まれている。

『霊操』はイグナチオの体験とその後の自身の反省や使徒的活動の経験、さらに数年の勉学期にも徹底した改作が行われた著書で、祈る人が徐々に日常生活の価値基準を整えていくよう、同伴する霊的同伴者（指導者）のために書かれたものである。『霊操』は *Spiritual Exercises* と表記され、いろいろな霊的な運動（*Exercises*）から成り立っている。神学における『霊操』やイグナチオについての研究は多くなされており、イグナチオ・デ・ロヨラの伝記資料（『書簡集』、『霊的日記』、自叙伝『ロヨラの巡礼者』）や『霊操』、『会憲』についての研究書も多く出版されている。

イグナチオの霊性は、キリスト中心的な霊性と言われており、神によって造られたすべてのもの、人間のあらゆる能力を役立て、神の意志を識別し、実現しようとする積極性もその特徴である（神吉、1996）。

また、宗教心理学の分野では、Gomez(2001)がイグナチオの体験は現代的な用語を用いれば、強迫観念やその行動の内容が *ego-syntonic* であることを取り上げ、イグナチオが強迫性障害 (*obsessive-compulsive disorder: OCD*) と強迫性人格障害 (*obsessive-compulsive personality disorder: OCPD*) の両方に苦しんだと見る Meissner (1992) の研究を紹介し、イグナチオの「悩み」に対する彼自身の闘いについての記述は、強迫観念的な行動を「治療的に」扱う最も初期に文書化された試みであるとしている。

生涯発達という視点において、どのようにして人格が形成されるのかを探究する方法として、伝記資料を用いた自己心理学の研究方法がある。自己心理学における伝記研究法の伝記

資料とは、伝記・自叙伝・書簡・日記・回想録・自伝的創作・逸話などの人間記録のすべてを含む（三好，2014）。伝記分析は、人間をその全生涯の視点で捉え、動機・性格特性・自我感情・アイデンティティ・時間的展望などといったテクニカルタームによって、把握し記述することで、その人格形成過程を把握するものである。伝記分析では心理＝歴史的分析という視点が重要であり個人の生きている文化的環境や出来事などの歴史に、個人がどう参加するか、歴史的アイデンティティを持つかという点に注目する（西平，1996）。James の『宗教的経験の諸相』や Erikson の『青年ルター』『ガンディーの真理』などは伝記資料を用いて、個人と歴史の相互性の心理学的考察を試みたものである。

また、本研究が依拠している文化心理学は解釈学的心理学であり、Bruner（1999）によると、人がその文脈の中で何をしているのか、また何をしようとしているのかを問うことが常に必要であるとしている。このような自己の研究 - 伝記分析を Bruner は、自己は個人とその人が参加している文化の双方によって定義し、意味に焦点を当てるべきとしている。

伝記資料を心理学の知見から再分析することは、生育史と生涯の結末の因果性をつなぐ心理学的仮説を立てそれを論証、検証する作業である。それは生涯発達の過程で人間の心理力動を発見するための有効な手段であり、心理学的概念に関する知見を得ることができ、意味や価値をとりあげる問いに対しての伝記分析の有効性を明示している（西平，1996；大野2008）。西平は個人の伝記を資料にしながら、個人の研究ではなく、そこに人格形成過程という心理学的真実を追うというのが、伝記分析の特質であることを挙げている。

そこで本研究は、自己の体験から編み出され、人々を霊的に助ける主な手段とした祈りのプログラム『霊操』の著者であるイグナチオ・デ・ロヨラの伝記資料を、TEA（複線径路等至性アプローチ）を用いた生育分析によって、心理学的に考察し、個人と歴史の相互性の中から信仰を深め、信仰に生きる人の特徴を明らかにし、その宗教性発達を検討することを目的とする。

第2項 方法

1. 分析対象

カトリック教会の伝統の中で、黙想指導書として使われてきた『霊操』の作家で、16世紀のスペインの霊性家、イエズス会初代総長イグナチオ・デ・ロヨラの伝記資料（『書簡集』、『霊的日記』、自叙伝『ロヨラの巡礼者』）及びそれらの研究書を用いた。また伝記資料ではないが、イグナチオが執筆した『霊操』『会憲』も参照文献とした。一次資料及び研究書であ

る二次資料は主にスペイン語およびラテン語などであるため、それらを参照し、本稿では主に翻訳版を用いた。なお、伝記資料一覧は文献に記載している。

2. 分析手順

分析手続きは大きく2つの方法で行った。まず第1に生育史分析の個別分析法として、生育史と行動の関係及び暫定的な統合を試みた。(a)イグナチオの伝記資料を読み、カードを作成し、列挙した。(b)心理学的理解に必要な記述とその心理学的解釈と根拠を提示、生育史心理学的問いの提起を記述した「生育史心理学的年譜」を作成した。(c)生育史心理学的問いを出し、イグナチオのある特別な心理現象・行動様式・生活特性がいつどのような条件下にどのような形で形成されていたかを、「生活空間要因連関図」に図式化した。(d)人格形成過程をテーマ分析で仮定した。

心理現象や行動の成立の因果関係を図示した、生活空間要因連関図の作成はLewinによって提唱された行動 B =関数 f (人格性 P ・環境 E)= f (生活空間 LSp)に基づき、縦軸と横軸を取り、心理学的問いにあたる問題にすべき行動(B)を置いた(TEM図での分岐点となるもの)。さらに環境条件(E)を書き、心理学的な仮説である人格特性(P_1)、アイデンティティの諸相を設定し、その心理学的仮説を裏付ける説得的資料や人生に影響を及ぼすと考えられる全生活空間の理論的枠組みとアイデンティティの様態の枠組み、心理-歴史的視点・実存分析的視点にしたがって、生育史で重要なものを枠の中に記述し、提示した。さらにそれぞれの関係性を線や矢印、記号で示した。この手続きの際には自叙伝からの引用を明示し、研究書を参考にして解釈したものと分けて提示した。

第2に、生活空間要因連関図に、複線径路・等至性アプローチ(Trajectory Equifinality Approach: TEA)を用いて、複線径路・等至性モデル図(Trajectory Equifinality Model: TEM)を描き加えていった。TEAは、他者との対人相互作用を社会的な場として理解しようとするLewinの場理論に近いシステム論であり(石盛, 2015)、TEAは生を享けた個人がその環境の中で生命を維持し、生活し、人生をまっとうするために記号を取り入れつつ生きていくプロセス描く方法である(サトウ, 2015)。生活空間要因連関図では、人を新しい選択肢へと誘う価値観や習慣が変容する分岐点の分析が深められないこと、一方分岐点に重きを置くTEM図の作図だけでは、人生に影響を及ぼすと考えられる全生活空間の捉え方が簡略化してしまうため、個人の径路の深みを描くことを目的として、生活空間連関図にTEM図を描き加え、生活空間要因連関TEM図の作図を行った。生活空間要因連関図にTEA

を用いることで、人生の径路で生じた分岐点において、人を新しい選択肢へと誘う価値観や習慣の変容に焦点を当てることや環境条件、行動、人格特性を記述することで、全生活空間を捉えることが出来る。TEA では「歴史的構造化招待」(Historically Structured Inviting : HIS)である研究者が知ろうと思う経験事象「等至点」に焦点をあてたサンプリングを行う。本稿においてはイグナチオの帰天(使命を果たして逝く者の死去)を、「等至点」

(Equifinality Point : EFP)と設定し、そこに至る前の人生の経路を検討した。TEA において1人を対象とした研究では、個人の径路の深みをさぐるができるとしている。

さらに、記述においては宗教性発達のプロセスと構造を解釈する指標として、Glock (1962)が提示した宗教性の5次元、Reich (1992)の宗教性発達を記述する5条件、(a)精神(知・情・意)のプロセスへの言及、(b)個人の精神と生物物理学的・社会文化的・霊的な現実との調整プロセスとしての発達像の描写、(c)個人の宗教性発達と関連する社会的状況への視点、(d)個人差と普遍的特徴の説明、(e)発達の変化が生起するメカニズムや、発達を促進/抑制する要因に留意しながら、イグナチオの生育史的問いとしての宗教性発達を検討した。

3. 方法論的妥当性の検討

イグナチオ・デ・ロヨラの伝記資料のうち、本研究の目的である宗教性発達を論じられるデータを選別し、得られたデータをもとに、生活空間要因連関 TEM 図の作図の一連の作業は著者一人で行ったが、各概念の設定、図化の方法、図の解釈・検討においては TEA 研究会に参加し、TEM 図の分析方法や作成手順について理解を深めた。さらに、各概念の設定、図化の方法、図の解釈・検討においては、妥当性の検討のために宗教心理学を学ぶ大学院生・教員らによる宗教心理学研究会において発表を行った。また、生活空間要因連関図の上に TEM 図を重ねた、生活空間要因連関 TEM 図の作図に関しては、TEA 開発に携わった専門家による約 120 分の個別スーパービジョンを受けた。議論や助言を基に適宜修正を加え、生活空間要因連関 TEM 図 (Figure3-1, 3-2)、生育史分析の理論的枠組みと本研究による解釈 (Table3-1)、TEM 図で用いた概念と本研究における意味 (Table3-2) の記述を行った。

第3項 結果および考察

1. TEA を用いた生育史分析の概念説明と本研究による位置づけ

すべての人間の記録は背景の歴史的状況と関わることから、個人の波長が歴史の波長と一

致しているかどうかは大きな岐路となる（西平，1996）。イグナチオの靈性（靈性とは神をどのように感じ体験するかで、イグナチオの靈性は識別と召命から始まるとされる）の研究書を記している Rahner（1974）も、「教会における完徳の理想は、具体的に存在する人間のうちにしか形成されず、理想の原型を示し、それを人々にも伝えていった歴史上の人物を研究し、その性格や取り巻く状況を知る以外ない」としている。それは、生い立ち・先祖・教育・性格・気質、そしてキリスト教の伝統が、政治的にも宗教的にも変革の時代を生きた、イグナチオの根本思想の形成に及ぼした影響を調べることでであると述べている。

イグナチオは16世紀当時として全く新しい、活動の中における観想を含むという「神の栄光と共通の福祉のため」（Falkner，2014）に使徒的な働きを行う修道会、イエズス会を6人の友と設立した。その修道会の靈性、すなわち信仰によって神に、愛によって他者に奉仕するという在り方に、イグナチオ自身の宗教的体験がどのように関与しているのか。「個人の宗教への関与・傾倒の有り様が、社会（共同体・歴史・価値観）のある生育環境からどのように影響を受け、与え返し（相互作用）、その結果としてどのようにして宗教性を帯びた人格が形成されるのか」という心理学的問いを設定して、イグナチオの伝記資料に取り組んだ。

生活空間要因連関図から、心理学的な問いに対して、アイデンティティ（同一性）の危機が、Glockの4次元「信念」、「知識」、「体験」、「行動」に結び付き、「報酬」「責任」という「効果」として、『靈操』を生み出し、修道会創立に至るという、歴史的アイデンティティや成熟した宗教的アイデンティティの獲得が見出された。生育史分析法の理論的枠組み（三好，2014）から全生活空間、アイデンティティの様相、心理-歴史的視点と実存分析的視点はTable 3-1に整理している。

さらに、生活空間要因連関図にTEAの概念を加えた（Table3-2）。EFPまでの経路は16世紀のスペインバスク地方の慣習として〈幼児洗礼〉を受ける制度的必須通過点（OPP）を経て、15歳での慣例的必須通過点（OPP）は親が望んだ聖職者の道ではなく、王室財務長官の小姓という〈職業選択〉をし、26歳での〈職業再選択〉の結果的必須通過点（OPP）により、念願の軍人（騎士）になる。誕生から宮仕えの青年に育っていく過程において、伝記資料から〈ロマンスと決闘を楽しむ遊興的雰囲気の中での強い名誉欲と肉欲〉（社会的方向づけ：SD）と〈王に使える騎士的態度〉（社会的助勢：SG）による内的せめぎ合いを葛藤と特定した。

また、イグナチオにとって大きな岐路となったのが、パンプローナの戦いによる負傷であ

る。その病床にあって宗教の一次的社会化から、〈宗教性に影響を与える〉SG と〈世俗的な名誉を求める〉SD のせめぎ合いが内省を促し、のちに靈動弁別といわれる体験の基になった価値変容経験（VTE）を経て、二次的社会的化（回心）という、2つの結果的必須通過点（OPP）が、分岐点（BFP）として立ち上がっている。伝記資料からこの BFP において、発生の三層モデル（TLMG）が生じ、世俗から神へとその視点が大きく転向していったことがみてとれる。靈動弁別は識別とも呼ばれ、様々な動きや流れの根源や方向性、結果について内的に分析し、判断することをいう。

巡礼と修行の中で〈神の望む方へ押しやる神の霊（ pneuma ）〉SG と〈誘惑・疑悩・苦悩という神の望む方の反対に押しやるもの〉SD のせめぎ合いによる対話的自己（SD）の体験を生かして、靈動弁別の規則を確立する VTE を経て、宗教的アイデンティティの確立という統合された個人的志向性（SPO）が見出された。さらに長期間に渡る、神の望む方の反対へと押しやるもの（SD）と神の望む方へ押しやるもの（SG）のせめぎ合いは識別という習慣を作り、すべての出来事に神を見るという人格特性の形成に繋がっている。その過程における宗教的体験 VTE から、イエズス会設立の引き金となる「一致の神秘」と「奉仕の神秘」という個人的志向性（SPO）が立ち上がってきている。それはイグナチオとその友人たちにとって、目標の領域（Zone of Finality : ZOF）になり、新しいタイプの修道会設立への道しるべとなった。

その生涯を通して、識別という対話的自己（DS）から結果的必須通過点（OPP）が生じていることが、節目ごとに見られた。等至点への歩みを後押しする力（SG）と等至点に向かうのを阻害する力（SD）のせめぎ合いによる対話的自己（DS）や、聖母の示現、神秘的照らし、ラ・ストルタの示現という宗教的体験が価値変容経験となっており、未来への絶えざる努力を行う力（SPO）が立ち上がっている、各地点については Table3-2 で整理している。

本研究では生活空間要因連関 TEM 図によって、非可逆的時間の中で人の記録に、社会との相互作用で何が立ち上がり、刻まれるかを示すとともに、結果としてどのようにして宗教性を帯びた人格が形成されるのかといったプロセスが示された。

2. 時間軸と次元の構築による理解

伝記資料から大きな節目ごとに、生活空間要因連関 TEM 図を〈ロヨラ城での誕生から宮仕えの青年へ：0 歳～29 歳〉を第 I 期、〈世俗から神への転向とマンレーサの宗教体験：30

歳～31歳)を第Ⅱ期、(巡礼と勉学時代 32歳～48歳)を第Ⅲ期、(イエズス会誕生から帰天まで：49歳～65歳，そして今日のイエズス会)を第Ⅳ期に分類できた。期間毎の生活空間要因連関 TEM 図による分析から得られた示唆を考察として記述した。

第Ⅰ期【ロヨラ城での誕生から宮使えの青年へ：0歳～29歳】 Figure3-1

1491年，イニゴ・ロペス・デ・ロヨラ（イグナチオの本名）はスペインのバスク地方の地方貴族の第13子の末っ子としてロヨラ城で生まれる。ロヨラ家は「高貴な騎士・偉大な兵士」と呼ばれていたようにスペイン王家の忠誠を誓う家柄である。幼児期は近隣の農家の乳母に預けられていたことから，この家族特有の気高い心情と小作地の素朴な雰囲気とが融合された感覚を育てた（Rahaner, 1974；田辺，1986）。Rahanerはキリスト教の伝統に最初にふれるのは，生家で受ける宗教教育であるとしている。イグナチオが6歳の時に亡くなった母や，敬虔な兄嫁のマグダレナ・デ・アラオスの影響，アルカラで教会の審問官に当時のスペイン（スペインの国土回復運動：レコンキスタ）においては重要な意味を持つ「私の故郷にはユダヤ人はいない」と答えたように，カトリックの信仰が純粹に保たれた地方において，基本的信頼感が育まれる環境で育った。

ロヨラ城の城主である父は，末っ子の行く末を案じて聖職者の道へ歩ませようとしたが，騎士物語に憧れるイニゴは武人としての榮譽で名を上げることがを望み，15歳で王室財務長官の小姓としての務めを始める。26歳でナバラ副国王の侍従となり，27歳から念願の武人としての生活を送るが，パンプローナの戦いまでの2年半と極めて短期間ながら，勇猛果敢に判断力のある戦略家として振る舞い（垣花，1984），この青年特有の有能感（コンピテンス）がうかがえる。

自叙伝では「かれは26歳のときまで世俗の虚栄におぼれていた」（考証によって記憶違いで当時30歳とみなされる）とあるように，回心までの生活は遊興的雰囲気の中で成長する。しかし，イニゴの騎士道的精神と世俗の虚栄におぼれていた生活の間により，数年にわたる内的戦いを引き起こしたとみられており（Evangelista, 1966；Rahaner, 1974；Guibert, 1963；垣花，1984；Catret, 1985；田辺，1986），ここにアイデンティティの拡散があったこと推測される。この生い立ちや宮廷生活での教育や経験など生育環境を，Rahanerは貴族であり軍人であったイグナチオの，形成されてゆく理想の下絵が少しずつ現れている時期と見ている。

第Ⅱ期【世俗から神への転向とマンレーサの宗教的体験：30歳～31歳】 Figure3-1

イグナチオは1521年30歳の5月、パンプローナの攻防戦で瀕死の重傷を負う。歴史的にはバスク地方で起きた局地戦に過ぎなかったが、イグナチオにとっては、岐路となる出来事になる。この出来事でイグナチオの王に対する忠実さや敵軍も感心させる勇猛心、また治療にあたっては不屈の意志力と苦痛への堅忍の特性が見られる。瀕死の重傷から奇跡的に回復し、その療養中にしかたなく『キリスト伝』とキリスト教の聖人伝である『キリストの華（黄金伝説）』を読む。この2冊の本との出会いがイグナチオの宗教性発達過程において、その宗教性を促進する契機となる。自叙伝によると「世俗的なことを考えているときは…うら寂しい感じがして…。聖人伝でみたいろいろな苦行をしようと思ったりすると…満足感や喜びが残った」が、どこか聖人と徳を競う心があったと見られている。イグナチオに内在する有能感（コンピテンス）や耐える力、自我の強さ（苦難に対する耐久力・態度など）は職業的・個人的アイデンティティの危機を克服する回復力となった。

「キリストと聖人の生涯の大切なところを要約し、書き抜こうと思い立ち、念入りに本を写しはじめた」（自叙伝）そのノートは4.6インチサイズ版で約300頁も及ぶ。また、「聖フランシスコがしたことを、聖ドミニコがしたことを、もしこの私がするとしたらどうだろう」とたびたび自問していたことが記されており、聖人の徳を「取り入れる」ことで宗教性が促進されていく。まだ、混沌状態ではあるが宗教的な読書を通して、新しい世界が開ける宗教的社会化が見られる。Berger& Luckmann（1996）は、宗教性に影響を与える要因として家族、学校、友人、宗教組織、本やマスメディアなどを挙げ、第一次的宗教的社会化としている。第二次的な社会化としては回心という概念が用いられることが多い（杉山, 2011）。イグナチオは読書と祈りを通して、人間を動かす2つの心の動きに気づいていく。そして聖母の示現により、王の騎士としてカテリーナ姫に仕えるという栄誉から、真の王であるキリストの騎士として貴婦人である聖母に仕えるという物語に書き換えられる価値変容体験を経て、回心となる二次的社会化を迎えるのである。この体験はのちに、霊動弁別といわれる心の動きの源泉や方向性を見極める態度の始まりとなった。『霊操』の生路選定に関する章は、このロヨラ城で静養中に体験した心の動きや考えの移り変わりから学び得たものである。

1522年3月、回復したイグナチオはロヨラ城を出て巡礼の旅に向かう、モンセラットを経てマンレーサに到着し、洞窟で祈りと苦行の生活を始める。このマンレーサはイグナチオの霊的学び舎となった場所で、神が自分に何を望んでいるのかを知るために心を整える「心の体操」のための指導書『霊操』（李, 2016）は、この時期に書かれたとされている

(Evangelista, 1966 ; Rahaner, 1974 ; Guibert, 1963 ; 垣花, 1984 ; Catret, 1985 ; 田辺, 1986) 。マンレーサでの内的変化は、初めの平穏な時期、次に内的動揺を感じ始めた霊魂の闇夜の時期、最後に父と子と聖霊の三位一体について理解する照らしの時期と明確に分けることが出来る。イグナチオはこの体験を通して、神の望む方へ押しやる神の霊（プネウマ）である SG と誘惑や疑悩、苦悩といった神の望む方の反対へ押しやるものである SD のせめぎ合いから霊動弁別の規則を見出した。「教養のない粗野な子ども」のようであるイニゴを、神は「ちょうど小学校の先生」のように教え導いたと、イグナチオは自叙伝で語っている。

そして、カルドネル川の示現と言われる、神の神秘と目に見えるキリストの国である教会について理解する神秘体験を通して、内的なものだけに傾いていた個人的な観点から、教会的な観点の使徒的な人、隣人に奉仕する人へとイグナチオは変容した。自分が何を目指し、一切は何に向けられるべきか、自分のすべての行動の目的を、理解したのである。それは宗教的アイデンティティの獲得と言えよう。この神秘体験がどのようなものであったか詳しく記されていないが、イグナチオに及ぼした作用について見ていくことで明らかになる。この照らしののち、イグナチオは『霊操』の著作に取りかかった。

第Ⅲ期【巡礼と勉学時代 32 歳～47 歳】 Figure3-2

マンレーサの体験からイグナチオは「人々に必要な助けを与えて神に奉仕する」ため、エルサレムの巡礼に向かう。しかし、「エルサレムにとどまることが、神のみ旨でないとわかった後、今度は何をすべきか絶えず考え続けた。やがて人々の霊魂を助けるためには、しばらくの間、勉強をしたらよいと思った。そのつもりでバルセロナに行くことに決めた」（自叙伝）。この頃ヨーロッパは、政治的にも宗教的にも変革の時代であり、キリスト教の異端問題が台頭していた。イグナチオも異端問題で疑いをかけられるなどの困難にあった。それでも、イグナチオは人々の霊魂を助けるという大きな目的を実現するまで、さらにはイエズス会を設立するまで、巡礼と勉学の時代という長い宗教的モラトリアム期を深々と享受した人物であると言えよう。

イグナチオにとって、哲学や神学を学ぶ主要な目的は、自分の信仰体験を当時の教会の教えに基づいて表現することであった。人々に指導し続けた『霊操』に神学的な表現を付け加えながら整理し、『霊操』はまとめられていった（李, 2016）。また、自分と志を同じくする者を積極的に探し、後にイエズス会を設立する 6 人の仲間を得て、モンマルトルの誓願（清貧、貞潔、聖地巡礼と救霊事業）を立てる。そして 1537 年 46 歳のときのラ・ストル

タの示現の体験で、「一致の神秘」と「奉仕の一致」に招かれたことがイエズス会設立の引き金となった。教皇の派遣要請に、イグナチオと同志たちはモンマルトルの誓願に従い献身を申し出る。イエズス会の名称の起源も、この示現に基づいている。

第Ⅳ期【イエズス会誕生から帰天まで：49歳～65歳，そして今日のイエズス会】 Figure3-2

イグナチオと同志たちは、それぞれ霊動弁別を行い討議し、新しい修道会であるイエズス会を1539年4月に発足させた。そして翌年、教皇パウロ3世はイエズス会を正式に修道会として承認を与え、さらに「ここに神の指がある」と付け加えた。これはイエズス会が神によって創造されたという意味を持っていると同時に、常に神の指差すところに赴くことも示している（李，2016）。1541年4月初代総会長に選ばれたイグナチオは、『会憲』の執筆と推敲に加え、その生涯で6,813の書簡を残している。1日に約30通もの手紙を書いていたとされる。それらはフランシスコ・ザビエルらなどで世界各地に派遣されたイエズス会員、教皇、司教、修道女、王、政治家、兵士、イエズス会員の父母、家庭婦人、青年へ宛てたもので、具体的な指示と霊的なテーマに触れたものが多い（イエズス会編，1992）。

現代のように電話やインターネットがない時代に、手紙による世界各地に派遣されたイエズス会員からの報告や指示、各地に派遣された会員の行動の決定は現代の国際的な企業の有り様を思わせる。イグナチオの統治時代以降も各地に派遣されたイエズス会員は『霊操』のベースとなっている識別（霊動弁別）によって各々の活動の決定をしていることが、『キリシタン時代の婚姻問題』（安延苑，2012，教文館）などの文献からうかがい知ることが出来る。イグナチオが「霊操」を指導するとき大切にしていたプロセスを応用したものが *ignatian pedagogy* と言われ「体験」→「内省」→「実践」→「評価」は現代のイエズス会学校教育においても大切にされている。

『会憲』を作成するにあたっての内的体験が『霊的日記』にもそのプロセスを常に行っていたことが書き残されている。絶え間ない活動の中に書き残されたものから、アカタミエント（*acatamiento*：畏敬，霊的な愛深い心構え，感嘆・尊敬・謙虚・従順などを喚起するような現存）をもって神と接するとき、涙の賜物や内的対話（*lokela* ロケラ）を与えられたこと、神から自分に期待されている奉仕が何であるかを、確実に判別したいとたえず望んでいたことが明らかになっている。

1556年7月31日死去。遺体が葬られているイエズス会の本部教会「ジェズ」の祭壇には「使命を果たして逝く」という文字が記されており、ロヨラから始まった巡礼の旅はローマで終着をみた。イグナチオの生涯を振り返ってその人物特徴を挙げるとするならば、体験

や内省を通し、神の意志を選び取っていく、「すべてのうちに神を求める」ことを目指し、神を見出すことによって人生の意味を見出していった人物であったと言えよう。

第4項 結論

本研究の目的は、生涯発達という視点においてどのようにして人格が形成されるのかを探索する方法として伝記資料を用いた生育史分析と TEA を用いて、個人と歴史の相互性の中から、信仰を深め、信仰を生きる人の特徴を明らかにし、その宗教性発達を検討することであった。

本研究では、生活空間要因関連 TEM 図により、一次的社会化、二次的社会化（回心）の径路や神の望む方の反対へと押しやるもの（SD）と神の望む方へ押しやるもの（SG）のせめぎ合いを対話的自己による識別として解釈し、「カルドネル（Cardoner）の照らし」と呼ばれる神秘体験へ繋がっていくことが確認できた。この神秘体験を経て、イグナチオはあらゆることを神との関わりにおいて識別し、キリストに従い、キリストの経験にあずかることによって、「神のより大きい栄光（Ad maiorem Dei gloriam）」だけを求める人生を歩む。識別という習慣を作り、すべての出来事に神を見るという人格特性の形成に繋がっていることが示唆された。人々を霊的に助ける祈りのプログラムである『霊操』は、自己の体験から編み出されたものであるとされているが、この神との関わりにおける識別は「霊操」においても重要であることがわかる。

最後に、イグナチオの生活空間要因関連 TEM 図で俯瞰することで、どのような生育史環境に育ちどのような条件によってその特質が形成されたかを探り、仮説的・暫定的に人格形成の統合を試みる。西平（1996）は多くの生育史分析から、人格形成過程は人格の三次元を仮定することが有効としている。（a）健全性 X の形成条件：基本的信頼感、自我の強さ、自我親和的と自我違和的のバランス、肯定的・受容的な構え、（b）偉大性 Y の形成条件：適時刺激、モラトリアム享受、個人的アイデンティティ（使命感）の形成、個人と歴史の（波長の一致）、（c）超越性 Z の形成条件：無欲・清貧・簡素という形での X 性と Y 性の否定、天真爛漫な子どもらしさ、宗教的な愛・慈悲・救済の願望である。

西平の人格の三次元形成条件に沿って、イグナチオの XYZ 三次元の調和的発達を見ていく。健全性 X の形成条件は、早期に「高貴な騎士・偉大な兵士」と呼ばれる家柄特有の気高い心情と素朴な雰囲気融合された感覚が育ち、幼児期にバスク地方で生まれた基本的信頼感が神への基本的信頼に成熟し、苦難に対する耐久力に自我の強さが見られる。偉大性 Y

の形成条件は、神のみ旨を行うことを探求する宗教的モラトリアムの享受や「人々に必要な助けを与えて神に奉仕する」という使命感、そして政治的にも宗教的にも変革の時代にイエズス会設立と統治という形で実を結んだことなどが挙げられる。出来事に神を見る態度が形成され他者に対しての寛容さと配慮をもって接し、イエズス会士として清貧、貞潔、従順を生きたイグナチオは超越性 Z の形成条件をそのまま体现している。

以上、伝記資料を用いた生育史分析と TEA を用いて宗教性発達を検討してきたが、無藤(1990)は生育史などによる発達心理学を研究する意義を 3 つ挙げている。第 1 に生育史を探り、人間の形成の中にあるいくつかの層をその形成の過程から探ることが可能である。第 2 にその変化は成長、発達という時間を追って大きな変化の過程を探ることによってのみ明らかになる。第 3 に教育との関係を挙げ、発達の可能性の中から社会的によりその個人にとっても幸せな方向は何かという方策を実現するには、どのように発達するかを知らなければならない、としている。

例えば、イエズス会の創設者イグナチオ・デ・ロヨラの『靈操』の方法を教育に応用した、イエズス会系のミッションスクールでは、生きる意味や目的について思索し、「Men for Others, with Others」の価値観をもち、それを実践できる人間を育てることを目指す。どのようにイグナチオのような霊性を帯びた人格が形成されるかを見ていくことで、教育の中の宗教的な意義を見出すことが出来ると考えられる。

Table 3-1 生育史分析法の理論的枠組みと「生育史分析による宗教性発達の検討」による解釈

1. 全生活空間	本研究による解釈
家族関係：家系，近親者の死，躰など	バスク地方貴族の家系の末っ子，6歳のときに母と死別，騎士物語を読んで育つ。
経済的諸条件：所属する階層，消費的構え，経済的独立，経済的変動など	宮廷の小姓として仕え，後に軍人（騎士）。神学生として学び，後に聖職者になる。
身体的諸特性：活動性，身体的構えなど	負傷で足を少し引きずる，胃痛に悩まされる
一般的対人関係：基本的対人関係，所属集団のあり方，他人への影響力など	活動における観想をもって，「もっとの心構え（Magis）」で奉仕する態度。
能力・創造性：訓育，青年期のモラトリアムや動機づけ，集中力と持続性など	回心により宗教的モラトリアム期（30歳～48歳）を深々と享受した。
歴史的・文化的な環境条件：歴史的状況，社会意識の文化と葛藤など	政治的にも宗教的に変革の時代を生きる。異端問題に悩まされる。
2. アイデンティティの様相	
社会・人間・人生に対する基本的信頼：適応能力，順応，革命性など諸形態をとって表現される信頼-不信の態度	素朴な信仰から神への絶対的な信頼へ（ペトロへの信心，聖母子の示現，カルドネル川の示現，ラ・ストルタの示現）
自己概念および自我感情：自信と劣等感，IとMeの一致不一致など	内的体験によって神のみ旨を知り，それに従おうという努力が際立つ。
自我の心理力動性とEgo-strength：防衛機能の型，禁欲性と快楽追求など	宗教性発達過程において，聖人の徳を「取り入れる」ことでその宗教性が促進される。
支配的な気分・生活感情：不安，感動，エリート意識，革命的情熱など	喜びと慰めと誘惑，疑悩，苦悩の対立により，靈動弁別（識別）する態度が生まれる。
時間的展望：未来への志向など	常に神を求めて歩む，靈的な巡礼者。
3. 心理-歴史的視点と実存的視点	
心理-歴史的視点：歴史認識のあり方と歴史参加の構え，自己の歴史的使命の自覚と追求など	プロテスタントの宗教改革時代に，神秘的な恵みから汲みとったカトリック教会の神秘を正しく理解し実践。
実存的分析的視点：究極的価値の追求，宗教性の有無など	アカタミエント（靈的な愛深い心構え）において，すべての物事のうちに神を見出す。

Table 3-2 TEA 及び TEM 図で用いた概念と「生育史分析による宗教性発達の検討」における意味

概念	本研究における意味
「等至点」(Equifinality Point) [意味] ひとつのゴール・目標となるイベント	為すべきことを知り、与えられたミッションを全うする（使命を果たして逝く）。
「歴史的構造化招待」 HIS (Historically Structured Inviting) [意味] 等至点的なイベントを経験した者	イエスとともにイエスの足跡に倣いながら常に神を求めて歩んだ者（＝霊的な巡礼者）。
「統合された個人的指向性」 SPO (Synthesized Personal Orientation) [意味] 未来の見通しに向かって絶えざる努力を行う力、個人の内的な欲求や意志。	①「識別（＝対話的自己）による霊的な巡礼者でありたい」という宗教的アイデンティティの獲得。 ②「一致の神秘」「奉仕の神秘」に招かれる。
「発生の三層モデル」 TLMG (Three Layers Model of Genesis) [意味] 個人の内的変容を個別活動レベル、記号レベル、信念・価値観レベルの 3 つの層で促進的記号の発生と価値変容を記述・理解するための自己モデル	価値変容経験：VTE (Value Transformation Experience) は聖母の示現やカルドネル川の示現と言われる神秘体験。促進的記号：PS (Promoter Sign) は聖母や価値思考として深く内化され作用する「至聖三位一体」の現存。
「対話的自己」 DS (Dialogical Self) [意味] ハーモニスの対話的自己理論に基づく、多様な I ポジション（自己の異なる側面）の間で生まれる対話的關係。	神の望む方へと押しやる、あるいはその反対へと押しやる様々な動きや流れの根源や方向性、結果について内的に分析し、判断すること（＝識別、霊動弁別）。
「必須通過点」 OPP (Obligatory Passage Point) [意味] ある経験をするにあたり、必ずゆきあたる出来事や付きつけられる行動選択	制度的 OPP（制度的存在） 幼児洗礼、慣習的 OPP（多数が経験）：職業選択、結果的 OPP（制度でも慣習でもないが多数が経験）：生路選択
「分岐点」 BFP (Bifurcation Point) [意味] 何らかの局面において転換点が立ちあがる	①宗教の一次的社化（信仰を意識） ②宗教の二次的社化（＝回心）
「社会的方向づけ」 SD (Social Direction) [意味] 等至点に向かうのを阻害する力	①世俗的な成功、愛着②神の望む方の反対へと押しやるもの（誘惑、疑悩、苦悩）
「社会的助勢」 SG (Social Guidance) [意味] 等至点への歩みを後押しする力	①宗教的社会化（第一次、第二次的社会化） ②神の望む方へ押しやる神の霊（ pneuma ）

1532 (41歳) ニュルンベルク宗教和議, 新教の自由を承認。
 1534 (43歳) ヘンリー8世, 首長令を策布して英国教会開始。トマス・モア投獄される。カタニ、旧約聖書のドイツ語訳を完了。
 政治的にも宗教的にも変革の時代

1536 (45歳) カルヴァン『キリスト教綱要』出版。
 1537 (46歳) ポルトガル, マカオの植民開始。
 コステル, 南カリフォルニアを発見。
 1538 (47歳) カルヴァン, スイスのジュネーブより追放される

非可逆的時間

第III期32歳~47歳: 巡礼と勉強時代 ~ 第IV期48歳~65歳: イエズス会誕生から帰天, そして今日のイエズス会

行動B6

1523年(32歳) エルサレム巡礼(自叙伝)。つらい旅行中にも努力する力を与えてくれる慰め後、テレサ・ラジャチャイ修道女に書いている。
人格特性P7
 不屈の意志力と苦痛への堅忍

エルサレムにとどまることが神のみ旨でないことが分かった後、今は何をすべきかを絶えず考え続けた。やがて人々の霊魂を助けるにはしほらくの間勉強をしたらよいと思った。そのつもりでバルセロナに行くことに決めた(自叙伝)。

行動B6
 結果的OPP
 生路選択
 学生になる
 宗教的モラトリアム享受

環境条件E6

1524年(33歳), ハルゼロナで学問を始め
 1525年(34歳), ハルゼロナで勉強(合計2年)。人々を霊的に助けようと試みる。カリスト・デ・サー, ファン・デ・アルテイガ, ローベ・デ・カセレスが最初の同志となる。
 1526年(35歳), アルカラ大学で哲学を学ぶ。神の導きについて人々に教え, 自分が体験した霊操を分かち合い, 宗教裁判所に証交される。牢獄に入れられたが, やがて釈放される。
 1527年(36歳), アルカラからサラマンカに移るが, そこでも異端審問所によって悩まされた。パリ行きを法意する。同志たちは, スペインに残り, やがて彼ら離れ去れ, 一人でパリに向かう。
 1528年(37歳), スペインからフランスに。以後7年間の学究生活に入る。ラテン文法, 人文学を学ぶ。
 1529年(38歳), コレージュ・ド・サン・バルブに移り寄宿する。ピエール・フアールおよびザビエルと同居。人文学・哲学の課程を開始。
 1530年(39歳), 新しい同志たちの出合いがあり, ハリでの勉強を続ける。
 1531年(40歳), ハリで3年目を迎え, 勉強を続ける。学資および生活費調整のため, フランドルと英国のロンドンに旅行。
 1532年(41歳), ロドリゲスとの親交を深める。この頃ザビエルの心をとらえる。
 1533年(42歳), 文士の取得。マアブルに霊操をさすける。ライネスとサルメロンとの出合い「霊操」を説く。
 1534年(43歳), 哲学修士の資格をうる。ライネスとサルメロン, ロドリゲスとボヴァリアに霊操をさすける。8月15日(聖母の祝日)にイグナチオと6人の同志が, モンマルトルのサン・ドニの聖堂にて, 聖地での布教およびローマ教皇のもとでの奉仕の誓いを立てる。モンマルトルの誓願(清貧, 貞潔, 聖地巡礼と教霊事業)。ザビエルに霊操をさすける。(自叙伝)

人格特性E6
 神の望む方へと押しやる神の霊(フネウマ) 神の望む方へと押しやる神の霊(フネウマ) 神の望む方へと押しやる神の霊(フネウマ)
 SG

環境条件E5

1538 (47歳) イグナチオとその同志たち霊操, 説教, 慈善活動。復活祭にローマに集合し, 共同生活を開始。モンマルトルの誓願に似て, 教皇に献身を申し出る。
 1538年~39年, 広く派遣要請が届くようになり, 個人として応じるか, 団体の一員として追応じるかの疑問が起きてきた。
 1539年(48歳) 新修道会結成(イエズス会)のため討議。「イエズス会」の選定に全員が賛同

人格特性E5
 清貧, 貞潔, 奉仕

行動B6

DS対話的自覚
 話し合いをしながら認識を深める

結果的OPP
 生路選択
 修道会形成

環境条件E5
 1540年 教皇パウロ3世によって, イエズス会が正式に修道会として認可される。
 1540年3月, フランシスコ・ザビエルはインドに向けてリスボンから出帆。
 1541年4月19日(50歳) イグナチオは初代総会長に選ばれる。

環境条件E4

1544年(53歳) 『会憲』執筆開始。『会憲』の推敲など隨終のまで続行。また遠くにいるイエズス会員たちにむけて1日約80通ほどの手紙を書く。

環境条件E4
 1548年(57歳) 『霊操』を印行
 1553年(62歳) 8月末, コンサベス・ダ・カマラに『自叙伝』1521年から39年にかけて自分の心の遍歴の口述開始。
 55年(64歳) 秋に巡礼記『ロヨラの巡礼者』ができた。カマラ『覚え書き』を書き始める。

環境条件E3

1548年(57歳) 『霊操』を印行
 1553年(62歳) 8月末, コンサベス・ダ・カマラに『自叙伝』1521年から39年にかけて自分の心の遍歴の口述開始。
 55年(64歳) 秋に巡礼記『ロヨラの巡礼者』ができた。カマラ『覚え書き』を書き始める。

環境条件E3
 現在, イエズス会教員は4000人以上の会員が12万人を超える協働者として世界で約2300校の中学・高校と大学を運営。
 制度的OPP
 イグナチオの事業の中核にあるのは『霊操』
 『イグナチオ的IEFP (multiplying agents), 他者に仕える人(men and women for others) → イグナチオ的リーダーシップ (Ignatian-Leadership)

環境条件E2

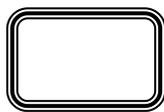
EFP 帰天(神のもとに帰る)
 1556年7月31日(65歳) 終油の秘跡を受けることなく早朝死去。
 1622年3月12日 グレゴリオ15世にとって列聖された。

環境条件E2
 神の望む方へと押しやる神の霊(フネウマ) SG

歴史的過程

イグナチオの生路史過程

Figure3-2. イグナチオの生活空間要因連関TEM図(第III期~第IV期)



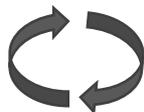
等至点 EFP



必須通過点
OPP



分岐点 BFP



対話的自己 DS



統合された
個人的指向性



伝記からの
経路



客観的条件



重要な条件



伝記資料
からの類推



伝記者の解釈
を含むもの



補足とし
て説明



相反す
る関係

第3節 総合考察

第1章では、人生においての様々な出来事や節目に祈りに向かう動機と促進的記号の発生の仮説モデルを提示し、意味形成がどのように行われるのか、宗教性を帯びた人格がどのように形成されるのか、宗教的意味システムのプロセスを検討してきた。

研究1では、非キリスト教文化の中で、カトリックの信仰を選んでいく経路から日本のカトリック信者の宗教性発達の仮説モデルを生成し、宗教的意味システムのプロセスにおける促進的記号の発生を検討した。第一次的宗教的社会化、第二次的宗教的社会化という段階的なプロセスは、宗教教育に裏打ちされた漸次的な回心と呼ばれるもので、その宗教的意味システムの媒介として祈り（霊操体験）が重要であることが示唆された。祈り（霊操体験）に向かうきっかけは底打ち体験（祈る意外に方法がない出来事）によるアイデンティティの危機であった。そして、祈り（『霊操』体験）を通して「同伴するイエス」という促進的記号が発生し、アイデンティティの再体制化のプロセスを描いていくモデルが示された。

信者が体験した「霊操」は、イグナチオ自身の体験から編み出され、イグナチオが人々を霊的に助ける主な手段とした祈りのプログラムとされている。そこで研究2では、イグナチオ・デ・ロヨラ（1491-1556）の伝記資料からTEAと生育史分析によって、信仰を深め、信仰に生きる人の特徴を明らかにし、その宗教性発達を検討した。イグナチオ自身も第一次的宗教的社会化、第二次的宗教的社会化というプロセスによる段階的な宗教性発達が見られた。アイデンティティの危機から、対話的自己によって宗教的アイデンティティを獲得して宗教性発達のプロセスが示された。

研究1と研究2は文化も時代背景も異なるが同じように、人生においての様々な出来事や節目といったアイデンティティの危機が祈りに向かわせ、「同伴するイエス」（信者の事例）、「三位一体の神」（イグナチオの事例）という促進的記号の発生の仮説モデルが提示できた。Taylor（2002）は、信者と神的なものの中にある結びつきを「媒介」するものは、個人的な祈りの他にも共同体の伝統な祈りもあるとしている。『霊操』はイグナチオが自らの宗教的体験を基に執筆され、さらに「霊操」プログラムは祈りの同伴者（霊的指導者）が教導することから、古参者（ファシリテータ）が導く正統的周辺参加（legitimate Peripheral Participation; LLP）の祈りと言えるであろう。

以上、宗教的意味形成がどのように行われるのか、宗教性を帯びた人格がどのように形成

されるのか検討した。イグナチオが体験し、記録、教導した黙想および観想の祈りのプログラムである「霊操」は、宗教的意味システムのプロセスであり、促進的記号の発生を促すプログラムであることが明らかにされた。その宗教的意味システムのプロセスにおいて、祈りが重要な宗教的体験であることが示唆された。

第2章 「霊操」(祈り)の構造と機能の分析

第1章では、「霊操」(祈り)の動機と促進的記号の発生の仮説モデルを提示し、宗教的意味システムのプロセスを検討した。そして宗教的意味システムでは祈りが「媒介」として重要な宗教体験であることが示唆された。

そこで本章では、意味システムにおける「霊操」(祈り)に注目して、その構造と機能を明らかにする。『霊操』はローマ・カトリック教会において、16世紀の重要なスペインの霊性の著作家の一人である、イグナチオ・デ・ロヨラ(1548-1622)が著作したもの(1548)で、自己の体験を霊性への一般的アプローチとして展開したものとされている。本研究で『霊操』とした表記は、イグナチオ・デ・ロヨラの著書を意味し、「霊操」は『霊操』による黙想体験を意味している。

第1節では『霊操』の構造分析から、「霊操」体験の全プロセスのダイナミズムを人がどのようにとらえ、どのように意味づけ、宗教性発達に影響しているのかを検討する。第2節では祈りの準備として勧めている『霊操』における「場所の設定」として、受難と復活の聖書物語に該当する Passion Play (受難劇) の上演を取り上げ、「場所の設定」が祈りにもたらし得る宗教性発達への利点について検討する。

第1節 霊操の構造と宗教的意味システム形成の検討(研究3)

第1項 問題と目的

「霊操」の源流と伝統は聖書と教会の祈りの伝統に根ざしている。山崎(2009)は、修道生活の開花とともに心霊修行が盛んに勧められ、400年頃に書かれた『隠修士伝』から15世紀、信者たちを信心の鍛錬へと招いた『イミタティオ・クリスティ』とその流れを挙げ、心霊修業に関する神学の伝統は、モンセラート大修道院長 F.G. シスネロスの『霊的生活の修行』とイグナチオの『霊操』において集大成されたとしている。16世紀のイグナチオの『霊操』に着想を与えてきたのは、ランムドゥス・ルルス(Raimundus Lullus, 1232/3-1315/6)の『観想の技術』(Art de contempacio)で観想は内的な諸感覚によって行われると叙述される考え方をはじめ、ロヨラ城での療養中に読んでいたカルトゥジヤ会士ザクセンのルドル

フ (Ludolf von Sachsen, 1295 頃-1377) の『キリストの生涯』(Via Christi; Vita Jesu Christi e quatuor Evangeliiis), そしてモンセラートのベネディクト会大修道院長ガルシア・ヒメネス・デ・シスネロス (Garsia Ximenez de Cisneros, 1455/56-1510) の『靈的生活の修行』(Exercitatorio de la vida spiritual) が挙げられる。イグナチオは 1522 年にモンセラートに滞在して、ベネディクト会の修道士との交流を続けていたことから、『靈的生活の修行』を實踐していたと見られている。

このシスネロスの「^{デウオテウオ・モデルナ}新しい敬虔」は、イグナチオやアピラのテレサなど 16 世紀のスペインの靈性家たちに影響を与えた。キリスト教神秘思想史の中で Vandendebroucke (1997) は、その特徴を「内的生活において、観想においてさえ、心理的・主観的なものが優位に置かれること…祈りは新しい観点からすればきわめて自然な移動によってある意味で心理的な操作の仕事になる…まず準備の精神状態を、次に回心と内的祈りに導く漸進的な瞑想を、最後に本来の意味の観想の諸段階を組織化する」として、「^{デウオテウオ・モデルナ}新しい敬虔」から示唆を受けたイグナチオが主要な役割を演じたことを述べている。このようにして、『靈操』は、自らのキリストへの回心、巡礼、靈操およびイエズス会の創立といったあらゆる体験を通して完成された靈的大著である。純粹に個人的な、全生涯を貫流する神体験への一つの示唆であり、神との関係を我々に仲介する靈的実践書」(山崎, 2009) とされる。活動的生活を祈りによって養い、豊かな実りを得るためにその祈りを深めるといふその祈りの実践は、今日に至るまで教会の中に続いている。

『靈操』の目的は、「靈操者(「靈操」の祈りのプログラムを實踐する人)が秩序づけられていない心の動きや愛着に流されることなく、真の自由をもって選び、決断できるためである」とされる (Fleming, 1990)。神学的には『靈操』の主要な本文がいつ書かれたのか、写本や略本、公式本など書物としての『靈操』形態、『靈操』の靈性やその構造などが研究されてきている。しかし、『靈操』を体験することで宗教性発達にどのように影響するのか、実証的な研究はほとんど行われてきていない。その理由の一つには靈操が同伴者との祈りのプログラムで、黙想者が自らの宗教的体験を祈りの同伴者(靈的指導者)以外に言語化する機会がないことや、同伴者は黙想者の宗教的体験を告解(信者が司祭に罪を告白し、その奉仕者によって与えられる赦免を通じて、ゆるしを神から受け、同時に教会と和解する行為)やカウンセリングと同様に外部にその内容を明らかにしない点にあるからと考えられる。

そこで森本 (2013) は、「靈操」体験をした成人期前期・成人期後期・老年期の日本のカトリック信者 63 名(男性: 15 名, 女性 48 名)の感想文集である「靈操ジャーナル」(1989

年～2004年発行)の総集編『混沌の中の光り—信徒が歩んだ「霊操」の道』(2009)のテキストデータをIBM SPSS Text Analytics for Surveysを用いてテキストマイニングによる分析を行い、「霊操」における祈りの内容を確認した。

「霊操」体験は、超越者に向けての語りかけや、対話の中で宗教性が発達していく(森岡, 2011)側面が示されており、神(主, キリスト, イエス, 聖霊, 御父)へ語りかける単語や、「神」から「私」に語りかけられる「あなた」という応答の単語の出現頻度が高く、「霊操」が「神」と「私」の対話であることが示唆された。『霊操』研究においても、『霊操』の構造分析から浮かび上がる神との相互的対話に位置づけは、信仰者が神との相互の交わりに深く入ってゆくことが「霊操」の最終目的であることを示すとしている(Knorn, 2013)。

「霊操」における神との対話で語られることは、「家族」「子供」「夫」「母親」「父親」との関係性や、「仕事」に対するネガティブな心理状態であった。「神」と「私」の対話によって、自分の人生や生活を振り返り、軌道修正し、新しい適応的な自分を見出していることが示された。それは「個としてのアイデンティティ」の再体制化だけでなく、自分は誰のために存在するのか、自分は他者の役に立つのかという「関係性に基づくアイデンティティ」(岡本, 2007)の循環的発達モデルに重なる。

さらに、テキストマイニングで抽出された出現頻度分析、感性分析、2値データ解析から、Strabuk(1899)やSanctis(1927)らの回心の心理学的過程モデルに重なる、プロセスが明らかになった。ネガティブな心理状態が回心の契機となり、次に「深い」愛や計らいを感じる転換点を経験し、「たくさん」の恵み、「静か」な喜びという、歓喜の段階へ向かう神学的に示された古典的モデルと一致している。「霊操」体験によって「ありのまま」の自分を受け入れることや、十字架(苦しみ, 困難)を受け入れること、「メッセージ」(確信, 気づき)から「識別」(選ぶ)するという行為へのプロセスが認められた。この調査結果から、「霊操」体験は他者や社会との関係性を問う「私」と「神」との対話という構造と、個人の内的世界で、その対話にどのような意味づけがされ、その意味づけによって宗教性発達が促されていくプロセスが明らかになった(森本, 2013)。

本研究ではこの点に着目し、『霊操』のプログラム構造に連動して宗教的意味づけがどのように変容していくのか、どのように宗教性が深まるか、その心の変容過程を段階ごとに比較、検討する。黙想を介してどのような心の変容過程が担保されれば、宗教性発達が促進するのかを明らかにすることを目的とする。

第2項 方法

1. 分析対象, 協力者および語りデータの収集

『霊操』の構造と機能を分析するために、『霊操』と『霊操』の研究書を用いた。一次資料および研究書である二次資料は主にスペイン語やラテン語などであるが、本稿では入手しやすく、実際の「霊操」指導に使われている翻訳版を用いた。併せて原著も確認をしながら、分析を行った。

「霊操」体験については、「霊操」体験のあるカトリック信者成人前期（30～40代）・成人後期（50代～65歳未満）・老年期（65歳以上）4人（男性3人，女性1人）に半構造化面接を行った。インタビューは、8日間の「霊操」体験者2名，1ヶ月の「霊操」体験者2名を2016年5月，8月に分けグループ面接で行った。1回あたり2時間～3時間で，グループ面接の場所は協力者との合意により決定した。

本研究では基幹質問をあらかじめ準備し，(a) 黙想期間や黙想時期，経験の回数，黙想の目的を確認，(b) 「霊操」の目的と『霊操』の構造を図示で説明し，各段階における心の変化やその黙想でどのようなことを感じたのかの想起，(c) 『霊操』の各段階でそれぞれ発言をしてもらった後，全体での分かち合いという形で自由に話し合ってもらった。半構造化インタビュー調査にあたっては，研究の主旨，録音すること，データは研究目的でしか使用しないことなどを説明し，インフォーマントの了解を得た。面接とテキストデータ化は著者自身が行った。

2. 分析手続き

2つの方法を用いて，段階的に分析・解釈を行った。1つ目は「霊操」体験について，「日常的な志向性によってまとめあげられ意味づけられた」生活世界(life-World)を洞察する，解釈学的現象学的分析(Interpretative Phenomenological Analysis:IPA)を用いて，その体験を解釈した。

2つ目は『霊操』の構造と機能を分析するためにプログラム評価を用いた。プログラム評価は人が中心になって介入(intervention)やアクション(action)を行うために用いられるプログラムの働きや機能といったプロセスや，結果と効果というアウトカムに着目した分析手法である。

分析手続きは，(a) 『霊操』の祈りのプログラムの構成内容を4週間の区切りで記述し，『霊操』の1週間ごとの構成内容と方向性および霊性を確認した。(b) 『霊操』4週間の

構成要因を提示し、簡易版 8 日間の黙想体験者 2 名、1 ヶ月の完全黙想者 2 名に半構造化面接を行った内容を IPA の方法論を用いて記述をした。(c) プログラム構造と機能を考察し、IPA の分析結果をプログラム評価の方法論に用いて、『霊操』の基本的枠組みをインパクト理論、ロジックモデルで図示した。アウトカム評価として宗教性発達を考察した。

(1) IPA のテーマ分析手続き

「霊操」という祈りの経験の語りデータを IPA で採用した主たる理由は、当該方法は人が一つの現象の生きられた体験をどう知覚し、個人的、社会的世界をどのように意味づけるかを析出するのに適した方法とされており、本研究の目的である「霊操」による祈りの体験の意味の探究と親和性があると考えられるからである。

臨床心理学の分野での実践的研究を解釈学の方法論で支えようと生み出された Smith&Osborn の研究方法は、内省された個人的体験の詳細な分析を目指し、半構造化面接法で収集したデータを解釈した際にテーマ分析を用いる (伊賀, 2008)。

分析は以下の手順で行った。

- (a) 半構造化面接法で収集した、インタビューの全過程を IC レコーダーに録音し、後日テキスト化した。
- (b) トランスクリプトを熟読し、録音された音声を聞き、インタビューの構造の全体を掴みながら、当事者にとってどのような物語が構成されているのかに留意して、データを繰り返し読む作業を行った。
- (c) トランスクリプトの中で重要だと思う興味深い箇所に下線を引き、なぜ重要だと思うのかなど、分析者の概念的解釈を書き留めた。
- (d) コメント間の相互関係や結びつき、パターンなどに留意しながら、トランスクリプトの小片に付されたフレーズを心理学的なテーマとして、書き出した。
- (e) 諸テーマ間の結びつきを見出し、リサーチ・クエスチョンに照らして、関連のあるテーマを絞り込み、諸テーマを結合 (群化) した。
- (f) テーマ間の結合関係を表示した、テーマの一覧表を作成した。
- (g) 諸事例をテーマ分析 (b~f) にかけてテーマの飽和化を図った。
- (h) すべての事例の分析を終えたら、飽和化したテーマ一覧表から高次のテーマを発見し、テーマを絞って焦点化し、全体の要約表を作成した。テーマの要約表をプログラム評価のインパクト理論と連動させた (Table4-1)。さらにテーマ間の関係の図式をプログラム評価のロジックモデルに連動させた (Figure4-2)。

(i) 諸テーマに沿って語られた事例を記述し、その経験がどのように解釈されたかに注目し、経験の本質と意味を研究者のリサーチ・クエスチョンに沿って解釈をし、記述をした。

4人の協力者によって得られた「当事者によって生きられた経験とそれに対して当事者が与えた意味」（第一の解釈）のデータをもとに、データ分析のプロセスでは、第一の解釈を分析者が再解釈し、第二の解釈を行った。

(2) プログラム評価分析手続き

『霊操』の構造については、日本においては日本語での「霊操」が行われることから、日本語の1986年版『霊操』、1986年版『霊操の現代的読み方』を一次資料とし、『霊操』のテキスト構造および、各段階の方向性の解釈についての研究書である二次資料は『聖イグナチオ・デ・ロヨラの『霊操』の解説』（Coathalem, 1996）に依拠した。同書は、その目的が「『霊操』の手引きの「指示」からはじめ、その結びの「正統的進行の規定」にいたるまで、イグナチオが決めた順序どおりに、『霊操』全体の主要部分と文章の細目を説明することを目指している」ものである。まず、プログラム評価を考察するには、プログラムの内容を整理し、神学の専門用語に心理学的な解釈を加えて、図示した（Figure4-1）。次いで、プログラムの構造を考察し、その基本的枠組みをインパクト理論（Figure4-2）、ロジックモデルで図示した（Figure4-3）。プログラムの構造とIPAで分析したコメントの記述を連動させ、アウトカム評価として考察した。

3. データ分析と方法論的妥当性の検討

『霊操』は祈りのプログラムであり、その目的が「霊操者が秩序づけられていない心の動きや愛着に流されることなく、真の自由をもって選び、決断できるため」（『霊操の現代的読み方』21.）である。そこで「霊操」体験全体を捉えるアプローチとして、対人・コミュニティ援助などエンパワメントを促進するためのプログラム評価を用いた。安田（2011）によるとプログラムが及ぼす影響を理論化する枠組みとして、インパクト理論とロジックモデルを用いることが有用であるとされている。

インパクト理論とは、なぜ参加者に変化が起こるのかを検討するもので、プログラムのゴール（目標）が達成されるまでの道筋を可視化し、プログラムを実施したことによる参加者の変化・変容の部分に焦点を当てるものである。ロジックモデルとは、どうやって参加者の変化を促すか、といった点に焦点を当てる。さらに、プログラムの評価方法として、実施中のプログラムを評価するプロセス評価、プログラムの効果の確認が目的のアウトカム評価が

あるが、本研究は「霊操」体験を振り返った語りデータを用いることから、アウトカム評価とし、その語りデータを IPA で記述し、インパクト理論とロジックモデルと連動させた。プログラム評価の記述方法は主に図示と、アンケート調査の数値や自由記述のコメントの記述、テキストマイニングを用いたものと様々であるが、本研究では4名のインタビュー資料を用いての分析であることから、「霊操」体験という特定の個人の生活における宗教性を記述する、個性記述的方法 (idiographic method) として質的分析を用いた。

個性記述的方法は人々の類似性があれば、個性記述的研究による結果を他の人々に一般化しうる可能性がある。個性記述的方法は、宗教に関する理論構築へと至らしめ、その理論を検証するための仮設や研究課題を提供するものである (金児, 2011)。質的研究方法の中でも、インフォーマントの個人的な体験と意味を描き出し、心理的世界を洞察する (三好, 2016)、解釈学的現象学的分析 (Interpretative Phenomenological Analysis: IPA) を採用した。解釈学的現象学 (IPA) は「生きられた体験」の本質と意味を理解する Husserl らの現象学的アプローチに、心理学を体験の自己省察とし、表現物 (言語や芸術作品など) を解釈の対象として注目した Dilthey の宗教的なテキストの解釈の仕方に関する研究として出発した哲学的探究である解釈学が結びついた研究方法である (岩壁; 2010, 松葉・西村・河野 2014)。Husserl と Dilthey が生活世界あるいは、生きられた経験の構造を理解することに興味をもったのに対し、Heidegger の解釈学現象学に影響を受けた Gadamer の IPA は、現象の構造にではなく、現象がどのように解釈されるのかに注目する (Cohen, Kahn& Steeves 大久保訳, 2005 ; 松葉・西村・河野, 2014)。

理論の背景に一定の親和的關係があると言われる、グラウンデッド・セオリーと IPA の違いは、グラウンデッド・セオリーのリサーチ・クエスチョンが体験のプロセスに関する問題で、データに基づいた概念を吟味することによって理論を発見するのに対して、IPA のリサーチ・クエスチョンは、生きられた体験のエッセンスを捉えることで、共通の特徴を持った本質的で認識された現実の生きられた経験の意味を記述する。前者がインフォーマントの経験の範囲から生まれた理論の提示に対して、後者は生きられた経験の本質と構造の主題に関する記述を提示することにある (伊賀, 2008 ; 岩壁, 2010 ; 松葉・西村・グレッグ・西村, 2014)。

一連の作業は筆者一人で行ったが、IPAやプログラム評価の先行研究論文を参考にし、さらに心理学を専門とする大学院生、教員による研究会や指導で研究方法論やその手順の理解を深めた。なお、「霊操」については霊操指導経験者である聖職者の助言を受けた。

第3項 結果と考察

1. プログラム目標とプログラムの構造 Figure 4-1

『靈操』は「靈操」をする者を助けるヘルパーのために書き上げられたもので、「靈操」の目指すものは、黙想者を聖書からのメッセージに長期にわたって触れさせることで、その目的は『靈操』の表題（靈操 21）と総注（靈操 1）に明示されている（Guibert, 1963 ; Catret, 1985 ; Coathalem, 1996）。

靈操 1（バラ訳版）

靈操とは、良心の糾明、黙想、観想、口祷、念祷のあらゆる方法を意味する。靈操はまた後で述べるように、他の靈的な働きも意味する。散歩したり歩いたり走ったりするのを体操と言うが、同じように、靈魂を準備し、整えあらゆる方法を靈操と言うのである。その目的は、まず、乱れたあらゆる愛着を棄てることであり、その後、靈魂のたすかりのために、自分の生活を整えるうえで、神のみ旨を探し、確かめることである。

靈操 1（David.L.Fleming 著 Edmond Nemes 監訳版）

「靈操」は、神との関わり of いろいろな具体的形を示すもので、（たとえば、黙想、観想、口祷、念祷、信心業、良心の糾明、気づきのエクササイズなど）これらはちょうど、靈的な運動（エクササイズ）を表していることから、「靈操」ということばが生まれた。体のために、体操、散歩、ジョギング、種々のゲーム、柔道、空手、テニス、野球などのような運動があり、それらの運動によって人々は、体力作り、筋肉作り、環境機能の鍛錬などを目指している。よく運動することによって身体の健康を保つことができるのと同じように、「靈操」によって、聖靈の動きにもっと心を開き、敏感になることができる。また心の中にあるさまざまな悪への傾きや、罪の暗闇に光をあてるためのものである。さらにまた、神の愛にいつそう忠実に応えられるよう、力づけ支えられるためのものである。

靈操 21（バラ訳版）

自分自身に打ち克ち、いかなる乱れた愛着にも左右されることなく、生活を整えるための靈操。

靈操 21（David.L.Fleming 著 Edmond Nemes 監訳版）

「靈操」は、人を真の靈的自由に導くために、いろいろな靈的な運動（エクササイズ）からなりたっている。この目的に達するよう、じょじょに日常生活の価値基準を整える。

すなわち「霊操」の目的は、霊操者が秩序づけられていない心の動きや愛着に流されることなく、真の自由をもって選び、決断できるためである。

「霊操」の目的は、要約すると「自らの生活を整えること(disposicion de su vida)でありこの霊操プロセスは神と霊操者との間主観的なコミュニケーションの出来事と解することとされる。根本的・内的に整える方法として「選定(election)」があり、Fesard (1956)によれば、霊操プロセスの中心に位置する「選定」は、二つの可能な相対する選定対象の間の「分岐(bifurcation)」の前に立っている、または「道の分かれる場(lugar donde se dividlan los caminos)」というのが選択状況のイメージとされている。

『霊操』の特徴は以下のように要約される (McGrath,1999)。

- (a) 聖書を読むことと祈りに対する想像力豊かなアプローチ。それはそれらを実行する者(霊操者)に祈りや観想を助けるイメージを形成することになる。
- (b) キリスト者の生活の主題を通じて順次に先へと進む、省察と黙想についての構造化された進行的なプログラム。
- (c) 神と自己の両方についての考察を可能にし、個人的回心と刷新を決定することへと導き、霊操の実行を通して霊操を導く指導者が使用。

4週間で構成される『霊操』は、前半の2週間：「以前(l'Apres/Vorher)：浄化の道」、後半の2週間：「以後(l'Apres/Nachher)：一致の道」と二つの部分に分けられ、「選定」は第2週と第3週の間位置する(川中, 2007)。

『霊操』を用いた霊的指導者(主にカトリック司祭や修道者)による黙想は「霊操」と呼ばれ、祈りと霊的指導を基盤とし、4週間の黙想を通じて行われ、段階的に展開されていく、体系化された霊的訓練の一つの過程である。その過程には3つの基本的要素(祈り・静修・霊的指導)が含まれ、キリストの生涯の出来事に「場所を見る」方法で直接関わることによって、人びとをキリストの現存に個人的に関わる者へ向かわせる(田邊, 1986; Coathalem, 1996)。

「霊操」には3つの方法がある。第1はイグナチオの著書『霊操』をそのまま黙想の内容とする、完全な「霊操」である。生路を決めること、または既に決定してとらえられた生活様式を改善することの2つの目標が考えられる。概ね1ヶ月間を要する。この「霊操」は信者の誰に与えられてもよいものではなく、熱心に求め霊操の準備の整っている人に限られる。第2は『霊操』を省略ないし、圧縮した形で与える方法である。各段階に当てられる時間を縮小したもので、10日間または、6~8日間で行う。黙想の目的を変えることなく、

秩序ある段階的進行で進める。新しい生路の選定か、既に決定してとられた生活様式の改善を求めるものである。教会法で修道者の年度の黙想が義務付けられるようになって、この黙想が最も実施されており、黙想者の資質に応じて個別に「霊操」が適応される場合と、集合型で講話を中心とした後に、個別に霊的指導が行われる場合など、黙想者の生活様式に合わせた「霊操」の適応が行われている。第3は黙想会などで実施される単純化した部分的霊操である。今日では省略ないし圧縮した霊操や単純化した部分的霊操が広く普及している。

霊的指導とカウンセリングの違いは、「霊的指導においては、両者とも神の方に向いているのが根本的な姿勢」と言われており、「カウンセリングは自分自身を知ることによって、自由になるのに対して、霊的指導は神のゆるしやの体験や慈しみ深い神に出会うことによって自由になること」としている (Nemes,1987)。

『霊操』の構造を Figure 4-1 で示した。『霊操』の内容の確認を行いながら、それぞれの週で重要であると考えられる点を心理学的に解釈した。第1週(第1段階)は神の視点で「私の人生」を振り返り、時間と場所を超えて「過去」の出来事を想起させるものである。次いで第2週(第2段階)は生路を選定する分岐点であり「現在」そして将来起きると思えるような出来事「未来」を想起させる。このようなエピソード記憶の想起やエピソード未来的志向 (Episodic future thinking) と過去・未来と様々な時点へと自己を投影することはメンタルタイムトラベル (Mental time travel :MTT) と呼ばれている。MTT ではエピソード記憶において過去を振り返ることで、精神疾患が発症するケースや精神的な悪化が見られることの臨床事例が紹介されている。「霊操」においても現代では、自分の罪を深くみつめるプロセス(第1週の罪の黙想, 第3週のイエスの受難の黙想)は、黙想者の資質に合わせて避ける配慮がより強調されている。

第3週と第4週は、「場所の想定」で祈り、最後に全行程を振り返るというものである。この過程においてはセルマンの社会的視点調整能力の発達を見ることが出来ると考えられる。聖書物語の「場所」に入り祈ることで、自他の視点を相互にも関連づけられる第三者的水準から、さらに多様な他者の視点をネットワークや体系をなす社会的な視点として捉えることのできる社会的水準への視点の獲得が想定される。社会的視点調整能力の発達から第1週と第2週を見ると、メンタルタイムトラベルは自他の視点を一方向から関連づける自己内省的水準とも言えよう。

2. インパクト理論 Figure4-2

インパクト理論はなぜ黙想者に変化が起きるのかを検討するもので、「霊操」プログラム

のゴール「自分の生活を整えるうえで、神のみ旨を探し、確かめること」が達成されるまでの道筋を可視化し、プログラムを実施したことによる参加者の変化・変容の部分に焦点を当てるものである。

プログラムゴールをアウトカムとし、プログラム目標を近位アウトカムあるいは中位アウトカムとして位置づくかどうかを検討し、インアクト理論として Figure4-2 に整理した。記述は IPA の手法を取り入れ、「霊操」プログラムの流れである《第 1 週原理と原則》《第 2 週キリストの国》《第 3 週最後の晚餐、ゲッセマネの園》《第 4 週復活、愛を得るための観想》を【プログラム】マスターテーマとした。そしてそれぞれのプログラムでどのようなことを感じたのか 4 名の語りから 4 個の【近位アウトカム】【中位アウトカム】とされる中位テーマと 13 個の下位テーマを抽出した。《 》はプログラムの流れであるマスターテーマ、〈 〉は中位テーマを示す。

霊操プログラムの参加結果、【近位アウトカム】として仮定されるのが〈過去を振り返る〉である。過去の恵みや罪の振り返り、自分自身のことやそこに見る真理、過去と今の関係性が語られている。そして、キリストの生涯に焦点があたり、心の動きや深まりを感じ、選定をしていくうえでの根拠や確認を得ていく〈選定への促し〉段階へと繋がっていくことが仮定できる。さらにプログラムが進み、キリストの痛みや死に、イエスのビジョン・神のビジョンの意味づけが行われ、【中位アウトカム】の〈祈りの深まり〉を介して、自分の生と死の意味を考え、自分と他者や社会との関わりや共同体感覚が生まれ、〈生きている意味〉づけが生じていると仮定できる。

《第 1 週原理と原則》〈過去を振り返る〉

[過去の恵み]

- ・自分の恵みの歴史を振り返って祈る (Inf.1)。
- ・自分ではわからなかったことが意味のあることになり、恵みとなっていることがわかった。堅信を通して恵みはもらえるものから、もらわなくてはいけないものになった (Inf.2)。
- ・神さまに大切にされている体験があるかどうかを振り返ることで、人の見方が変わる (Inf.4)。

[過去の罪]

- ・先に恵みの歴史を振り返って、そして次に罪の歴史を振り返る。教会の歴史の罪の方が大きく、次世代に残す罪は大きい。個人の罪は小さいものだ (Inf.1)。
- ・自分の罪についてなど、その人の持っているものを引き出す第1週をクリアしないと前に進めない (Inf.4)。

[個人・パーソナル]

- ・中高の時代は信仰にとって重要な時期だと思う (Inf.1)。
- ・こんな感じで良いのか思い巡らすことが大切。周囲の環境から望まれていること、心の動きを見つめる (Inf.2)。
- ・信仰によって変わったことを行動で見せることが出来るようになった。信仰の仲間に出らえて社会人になっても自分に戻れる場所、自分に戻れる機会が生まれた (Inf.2)。
- ・「霊操」の基本的な振り返りは心の動きを知ることが出来る (Inf.3)。
- ・神さまに愛されているというパーソナルな経験があるかどうか、自分の体験に出会っているかどうかで、見方が変わっていく (Inf.4)。

[真理]

- ・「第1週の原理と原則」は根本的な人の見方や受けとめ方など人間の真理について考えさせられる。その人の持っているものを引き出す (Inf.4)。

[過去と今]

- ・心の動きや魂レベルの気づきは本来あるものを引き出す、過去が今になっていることを感じる (Inf.3)。

第1週の原理と原則というプログラムは、黙想者個人の罪についての黙想から構成されるが、罪だけでなく神の視点で「私の人生」を見ることで、恵みの側面についても焦点が当たっている。「私の人生」を振り返ることで、気づきを促し心の動きに敏感になる。語りにも見られたが、まず先に「私の人生」における恵みの歴史を振り返り、次いで罪の歴史を振り返ることの方が良いという。「霊操」は祈りの同伴者（霊的指導者）とともに進めるプログラムだが、同伴者は黙想者の資質に合った進め方をするものとされている。しかし、罪ばかりを強調する同伴者もいるため、黙想者と同伴者の信頼関係や相性というものが祈りにも反映されると推測される。

《第2週キリストの国》〈選定への促し〉

[心の動き・深まり]

- ・ 2つの旗, 3組の人を祈ったが, 貧しさの体験については何も心が動かなかった。その動かない心を感じた。自分には合わなかったが, 自分のパートナーには役にたつ祈りだと感じた (Inf.1)。
- ・ 貧しさを味わいたい思い, 8日間の黙想中, 誰にも知られずに5日間断食を試みた。その後食べた食べ物は人間の命を味わえた。生かされている実感を得た (Inf.2)。
- ・ 心の動きや意識の究明は魂レベルの気づきである (Inf.3)。
- ・ 第1週と第2週のプログラムは螺旋的に祈りが深まる。人間の真理を大切にする開かれた心が育まれる (Inf.4)。

[キリストに焦点]

- ・ 祈りは自分のなかに本来あるもの(心の動きや気づき)を引き出し, キリストに焦点を当てていく (Inf.3)。

[選定・根拠]

- ・ 生路について祈りのコミュニティで共同識別をしてもらった。自分の想いがその共同識別で明らかになった感じだ (Inf.1)。
- ・ 夫婦のライフオリエンテーション(生き方の選び)で「心の貧しさや, 無力さ, 蔑み」を受け入れることが出来た。発達障害の子どもを2人授かったが, 夫婦で生き方の選びをしたからこそ, 感謝しながら子育てができると感じる (Inf.2)。
- ・ 本来あるものを引き出し, 自分の人生を大切にするという気づき (Inf.3)。
- ・ 生路選定についての前置き, 2つの旗, 3組の人, 謙遜の段階, 生路の選定, 改善と調整の規定と, 第2週は霊操の中でもとても大切な祈りの箇所である (Inf.4)。
- ・ 引き出された賜物の根拠は, 具体的に神さまからこれをしろ, という根拠を引き出す。それは内省, 究明, 意味づけという作業でもある。この選定は共同識別(共同体の選定)でも同様である (Inf.4)。

第2週 of キリストの国というプログラムは, キリストの生涯を黙想し, キリストとともに愛に生かされ, よりよく神と人類に奉仕する生路を選定するものである。8日間の黙想者と1ヶ月の黙想者では, 黙想を振り返ったときの語りが異なり, 8日間の黙想者では第2週についてプログラムについては[心の動き・深まり]として, 「貧しさ」については言及があったものの, [選定・根拠]については第2週 of プログラムとして明確に語られることがなか

った。「選定」だけを取り上げた識別および共同識別の体験の語りが見られた。

一方、1ヶ月の黙想者は第1週の祈りから引き出された賜物から、自分の人生の方向付けを意識する傾向が見られた。『霊操』の霊性（新カトリック大事典）によると第2週は、「原理と原則」に対応する具体的自己決定とされているが、第1週と第2週のプログラムは螺旋的に祈りが深まるという語りにも見られるように、その祈りの構造が明確に示唆された。

《第3週最後の晩餐，ゲッセマネの園》〈祈りの深まり〉

[痛み]

- ・高3で体験した受難の黙想は今でもそのときの体験を鮮明に覚えている。8日の黙想の3日目に第3週の痛みの黙想をした。加賀乙彦の小説に出て来る高山右近の黙想は、この第3週の受難の黙想だと思われる（Inf.1）。

[イエスのビジョン・神のビジョン]

- ・「父よ、御心なら、この杯をわたしから取り除いてください。しかし、わたしの願いでではなく、御心のままに行ってください」というゲッセマネの園でのイエスの祈りが究極の祈りだと思う（Inf.1）。
- ・受難の黙想のときに、自分に同伴してくださるイエスを体験した（Inf.2）。
- ・ゲッセマネの園の祈りでは有限性の捉え方が変わる。第3週，第4週で時空間の感覚が変わる。この地上だけでない、イエスのビジョンに入っていく感じ（Inf.3）
- ・ゲッセマネの園でのイエスの選びは、私自身にもあることである。それはこの世の価値観か神の価値観（イエス・神からみた私），その自分のギャップを感じることである（Inf.4）。

[キリストの死]

- ・私たち教育者であるイエスが死んだ。この第3週は第4週の祈りの基礎となるものだと思う（Inf.4）。

第3週の最後の晩餐，ゲッセマネの園というプログラムは、イエス・キリストの死と復活を基盤に置くキリスト教では、第4週とともに受難と復活というイエスの物語のクライマックスにあたるものである。『霊操』の霊性（新カトリック大事典）によると、第3週と第4週の目的は、十字架につけられ栄光に入った主（イエス・キリスト）を信じ、希望し、愛し、黙想者の生路選定を霊的に強化することとされている。

8日間の黙想者は、ゲッセマネの園から十字架への過程において、イエスの心や身体的な苦しみ、受難に、自分にとっての心の痛みや困難な出来事を重ね合わせることで、イエスを

身近に感じる祈りの深まりを体験している。一方、1ヶ月の黙想者は受難と復活という第3週、第4週でどのように視点や価値観が変化していったのかを語っている。1ヶ月の黙想者の語りの特徴はイエスや神のビジョンの視点、価値観についてである。それは第4週の黙想で、自分の人生と照らし合せていく基盤になっている。

《第4週復活、愛を得るための観想》〈生きている意味〉

[自分の存在を問う]

- ・ どうしてなのか意味を問う、神さまに対する抗議の祈りという対話出来る (Inf.1)。
- ・ 自分が生まれてきている意味を祈る (Inf.2)。
- ・ 神のビジョンで自分の生と死を考える (Inf.3)。
- ・ 神のビジョンを自分の人生と照らしあわせて考える。自分と神の視点のギャップやズレを意識しながら、そのズレに違和感を持ちながらも、それを抱えて生きていく (Inf.4)。

[自分と他者や社会との関わり・共同体]

- ・ 神に頼るという不偏心は、自分と他者や社会との関わりの識別のときに大切になるものだと思う。この識別は祈りのコミュニティの共同識別にも繋がっていく (Inf.1)。
- ・ 仕事に対しても、クリスチャンでないコミュニティにも、神が働いていると感じる。祈りで、識別をしながら仕事をしていると皆、心がひとつになる時がある。心がひとつになり、取り組む仕事は祈りそのものを感じる (Inf.2)。
- ・ 自分のことがわかってくると、他者のこともわかってくる。地球を眺めている神の視点、大きなことでもリアルに感じる事が出来る。神の視点から地球共同体を眺める (Inf.3)
- ・ イメージとして人の(心の)仕組みを捉えた感じ。人を知り、社会のことがわかってくると見方が変わる。そのような視点の変化で自分の将来の方向性が見えてくる (Inf.4)

第4週の復活、愛を得るための観想というプログラムは、第3週が基盤となって進める黙想である。愛を求める観想は、すべてのことにおいて愛し奉仕したいと願うスペースに私を置く祈りである。全行程の振り返りとなる第4週の黙想者の語りでは、自分の存在について、また他者や社会との関わりなどについて言及されている。8日間の黙想者では身近な共同体について、1ヶ月の黙想者はより広い共同体をイメージして語られている。

3. リサーチ・クエスチョン

以上、「霊操」プログラムのゴールである「自分の生活を整えるうえで、神のみ旨を探し、確かめること」が達成されるまでの道筋を可視化し (Figure4-2)、参加者の変化・変容の

部分に焦点をあて IPA の手法で記述した。IPA のリサーチ・クエスチョンは、生きられた体験のエッセンスを捉えることで、共通の特徴を持った本質的で認識された現実の生きられた経験の意味を記述することにある。

本研究では《マスターテーマ》である祈りのテーマから、8日間の簡易黙想者と1カ月の完全黙想者の語りデータで得られた〈中位のテーマ〉や〈下位のテーマ〉で共通の特徴を持った本質的で認識された現実の生きられた経験の意味を抽出することが出来た。しかし、8日間の簡易黙想者と1カ月の完全黙想者とは、プログラムの構造の理解や解釈が異なっていることが示唆された。1ヶ月の完全黙想者は1, 2週間をパーソナルな部分, 3, 4週を神の視点から見た社会と捉えている。一方、8日間の簡易黙想者においては、「霊操」プログラムの構造は明確に意識されていないが、過去→選定→神のビジョン→共同体という祈りの中での心の動きを感じていることが明らかになった。

インパクト理論はなぜ黙想者に変化が起きるのかを検討するものであるが、IPA で記述することで、「霊操」プログラムの構造に沿って、祈りが個人から共同体の祈りへと変化してきており、個人の視点、神の視点、神からみた共同体の視点という視点変容を促していることが示唆された。

4. ロジックモデル figure4-3

ロジックモデルは、プログラムを要因別に分けて考え、「もし～ならば…する (if...then)」という一定のロジックによって可視化したもので、ゴールの構造やインパクト理論を参考に、具体的にプログラムで展開されるアクティビティ（本研究では祈り）を柱にモデル化していくものである。ゴール、インパクト理論、ロジックモデルの提示はプログラムの中身をブラックボックスにせず、説明可能な形にするための手段である（安田，2013）。

インプットとして、祈りの同伴者（霊的指導者）を伴う8日間の簡易黙想、1ヶ月の完全黙想で実施される「霊操」プログラムは、第1週《原理と原則》、第2週《キリストの国》の黙想で、パーソナルな祈りとして個人の過去の恵みや罪の振り返りが行われ、心の動きを味わい、その心の動きを意識しながら生路の識別が行われるならば、アウトカムとして、神の視点で「私の人生」を見て、生路の選定が行われる。第3《最後の晚餐、ゲッセマネの園》、4週《復活、愛を得るための観想》の黙想では、イエスの「死」と「復活」を介して、イエスと共にいる体験、イエスや神のビジョンを得る体験を得て、自分自身の生きている意味を問い、他者や社会との関わりへの意味づけが行われるならば、アウトカムとして、神の視点

で「他者や社会との関わり」を見て、生路の選定が強化される。そのインパクトとして、自分の生活を整えるうえで、神のみ旨を探し、確かめることが出来る、というロジックモデル整理された。

第4項 結論

『靈操』のプログラム構造に連動して宗教的意味づけがどのように変容していくのか、どのように宗教性が深まるか、その心の変容過程を段階ごとに比較、検討することで、黙想を介してどのような心の変容過程が担保されれば、宗教性発達が促進するのかを明らかにすることを目的に、プログラム評価のなぜ黙想者に変化が起きるのかを検討するインパクト理論と、ロジックモデルによって『靈操』の構造と機能を明らかにした。語りの分析と記述に用いた IPA は、現象の構造にではなく、現象がどのように解釈されるのかに注目するものであった。

本研究では、この 2 つの分析方法を採用したことで、「靈操」プログラムは、生活の出来事を祈り、「私」と「神」との対話の構造であることと、そのプロセスが明らかになった。森岡（2011）指摘したように宗教は超越者に向けての語りかけであり、対話のなかで宗教性が発達していくという側面が示された。黙想者は自分の人生や生活を振り返り、神との対話で軌道修正され、新しい自分に出会う。それはまったく新しいものを取り入れるのではなく、本来持っているものを引き出された、新しい自分である。神の視点で「私の人生」を見ることで、個としてのアイデンティティの再体制化が行われる。さらに、イエスと共にいる体験や神のビジョンを得る体験は、神の視点で「他者や社会との関わり」を見ることに繋がり、自分は何のために存在しているのかという「関係性にもとづくアイデンティティ」の獲得という循環的発達モデル（岡本，2007）へ向かっていく。

以上、本研究から「靈操」プログラムの構造は、心理学的解釈すると過去・現在・未来、時空を超えるメンタルタイムトラベルが組み立てられており、社会的視点調整能力の発達を促すものであり、その構造は宗教的意味システムの形成を成すものであることが示唆された。

構成	構成要因	内容と方向性	『霊操』の霊性(新カトリック大事典)
序 第1週 (第1段階) ＊8日間の場合2 日半～3日当てる。	アマリ・クリステイ(キリストの魂) 指示 前提条件 原理と基礎、日々の特別科明(告解のための一般 糾明、思いについて、言葉について行いについて、 一般糾明の方法)、総告解と聖体拝領 第1霊操(3つの罪についての黙想) 第2霊操(自分の罪について) 第3霊操(反復と3つの対話) 第4霊操(総括) 第5霊操(地獄について) 付則(第1から第10まで)	「原理と基礎」によって導入され、糾明 と告解の指針と、黙想中の霊的訓練 のための「付則」で結ばれる。罪が初 めてこの世に入ったという内容で、黙 想者個人の罪についての黙想から構 成される。黙想は「反復」、次に「総括」 の形で繰り返される。最後に想像を働 かせ地獄に関する黙想を行う。	『霊操』の全体を貫流するイグナチオの 霊性は第1週の「原理と基礎」に示され る。それは三位一体の神、神人イエス・ キリストであり、これらに関する考察は マンレサにおける神秘体験をもとにイグ ナチオが深めていった霊的結晶とされる。
第2週 (第2段階) ＊8日の場合3日 ～3日半を当てる。	キリストの国 第1日から第12日 第1観想(受肉)、第2観想(誕生)、 第3観想(反復)、第4観想(反復) 第5観想(5官の適用) 生路を考えるにあたって 2つの旗 3組の人 謙遜の三段階 選定(選定にあたって、選定の対象、選定のできる3 つの時機、選定の第1方法、選定の第2方法、自分 の生活と身分の矯正と改善のために)	「王の呼び掛け」の観想は3つの段階 の導入である。3つの部分から成り立 ち、受肉と誕生の観想の「反復」2回、 「5官の適用」で1回。次いで、生路選 定についての前置きの後、2つの旗、3 組の人、謙遜の段階。最後に生路の 選定、改善と調整の規定で終わる。選 定自体の行為と次にその対象、3つの 時機と2つの方法に順次触れていく。	「キリストのお召し」から始まり、「キリス トの国」の観想へと展開。「キリストの 国」は世界史における救済史的原理と 基礎を意味する。その根本原則は「キリ ストに従う」こと、「キリストへの純粋奉 仕」をキリストの生涯の秘儀に対する観 想に照らされつつ決定していく。キリス トの愛に従い、キリストとともに神の愛に 生かされ、よりよく神と人類に奉仕する 使命を持つ。霊的生路選択は、神の恩 恵によってのみ可能であり、常に折りの 対象である。第2週は、「原理と基礎」に 対応する具体的自己決定である。
第3週 (第3段階) ＊8日間の場合1 日当てる。	第1日～第7日 第1観想(最後の晩餐) 最終観想(ゲッセマネの園) 付則 注意 今後、食事をとるうえで、自分を整えるための規則	第3週は、2つの部分を含む。2つの観 想(最後の晩餐とゲッセマネの園)を 「反復」形で2回、次いで「5官の適用」 の形で1回繰り返す。さらに、第3 段階における訓練の適応の注意や食 事中守るべき霊的態度と食事に関して 実行すべき規定を示す。	第3週と第4週の黙想の意義は、「キリ ストの国」の根本原則の大幅による霊操 者生路選定を霊的に強化することにあ る。霊操者はキリストへの賛美と感謝に 燃えつつ、すべてにおいて十字架につ けられ栄光へ入った主を信じ、希望し、 愛し、人類に奉仕する自己奉献を自由 に決定していくのである。
第4週 (第4段階) ＊8日間の場合1 日当てる。	第1観想(復活について) 注意 付則 愛を得るための観想 祈りの3つの方法 第1の方法 (第1. 十戒について、第2. 罪源について、第3. 霊魂の能力について、第4. 5官について) 第2の方法 第3の方法	第4週は2つの部分を含んでいる。主 の復活と聖母マリアへの出現について 「反復」形で2回、次に「5官の適用」 の形で1回繰り返される。第4段階に適 応させるべき「付則」についての注意を 示す。「愛を得るための観想」は、全体 を展望するような形で、全行程を取り 上げ、深めるとともに、日々の生活に 霊操を結合させようとする。	第3週～第4週 (第3,4段階) 受難と復活 →「場所の想定」で祈る
補足的な諸文書	わが主キリストの生涯の秘義 第2週 第3週(受難の週) 第4週(復活の週) 第1週の霊の識別の規定 第2週の霊の識別の規定 施しを分配するための規定 疑念をわきまえるための規定 教団と心を合わせるための規定	いくつかの文書を含んでいる最後の部 分は、まず祈りの方法に関する指示、 次にキリストの生涯の聖書の引用箇 所の付加、識別するための規定と、さ らに慈善事業の規定、疑念の識別お よび疑念より解放されるための規定、 正統的信仰の規定を順次示す。	心理学的な理論 社会的視点 調整能力の発達

Figure 4-1 『霊操』の構造と方向性

プログラム 《マスターテーマ》	アウトカム 〈中位のテーマ〉	下位のテーマ	言及者			
			Inf.1 8日間黙想	Inf.2 8日間黙想	Inf.3 1ヶ月黙想	Inf.4 1ヶ月黙想
第1週 原理と基礎	【近位アウトカム】 過去を振り返る	過去の恵み 過去の罪 個人・パーソナル 真理 過去と今	○	○		○
第2週 キリストの国	【近位アウトカム】 選定への促し	心の動き・深まり キリストに焦点 選定・根拠	○	○	○	○
第3週 最後の晩餐 ゲッセマネの園	【中位アウトカム】 祈りの深まり	痛み イエスのビジョン・神のビジョン キリストの死	○	○	○	○
第4週 復活 愛を得るための観想	【中位アウトカム】 生きている意味づけ	自分の存在を問う 自分と他者や社会との関わり・共同体	○	○	○	○

【遠位のアウトカム】自分の生活を整えるうえで、神のみ旨を探し、確かめること

Figure 4-2 本研究から整理されたインパクト理論

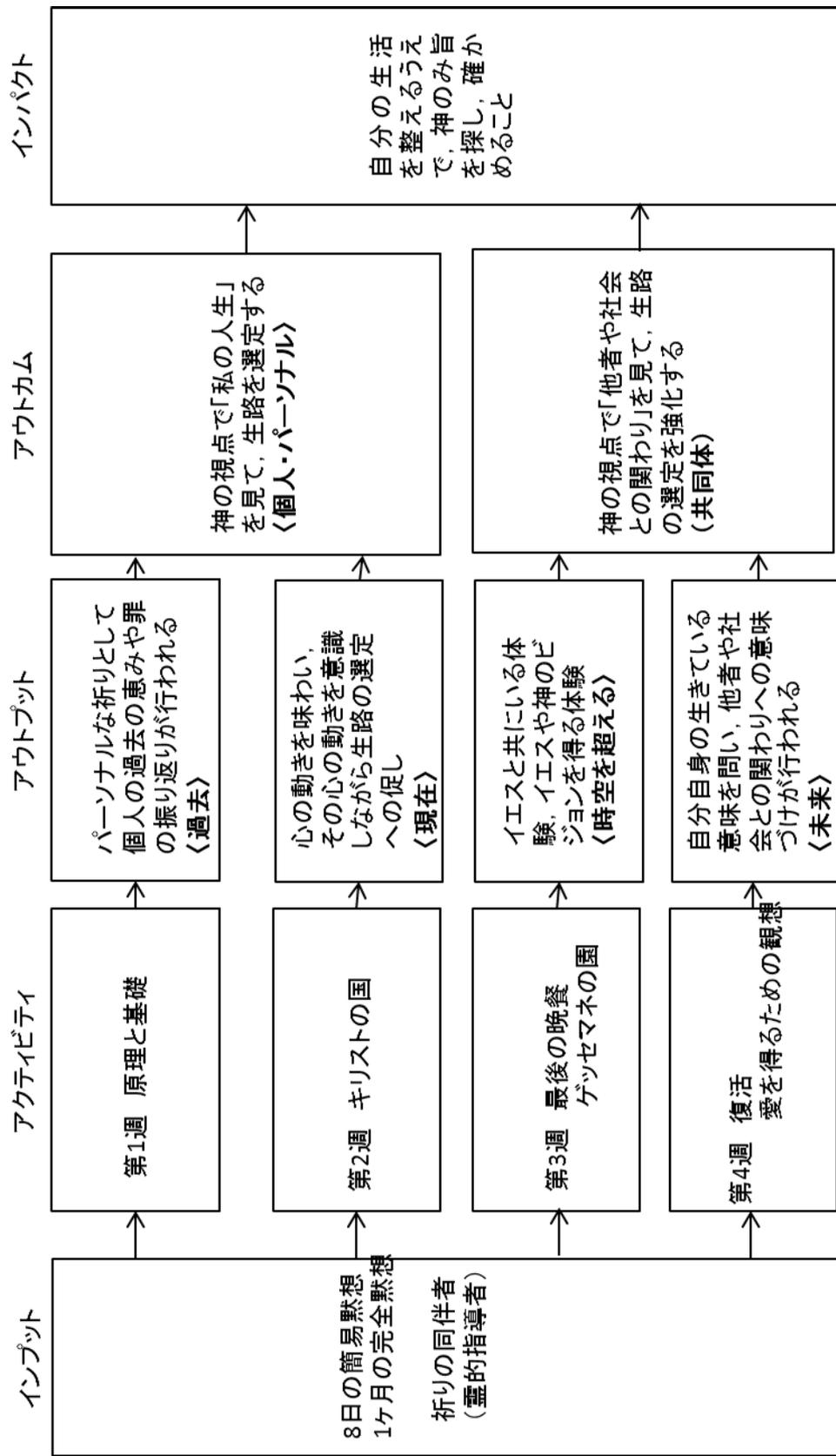


Figure4-3 本研究から整理されたロジックモデル

第2節

祈る「場所の設定」受難劇に見る、宗教性発達の検討（研究4）

第1項 問題と目的

第1節では『霊操』の構造に連動して宗教的意味づけがどのように変容していくのか、どのように宗教性が深まるのかを考察した。黙想者は祈りのプログラムによって第1, 2週はパーソナルな部分を、第3, 4週は神の視点からみた社会を捉えていることが明らかになった。近年では『霊操』はその体験を通して、「人間の尊厳と地球の尊厳」「寛容」「正義」「連帯」といった「地球市民の霊性」(Civic Spirituality)が培われることが望まれている(Cabarrus, 2015)。Cabarrusは、霊性(文化的精神構造)は教要理(カテケージス)を学ぶことによって確立するのではなく、体験によって養われていくものとしている。

『霊操』で得られる体系的な宗教的体験のプロセスの特徴の一つとして、田邊(1962)はイグナチオが祈りの準備として、祈りの題材が繰り広げられる「場所を見る」ことを挙げている。物語の展開を見るのではなく、「場所を見る」という場所的なイメージを創ることによって、不可視的、超時間的現実に触れ、キリストの現存に直接関わる体験を促す。「場所の設定」とは、黙想者が様々な救いの出来事が起こった場に想像の目を持って自分自身を置くことで、起こっている出来事に居合わせる(現存する)こと、その場に実際にいた人々が五感のすべてで体験した出来事を共有することで、イエスのペルソナと出会うことが重要となる(Standaert, 2014)。『霊操』の第3週、第4週は受難と復活がテーマとなっているが、その場にいるように受難と復活を祈りのうちに体験するのである。

古くから今日に至るまで、物語で繰り広げられるプロセスを最も身近に体験でき、多様な視点を紹介してきたのが演劇である。キリスト教カトリック教会では、聖書劇をミサの中に導入している歴史がある。ラテン語典礼劇として、復活祭劇、降誕劇、奇跡劇が行われてきた。それが世俗語による野外劇として Passion Play (受難劇)、宗教改革劇、聖史劇など教会の外でも上演されるようになった(富田, 2015)。イエズス会が設立母体の学校でも人文科学系の学問の教育を効果的に行う方法として演劇への参加が推奨され、演劇を教育に取り入れることが1591年の『Ratio Studiorum 〈勉学方法〉』(イエズス会学事規則)や当時のイエズス会士の報告に残されている(1993, デベラ)。デベラは、とくにドイツ語圏内において、イエズス会演劇が契機となって、その後一般の演劇の道が開かれたという研究がされていることを紹介している。自分に与えられたさまざまな役柄に同化すること

によって、価値観を内面深くに芽生えさせることが期待され、イエズス会演劇は人間の存在における意味とその目的の探究の教育的意義があるとされた。

心理学では心理療法としてのサイコドラマ、ドラマセラピー、プレイバックシアターなどのワークショップや研究はあるものの、一般の演劇を経験することについて、演劇の何がどのように演者に機能して、教育的意義を持っているかという理論的整理はまだ少ない。芸術心理学として、演劇の熟達者に着目した安藤（2005）は、河竹（1978）、Noice& Noice（1997a,b）Glsitman（1990）の先行研究を基に、俳優の記憶や3つの視点に同時に立つ熟達化を論じている。3つの視点とは、自分の演じる役がどう感じているかという「役の視点」、劇全体が観客にどのように見えているかという「観客の視点」、脚本を良く読んで全体の流れを分析する「俳優の視点」である。

自分の演じる役の脚本に書かれていない役の考えや意図などを推測して、脚本を吟味する「分析的段階」(analytical phase)を経て、推測した考えや意図を自分のことのように感じながらセリフを読み返していくという「積極的経験」(active experience)を経て、脚本を記憶し、上演が終わった3年後でも8~9割の正確さでそれが記憶されていることが報告されている(Noice&Noice, 1997a,b)。かけがえのない経験として記憶された演劇を経験する前と後では、演者はどのように心の変容を自覚しているのか、そしてそれがどのように意味づけられているのかによって、その演劇の経験は教育的意味を持つと言えよう。

そこで、研究3で示唆された神の視点から見た他者や社会との関わりを深めるアウトカムが見出された『霊操』第3週、4週のテーマに焦点を当て、キリストの生涯の受難と復活を追体験できる演劇を取り上げてみたい。世界で上演されている受難劇のなかでも今日、有名なものはドイツのオーバーアマガウの村人の半数である約2500人が参加して開催されるPassion Playである。Passion Playの起源はペストが猛威をふるっていた1633年に「神が慈悲でこの忌まわしい病から村民を救ってくれるならば、今後10年毎にキリストの受難と死の聖劇を上演すること」(南, 1991)と、村議会において全員一致で決議したことに始まる。1633年10月27日、教会の祭壇の前で彼らは誓いをたてた。そしてその日以来、不思議なことにオーバーアマガウではペストによる死者は一人も出なかったのである。

永野（1984）は、元々四旬節の教会内で演じられてきたものが、1633年の誓約がきっかけになって、ほとんど上演されなくなっていたPassion Playが、常に定期的に上演されるようになったことや、政府による俗化した受難劇上演禁令時にも、オーバーアマガウのPassion Playだけは特許状で保護されていたことを報告している。なぜならば、Passion

Play 上演の初心は神との誓約を果たすための上演であることから、観客も見物人ではなく神との誓いを果たす共演者だからである（南，1991）。

2010年のPassion Playは、エルサレム入場から最後の晚餐、ユダの裏切りで捕らえられるまでの前半の部が3時間上演された後、3時間の休憩を挟み、後半の部は十字架につけられ、葬られ、そして死者のうちから復活した栄光までが描かれる（Figure,5-1）。Passion Playのメインキャストの配役は上演（5月～10月上旬まで毎週5日間）の約1年前に発表され、コーラスや群衆役などが順次発表される。メインキャストやコーラスの独奏を担当する人々は、役柄をディスカッションし、イスラエル巡礼にて「場所」の持つ臨場感の中で、イエスの現存を感じ、そして現代が抱えている宗教問題を考えるという。そのような準備を経て、10年毎に村をあげてのPassion Playが上演される。上演の3年前から準備に入る脚本も10年毎に見直され、今を生きる人々の心に響く内容が検討される。しかし、聖書物語である以上、神学的な検証も行われるのは言うまでもない。今日、オーバーアマガウは観光名所でもあるために、世界中からこのPassion Playを鑑賞しに巡礼者がこの地を訪れる。そして、演者と巡礼者はPassion Playという祈りの時間と場所を共有する。

本研究の目的は、Passion Playを祈りの一つの行為であると考え、『霊操』第3、4週の「場所の設定」によって実存的な理解、宗教的意味づけがどのように深まるのかを検討する。さらに、オーバーアマガウという10年ごとにPassion Playを上演する共同体の宗教的歴史と、演劇の何がどのように演者に機能して、教育的意義を持っているのかを考察する。

第2項 方法

1. 協力者および語りデータの収集

ドイツのオーバーアマガウにおいて、1634年から10年毎に今日まで、村民により上演されている「Passion Play」の出演者5人（2010年上演）に半構造面接を行った。インタビューは2015年9月、2016年2月の2回に分けて、ドイツのオーバーアマガウで行った。併せて、オーバーアマガウにおける「Passion Play」上演の背景を理解するために、教区司祭にもインタビューを実施した。さらに、第一舞台監督、第二舞台監督、音楽監督、マーケティングディレクターにも2016年9月にインタビューを行った。

質問は最初に「村にとってPassion Playの上演はどのような意味があるのか」を答えて

もらい、その後「Passion Playに参加して個人としてどのような変化があったか」「その役をどのように捉えたのか」など Passion Play がどう個人にとって、どのように意味づけされているかについて質問した。半構造化インタビュー調査にあたっては、研究の主旨、録音すること、データは研究目的でしか使用しないことなどを説明し、インフォーマントの了解を得た。

なお、インタビューに際しては日本語からドイツ語、ドイツ語から日本語への通訳を、学生時代をカトリックの宗教的教育環境で学んできており、現在はドイツで通訳業務を行っている日本人通訳を通して行った。

2. 分析手続き

研究3「霊操」(祈り)の構造と機能の分析と同様に語りデータの分析に、解釈学的現象学的分析 (Interpretative Phenomenological Analysis: IPA) を採用した。

分析は以下の手順で行った。

- (a) 半構造化面接法で収集した、インタビューの全過程を IC レコーダーに録音し、後日テキスト化した。
- (b) トランスクリプトを熟読し、録音された音声を聞き、インタビューの構造の全体を掴みながら、当事者にとってどのような物語が構成されているのかに留意して、データを繰り返し読む作業を行った。
- (c) トランスクリプトの中で重要だと思う興味深い箇所に下線を引き、なぜ重要だと思うのかなど、分析者の概念的解釈を書き留めた。
- (d) コメント間の相互関係や結びつき、パターンなどに留意しながら、トランスクリプトの小片に付されたフレーズを心理学的なテーマとして、書き出した。
- (e) 諸テーマ間の結びつきを見出し、リサーチ・クエスチョンに照らして、関連のあるテーマを絞り込み、諸テーマを結合 (群化) した。
- (f) テーマ間の結合関係を表示した、テーマの一覧表を作成した。
- (g) 諸事例をテーマ分析 (b~f) にかけてテーマの飽和化を図った。
- (h) すべての事例の分析を終えたら、飽和化したテーマ一覧表から高次のテーマを発見し、テーマを絞って焦点化し、全体の要約表を作成した (Table5-1, Figure5-2)。
- (i) 諸テーマに沿って語られた事例を記述し、その経験がどのように解釈されたかに注目し、経験の本質と意味を研究者のリサーチ・クエスチョンに沿って解釈をし、記述をした。

演者5人の協力者によって得られた「当事者によって生きられた経験とそれに対して当事者が与えた意味」（第一の解釈）のデータをもとに、データ分析のプロセスでは第一の解釈を分析者が関係者5人のからのインタビューを基に再解釈し、第二の解釈を行った。

3. データ分析と方法論的妥当性の検討

本研究のリサーチ・クエスチョンは、Passion Playを演じるというプロセスや出来事ほどのように経験され、意味づけられるかというものである。そこで、話者の経験とそれに対する意味づけを詳しく理解しようとする研究方法である解釈学的現象学的分析（Interpretative Phenomenological Analysis: IPA）を採用した。IPAが研究協力者である当事者（話者）が自らの経験を解釈して語ったことを、研究者である聞き手が解釈し直すという二重の解釈課程を実践することから、解釈的現象学的分析と呼ばれる（伊賀, 2013）。IPAのサンプリングは、特定の経験をした人々が選ばれる方法を採用しており、同一の経験をして、それに対して同じ視点から意味を与えている当事者達を調査対象者にする。調査対象者は母集団を代表しているのではなく、一つの視点を代表していると言える。

5人の協力者によって得られた「当事者によって生きられた経験とそれに対して当事者が与えた意味」（第一の解釈）のデータをもとに、データ分析のプロセスでは、第一の解釈を分析者が再解釈し、第二の解釈を行った。一連の作業は筆者一人で行ったが、研究成果を発表し、議論や助言を基に適宜修正を加えた。

第3項 結果と考察

1. テーマ分析

5名の語りから、《自己を知り、他者を知る》《安定した帰属意識》の2個のマスターテーマが得られた。これらのマスターテーマは5個の中位テーマ、17個の下位テーマから成る。《 》はマスターテーマ、〈 〉は中位テーマを示す。

一つめのマスターテーマは《自己を知り、他者を知る》ことは、演じることで考察能力が促進され、自己を顧み、他者を理解した体験に関するテーマである。〈葛藤と赦し〉〈他者理解〉〈信仰的理解〉が中位テーマとして挙げられる。〈葛藤と赦し〉は葛藤、人の強さ・弱さを感じる、赦されたことへの意味の理解、〈他者理解〉は対峙する側（裏切も含む）の理解、反対側の意見を持つ人の必要性、弱者への理解や関心、異なる宗教の理解・宗教多

元主義、権力を持っている側の理解、〈信仰的理解〉はイエスの心の理解の深化、イエスへの親しみ感、時代とともに変化するイエス像、聖書登場人物の人間関係の理解という下位テーマから成る。

二つめのマスターテーマは《安定した帰属意識》で、オーバーアマガウという村コミュニティに関するテーマである。〈信仰生活〉〈コミュニティ〉が中位テーマとして挙げられる。〈信仰生活〉は信仰の変化なし、経験を重ねて信仰が強くなる、〈コミュニティ〉コミュニティ感覚、生涯学習、次世代への継承という下位テーマで構成される。

《自己を知り、他者を知る》〈葛藤と赦し〉

- ・メインキャストは役のアイデンティティになるけれど、その他大勢の役は意外とそうでもない。それでも「イエスを十字架にはりつけろ！」と言う時には、周囲に合わせてしまう心理というものを感じたし、「私はイエスを十字架につけたくない」という想いも深く、葛藤を感じた。復活の場面では赦され、癒された体験をした (Inf.2)。
- ・イエスの役をやってみて、ユダの役（実際の友人）との関係を考えて。ユダとキリストは進む道が違って、大きな葛藤があったことを感じた (Inf.3)。
- ・イエスと対峙する役を演じることになったが、イエス役と実生活では親友なので、最初是对峙する役は自分には合わないなあとは思っていました。しかし、演じてみて対峙する側の心情を理解することができたように思う (Inf.4)。
- ・ユダは反抗というのか、複雑な心情や立場で可哀想だと感じた。演じてみて、彼はそうしなくなかった、という感じを持った。ペテロは許されたのに、可哀想だ。そういう意味でも、ユダは興味深い人である (Inf.5)。

マスターテーマである《自己を知り、他者を知る》体験は、演劇を経験することでどのような変化を自覚しているのか、それがどう意味づけされているのかということが語られている。〈葛藤と赦し〉では、役柄と自分との感情の葛藤、役柄の感情葛藤体験の後に、赦されることの意味理解が生じている。また役柄だけでなく、信仰者としての自分の人生の経験を思い起こし、赦しの意味を内省するなど〈葛藤と赦し〉を体験している。

過去、Passion Play のテキストは、イエスの受難と復活という 5 日間の出来事に焦点を当ててきたが、1990 年の上演からは 5 日間の出来事だけでなく、例えば旧約と新約の対比の静止画的な舞台演出を用いて、イエスの全生涯を物語の情報とし舞台で表現できるように工夫されてきている。それでも Passion Play のタイトルが示すように、そのクライマッ

クスは受難と復活の 5 日間の出来事が印象的に演じられる。受難と復活は〈葛藤と癒し〉の物語でもある。

メインキャストの演者は上演の約 1 年前に、事前アンケートも勘案されるが内示もなく、配役が掲示される。ほとんど演劇の経験のない者も重要な役にキャスティングされることもある。演劇というものは複雑な要素が絡み合ったものであるが、演劇の脚本は、登場人物が話す言葉（セリフ）とその人物の行動の客観的描写（ト書き）のみで成立している。アマチュアの演者たちは、表現意図どおりにうまく表現するために、役柄についてディスカッションを重ね、イスラエル巡礼に行き、場の持つ臨場感を体験する。そして役柄がどのような役割を持っているのか、どのような心情であったのかを思い馳せる。

感情を意識する演劇のトレーニング方法で、フロイト心理学の影響を受けていると言われるスタニスラフスキー・システム (Stanislavski, 1924, 1936) があるが、Passion Play の稽古では、「日常生活の中で、どのような反応をするか?」「本当の友に裏切られたとき、どう思うか?」「そのような感情の時、身体はどう動くか?」という問いかけが演出家から投げられるという。このような経験を重ね、役柄を演じ、Passion Play の舞台でその場面とその時の感情を体験し、それがかけがえのない経験になっていくのである。

インフォーマントの中で唯一、役ではなくコーラス部門で参加している Inf.1 だけが葛藤と赦しというテーマに関連する発話がなかったことから、役を演じるという体験が、Passion Play の葛藤と赦しという内省を促す体験になることを示唆している。

《自己を知り、他者を知る》〈他者理解〉

- ・ オーバーアマガウ自体は 80% がカトリック信者だが、自分自身はプロテスタントの信者。1800 年代になってプロテスタントの人たちが増えてきた。たとえば回教徒でも Passion Play 参加は可能。どんな宗教でも根底は、同じだと思う (Inf.1)。
- ・ 受難劇の脚本は、ユダヤ教やプロテスタント、カトリックなどの異なる信仰に配慮されたものになってきている (Inf.2)。
- ・ 現在、宗教的な背景はいろいろあるが、受難劇を通して、何かを訴えることはないが、異なる宗教の子どもたちと一緒に劇をしていくこと、宗教を信じていない人も一緒にやっていくこと、それで共同体が広がっていく。異なることも受け入れていくようになる (Inf.3)。
- ・ イエス役からみてユダをどう感じるか。元々仲が良かったのに、違う道に進む。武器を使わないイエス。一方ユダはそれを使うという違う道を選ぶ。そのため反逆と言われてしまった。それぞれの役を演じることで、対峙する側のことを理解しようとし、

心情がわかってくる (Inf.3)。

- ・イエスと対峙する役を演じてみて、イエスに皆ついていってしまう、ユダヤ教を守りたいという気持ちが理解できる。対峙する側にも正義がある。自分たちの宗教を守らないといけないという気持ち、ローマから離れようとする気持ち、イスラエルを守ろうとする気持ちがよく理解できた (Inf.4)。
- ・カiffアス役はイエスの敵。悪い役を演じてみて、権力をもっている人がどのように考えるようになるのか、理解できたように思う (Inf.5)。
- ・十字架の上のイエスを演じたとき、イエスを親しく感じた。イエスとの距離が近くなった。人々が仲良く暮らすことを大切にする、イエスの心が理解できるようになった。イエスは社会の一番下層の人たちと共にいて、その人たちの力になることを行っていた。イエスの役を演じたことで、実際の社会のそのような層に目を向けていくことの大切さに気づいた。2000年前とは違っても、現代においてもいろいろな立場の人々が一緒に暮らしていくというのは意味がある (Inf.3)。
- ・ユダを異なる年齢で2度演じてみると、人の強さや弱さというのを感じるようになった。彼はキリストと想いが違うが、何でもハイハイというのではなく、反対の意見を持つ人も必要なのだと思う (Inf.5)。

〈他者理解〉は、イエスと対峙する側への理解であったり、イエスが共にいた社会の弱者への眼差しだったり、演じることを通して役柄の視点を自分自身に取り込むことで、自分自身とは異なる立場を理解することが促進されている。さらには異なる宗教の理解や宗教多元（共存）主義の視点へと繋がっていく。

これは10年毎に見直される Passion Play の脚本のも大きい。第二次大戦後に脚本は反ユダヤ的であるとされ、ユダヤ教会からテキストの変更の要望が出た。1960年時にはその要望に反して従来通りの脚本で上演し、次の1970年ではカトリック教会のミュンヘン大司教がバチカンに相談し、カトリック教会の見解では変わらないといけないとされた。これは第二バチカン公会議(1962-65)の影響も大きい。しかし、実際に大きく改編したのは1990年で、それに先だった1985年の村議会で、たった1票差でユダヤ教に配慮するという方針に決まった。この1990年の上演はオーバーアマガウにとってのターニングポイントとなり、新しい取り組みが若いメンバーたちによって始められた年となった。2000年、2010年の上演もこのときのメンバーの運営によるものである。

1990年からテキストの監修や第一舞台監督を勤めるのは、現在ではドイツでも著名な演出家である。彼もまたオーバーアマガウで生まれ、育ち、この地の演劇に携わってきた。

「Passion Play はムスリムもカトリックも、プロテスタントも宗教を問わない。異なる宗教でも、神の概念は同じだからだ」、「受難劇は世界の約30ヶ所で上演されているが、オーバーアマガウの Passion Play は10年毎の神との約束事でもある。しかし、それが祈りなのか、演劇なのかは観る人に委ねたい。そしてディスカッションしてほしい。ディスカッションを生むための機会を、火種をつくっていききたい」としている。

オーバーアマガウ地区のカトリック教会の担当司祭は、教会の手を離れ村の共同体ですべての運営をしている Passion Play について、その聖書物語はその演者のほとんどがイエスを裏切り、対峙する側を演じることになるが、その体験で信仰的にも学ぶことが多いと言う。それは宗教多元主義的な視点を意識する契機にもなっている。ドイツのパブリックスクールでは、13学年の毎学年には週3時間の宗教の時間があり、カトリック、プロテスタント、無宗教その他と3クラスに分かれて学ぶ。ドイツは戦争体験の反省から、10年生以上は宗教多元主義的な視点を養う機会も持つという学びの背景もある。

宗教を学ぶ意義は、「エゴイズムではなく、分かち合うことを学ぶ」としており、オーバーアマガウも5000人の人口の約3100~3200人がカトリック信者で、他はプロテスタント、ムスリム、無信仰と、約50年前はカトリック信徒しか住んでいなかった村も大きく変わってきている。そのような背景も踏まえ、近年の Passion Play を通して、〈他者理解〉の土壌が育ってきていると言える。

《自己を知り、他者を知る》〈信仰的理解〉

- ・メインキャストの人たちはイスラエルに巡礼に行っているが、場において感じるという体験が大切である。どういう人物だったのかをその場で感じて、それを近いものとして演じている (Inf.1)。
- ・上演の1年前にメインキャスト48名でイスラエル巡礼に行った。イスラエル巡礼によって、とても役が理解できた。自分の役の役割をディスカッションして理解が深まった (Inf.4)。
- ・メインキャストは上演の1年前に10日間イスラエルに巡礼に行って役柄を考える。それでも1週間毎のダブルキャストなので、同じ役でも演じる人によって理解や解釈が異なる。さらに自分で演じていても毎日違う。イエスの敵役を演じたが、Passion

Play は神様が息子としてイエスを送ったという物語である (Inf.5)。

- ・聖書物語を演じていて、メインキャストの中で女性の登場人物が少ないなど、カトリック教会は女性に対して軽視していると感じることもある (Inf.5)。
- ・1970年の頃のイエスは上から目線で解釈された。1970年の頃の第二次世界大戦のドイツでは、ユダヤ教に対して迫害が多かった。だから昔は、キリストは神だった。はもっと人に近いイエス。時代と共に変わってきている。でも今はユダヤ人だったという感じで、新しい見方をするようになってきている (Inf.3)。
- ・昔のオーバーアマガウの Passion Play 中のイエスは聖人だが、時代とともに変化してきている。最近のテキストはもっと一般の人に近づいたイエス像になってきている。恐らく 100 年単位でみても内容が変わってきているのではないだろうか。10 年毎に時代に沿ったイエス像、ユダ像の解釈が変わってきていると思う (Inf.3)。
- ・イエスは神の声を伝える。しかしユダは違うアプローチをしたのだと思う。イエスはユダに対して、「その世界は、私の世界とは違う」と言った (Inf.3)。
- ・イエスの役をやってみると、聖書でも描かれているように、ヨハネが一番可愛いと思えた。これはちょっと面白い発見だ。役柄上でヨハネの役、イエスの役を演じるようになると、プライベートでもすごく仲良くなる (Inf.3)。
- ・上演期間は集中的に 100 回ほど出演するため、イエスに対して集中する (Inf.1)。

〈信仰的理解〉は、聖書登場人物の人間関係の理解やイエスへの親しみ感などが促進されることである。Passion Play のマーケティングディレクターもかつては、ヨハネを演じたことがあり、「Passion Play で役を演じているときに、自分はキリスト教徒だと意識された」と語っており、さらにイスラエル巡礼では「キリスト教はユダヤ教から発展していったという認識が強くなった」と言う。イスラエル巡礼によって、より聖書の世界の理解が深まっているようだ。コーラス担当で巡礼の機会がない Inf.1 も、それが舞台の役柄を深めるものと評価している。

オーバーアマガウ地区のカトリック教会の担当司祭によると、「生まれたときからある信仰はそれが自然であることのために、信仰の意識が低い信者も多いが、オーバーアマガウは小さい頃から Passion Play が身近にあるため、他の地域に比べて聖書の話や、よく理解している」。Passion Play の音楽監督も「Passion Play は 10 年毎に私たち自身が神様のことを考えるチャンスを与えられている」としており、演じるということは、感情的・心

理的なプロセスであることから聖書物語は、より印象的に記憶に残ると推測される。イエスを演じた Inf.3 は、時代とともに変化するキリスト観、キリストの心の理解を深め、現代に生きるイエス像を印象的に語っている。

《安定した帰属意識》〈信仰生活〉

- ・上演前と上演後に、信仰の大きな変化があるわけではないが、上演期間の年間には舞台に集中するため、イエスに対して集中していることになる (Inf.1)。
- ・その他多勢は役のアイデンティティもないし、信仰の変化はないと思う (Inf.2)。
- ・配役がイエスと対峙する大司祭役で、自分には合わない役だと思ったけれど、元々信仰深いので、敵役を演じたからといって信仰的な動揺はない (Inf.4)。
- ・35歳の1977年に特別公演でユダ役をやり、57歳の1990年の上演でもユダ役を演じてきたが、自分自身の信仰は変わらない (Inf.5)。
- ・信仰生活に大きな変化はないが、演じたことでイエスを親しく感じるようになった。次に機会があるならば、ユダの役を演じてみたいと思う (Inf.3)。
- ・信仰は自分の経験を通して強くなっていく。霊的に賢くもなってくるので、神父が言っていることに疑問が生まれることもある (Inf.5)。
- ・いつもは信仰を意識しない「時々信者」も感動する、パーフェクトな劇だと思う。(Inf.1)

《安定した帰属意識》は、オーバーアマガウという村コミュニティに関するテーマである。〈信仰生活〉はインフォーマントが語る自分の信仰心や信仰生活のことだが、インフォーマントの全員が「元々信仰深い」と語っているので、Passion Playを演じることによって、信仰者としての変化、例えば回心というような変化はない、と語っている。

2010年のPassion Playの上演は前半の部3時間、後半の部3時間で14:30から23:00まで上演された。17:00から20:00と3時間の休憩があり、この時間は食事の時間でもあるが、巡礼団は祈ったり、ディスカッションをしたりする時間になっている。教区の教会でも、祈りの場が提供される。第一舞台監督の演出家も「Passion Playは観ている人に祈りなのか、演劇なのか、ディスカッションをしてほしい。そのディスカッションを生むための機会を提供したい」と語っているように、演劇とは観客と俳優、俳優とテキストといった要素が複雑に絡み合ったものであり、Passion Playは観客へも問かける劇でもある。最も上演経験の多いInf.5さんは「人生のさまざまな経験を通して、信仰が深まっていく」と語っているが、神との誓いを果たす共演者でもある観客も、Passion Playでのデ

イスカッションが、人生のさまざまな経験のひとつとなることを期待されている。

《安定した帰属意識》〈コミュニティ〉

- ・世界で一番長く続いている Passion Play の町。Passion Play を通して、この町に生まれた人たちが伝統とその継承を意識している (Inf.1)。
- ・若い人は大学に行って、企業に入ってしまうためミュンヘンに出てしまうことが多いが、Passion Play を通して、町から離れたくないという感じになっている (Inf.2)。
 - ・1960年11歳の時に群衆役で、1970年以降はコーラスで参加している。コーラス部門の場合上演前だけでなく、常に練習をしている。出演するには覆面審査員のオーディションもある。課題曲と自由曲の2曲の審査を受けて選ばれるが、16歳以上のコーラス部門は競争率が高く、若い人の参加も増えている (Inf.1)。
- ・2000年の上演のときに8歳で旧約聖書の場面に初参加。18歳の時は卒業試験準備中で夜の部にしか参加できなかったが、いつも身近に Passion Play があった。父が30歳の1990年にイエスを演じ、40歳の2000年にペトロ役、50歳の2010年には大司祭ガブリエルを演じていて、家族全員がかかわっている感じ (Inf.2)。
- ・村人全員が演劇集団。ふだんも演劇をやっていて、その中でメインキャストを選んでいる。キャストは村議会にかけて決まる。メインキャストはオーバーアマガウに20年以上住民票がないと演者になれない。舞台監督は世界的に有名な演出家で、彼もオーバーアマガウ出身 (Inf.1)。
- ・1950年に子ども役で出て、17歳のときに合唱団に参加し、1970年からは10年毎に大きな役を演じている。息子も9歳で出演し、1980年には合唱で参加。息子はミュンヘン劇場の演出家であり、1990年には Passion Play の脚本と演出を手がけている。彼はオーバーアマガウで生まれ、ここで育った脚本家なんだ (Inf.5)。
- ・Passion Play は1997年から Passion Play に参加していて、1980、1984、1990、2000年と群衆役で参加し、2010年に大司祭役を演じた。村全体がアマチュア演劇集団みたいな感じで上演がないときでも、常に演劇に取り組んでいる。(Inf.4)・
- ・村にはアクターグループが3つあって、メインキャストを演じてからその後、劇団にも入るようになった。今はミュンヘン劇場でプロジューサーの仕事をしている (Inf.3)。
- ・地域の音楽学校は生涯教育に近い感じ。Passion Play のオーケストラもコーラスもここで育てる。自治体から補助金もたくさん出ている。(Inf.2)

- ・子どもたちも小さいときからクリスマスの劇をしたり、音楽の専門家に習ったり、村には学びの場がある。オーバーアマガウは木彫りの村で、お父さんもおじいちゃんも木彫り職人だった。オーバーアマガウは昔から芸術の村なんだ (Inf.3)。
- ・劇を上演することで、1つの家族みたいな感じが生まれてくる (Inf.1)。
- ・12使徒の役などを含めて、10歳から70歳まで参加しているので、楽屋で一緒にいることでお互いにすごく仲良くなり、有意義な時間を過ごしている (Inf.3)。
- ・子どもからお年寄りまで舞台上立つ役に村民は、上演の前年の灰の水曜日から1年かけて髭と髪を伸ばして、Passion Playに参加するのが決まりになっている (Inf.1)。

インフォーマントの語りから伝わる〈コミュニティ〉は《安定した帰属意識》をもたらしており、村が大きな一つの家族ようになっていく体験が語られている。語りから推測されるのは、高いコミュニティ感覚である。コミュニティ感覚とはコミュニティに対して人々が持つ態度のことで、コミュニティ感覚 (Sarason, 1974) は、(a). 地域の居心地の良さ、(b). 自分が地域に何らかの影響を及ぼしている、(c). 地域の人々が同じ価値観を共有している、(d). 地域の人々が互いに良い関係を保っているという尺度で測ることができる。

しかし、Passion Play がカトリック教会の聖書劇から発生していることから、カトリック信者以外の居心地の良さや価値観の共有は可能なのだろうか。ターニングポイントとなった1990年の新しい取り組みが村議会で採択される前にも、実はPassion Playの聖書物語の解釈に際して、村を二分する出来事が起きている。1990年がターニングポイントとなったのは、「変えていかなければ次世代への継承に繋がらない」と判断したからである。村は「古い人、新しい人、異なる宗教の人と共」に取り組み、宗教劇を演じながらも、特定の宗教にこだわらない、「開かれた共同体」を意識するようになっていった。2020年上演のPassion Playの脚本の改編に取り組む20代の第二舞台監督は、オーバーアマガウ生まれだが、トルコ人でイスラム教徒である。2030年のPassion Playでは彼が第一舞台監督になる可能性も高く、多様性のある「開かれた共同体」がさらに具現化していくであろうと、期待されている。

また、Passion Playは演劇だけでなく、オーケストラ、コーラスも村人で構成されており、その音楽のレベルが高く評価されている。メンバーは地域の音楽学校に属し、上演期間以外にも日頃からクオリティの高い練習をしていることから、村全体が生涯学習の環境

になっていることもオーバーアマガウのコミュニティの特徴となっている。生涯学習として非常に手厚く自治体が支援している。インフォーマントの語りでは、Passion Play の上演を通して伝統が意識され、次世代への継承や育成について語られている。

約半年にわたり上演される Passion Play の参加希望については、全村民に毎回アンケートが配られる。劇場への案内係りや衣装係りなどの希望なども出るが、一番人気はマリア役だそう。上演期間中、世界から 50 万人の巡礼者が訪れるオーバーアマガウは、Passion Play の上演だけでなく、スキーやクロスカントリー、ハングラライダーやハイキング、世界遺産のヴィース教会やエタール修道院、人気の城も近い。かつては資源に乏しく、木彫り職人の村であったが、今や観光資源も豊かな村となっている。

2. リサーチ・クエスチョン

リサーチ・クエスチョンは、Passion Play を演じるというプロセスや出来事はどのように経験され、意味づけられるかであった。一般的に取り入れられている演劇のトレーニングであるスタニスラフスキー・システムの Stanislavski (1924, 1936) は、演劇とは感情的、心理的なプロセスであるとし、劇の役の中に自自身の一部を探し出して、その役の「内面的真実」を探し出すことを要求する。本研究の Passion Play ではスタニスラフスキー・システムのトレーニングは意識されてはいなかったが、信仰者としての自分自身とはかけ離れた役であっても、「もし自分がこの状況に置かれたらどうするだろうか」という、その役が置かれた立場を理解する姿勢が見られた。そしてそれは、聖書物語の人間関係の〈信仰的理解〉に繋がっている。他人の経験を理解する方法として、想像ではなく「自分がその人の立場になる」という演劇は、共感と客観的な見方を引き出している。オーバーアマガウはその歴史から、開かれた共同体を意識せざるえない背景はあるが、現実の自分とは異なる立場を演じることで〈他者理解〉が促進され、宗教多元共存主義など開かれた宗教性が発達していくことが示唆された。

また、受難劇の登場人物は、12 使徒でさえイエスを裏切り、多くはイエスと対峙する役がほとんどである。Passion Play はイエスの受難、そして復活の物語であり、その物語は演者自身にとっても、個々人の葛藤を経て、赦される〈葛藤と赦し〉の体験に至っていた。心理療法のドラマセラピーの概念に影響を与えているとされる演劇という経験は、現実の世界の経験と同じように鮮明な記憶を残し、それぞれの人々の人生経験のひとつとして意味づけされている。

3. テーマ間の関係の図式化

分析によって得られたテーマの関係を図式化したものを示す(Figure1)。Passion Playを通して、2つのマスターテーマである《自己を知り、他者を知る》体験と、《安定した帰属意識》は相互に影響をしながら、その経験を積み重ねていく。それによって、他宗教への理解や宗教多元主義の視点の獲得へと繋がっている。オーバーアマガウのPassion Playの演者は、村のコミュニティに安定した帰属意識をもっており、高い結束型ソーシャル・キャピタルの集団であるとみられる。しかし、一方で異なるものも受け入れる橋渡し型の傾向も持っており、それは自己理解と他者理解から生まれている。

ソーシャル・キャピタルとは、人やグループ間の信頼・規範・ネットワークといったソフトな社会関係資本で、コミュニティ・ソーシャル・キャピタルの蓄積は多様なコミュニティの集まりで培われる。類似したネットワークを構築するのが結束型(ボンディング型)で、外部性の高いネットワークが橋渡し型(ブリッジ型)である。稲葉(2008)は、Uslanerの論文を引用しながら、橋渡し型の高低を開放性-閉鎖性、結束型の高低を個人主義-共同体主義と4つのタイプの宗教的ソーシャル・キャピタルを紹介しているが、オーバーアマガウは高い開放性を創出しながら、高い共同体主義を維持している高・橋渡し/高・結束型が成立していると言えよう。「地球市民の霊性」(Civic Spirituality)を持ち得る宗教的ソーシャル・キャピタルの事例ということができる。

第4項 結論

本研究の目的は、Passion Playを祈りの一つの行為であると考え、『霊操』第3、4週の「場所の設定」によって実存的な理解、宗教的意味づけがどのように深まるのかを検討することであった。「キリストの死と復活の出来事は、キリストの教の心臓、わたしたちの信仰の主要な支柱」(教皇ベネディクト16世)であり、受難劇の中心テーマである「受難と復活」は『霊操』第3週、4週にあたる。祈りは神との対話であり(『霊操』54)で、その聖書の場面を観ること、要するに自分も持っているすべての能力をあげて、その場面に共にいること(『霊操』195-197)とされている。さらに、オーバーアマガウという10年ごとにPassion Playを上演する共同体の宗教的歴史と、演劇の何がどのように演者に機能して、教育的意義を持っているのかを考察することであった。

今日の宗教性は社会の断片化を増長させるものではなく、普遍的な善を探し求めることであり、すべての人が正義、平等、自然とのバランスのうちに生きられるような、個人に

とつても集団にとつてもより生きやすい場の創造に参加すること (Cabarrus 2015) とされていることを勘案すると、『霊操』の第3週、第4週の宗教的体験に該当する Passion Play の受難と復活の物語体験を通して「人間の尊厳と地球の尊厳」「寛容」「正義」「連帯」といった「地球市民の霊性」(Civic Spirituality) が培われていることが示唆された。

『霊操』の第3週、第4週の宗教的体験に該当する Passion Play は、限定された閉じられた宗教的体験のように見えるが、自分とは異なる立場を理解し、他者理解に開かれた宗教性の発達に繋がっている。Cabarrus (2015) は、霊性は体験によって養わなければならないとしているが、人間と社会構造などによる否定的な出来事や葛藤がしばしば普遍的な善への行動に形を与えていることを指摘している。オーバーアマガウの Passion Play 上演の歴史が個々人の体験に、信仰的理解や他者理解にみる寛容や宗教多元主義的な視点のような連帯といった意味づけにも影響していると思われる。ディスカッションや内省する機会があることによって、その意味づけが個人にとってかけがいのない経験となっている。

本研究では Passion Play を演じたり、準備したりする側に立って分析を進めたが、演劇は演者とテキスト、演者と観客によって作られるものである。巡礼者としてこの地を訪れた観客がどのような宗教的意味づけを行っているのかも踏まえた検討を行うことで、祈りの「場所の設定」を促す Passion Play の全体像が見えてくるものと思われる。

さらに、10年後のテキストの改編の歴史を紐解くことで、イエス像やユダ像の解釈がどのように変化していったか。他宗教に配慮したイエスの物語は、どのような変遷が見られるのか。諸宗教との対話は、キリスト者の霊性や宗教性発達にどのような影響を及ぼすのか。今日的な宗教の諸相を分析する上で、興味深いデータになると思われる。開かれた宗教性は国際社会の中でますます重要になってきている。

Table 5-1 テーマ全体の要約表とテーマの出現頻度の一覧

マスターテーマ	中位のテーマ	下位のテーマ	言及者				
			Inf.1	Inf.2	Inf.3	Inf.4	Inf.5
			50代 女性	20代 女性	30代 男性	30代 男性	70代 男性
			コーラス	群衆	イエス	大司祭	ユダ, カイファス
自己を知り, 他者を知る	葛藤と赦し	葛藤		○	○	○	○
		人の弱さ・強さを感じる		○			○
		赦されることの意味の理解		○			○
		対峙する側への理解			○	○	○
	他者理解	反対の意見を持つ人の必要性			○		○
		弱者への理解や関心			○		○
		他宗教への理解 宗教多元共存主義	○	○	○	○	○
		権力を持っている側への理解					○
	信仰的理解	イエスの心の理解の深化			○		
		イエスへの親しみ感	○	○	○		
		時代とともに変化するイエス像			○		
		聖書登場人物の人間関係の理解	○		○	○	○
安定した 帰属意識	信仰生活	信仰の変化なし	○	○	○	○	○
		経験を重ねて信仰が強くなる					○
	コミュニティ	コミュニティ感覚	○	○	○	○	○
		生涯学習	○	○	○	○	○
		次世代への継承	○	○	○	○	○



Figure 5-1 2010年上演オーバーアマガウ村人による Passion Play

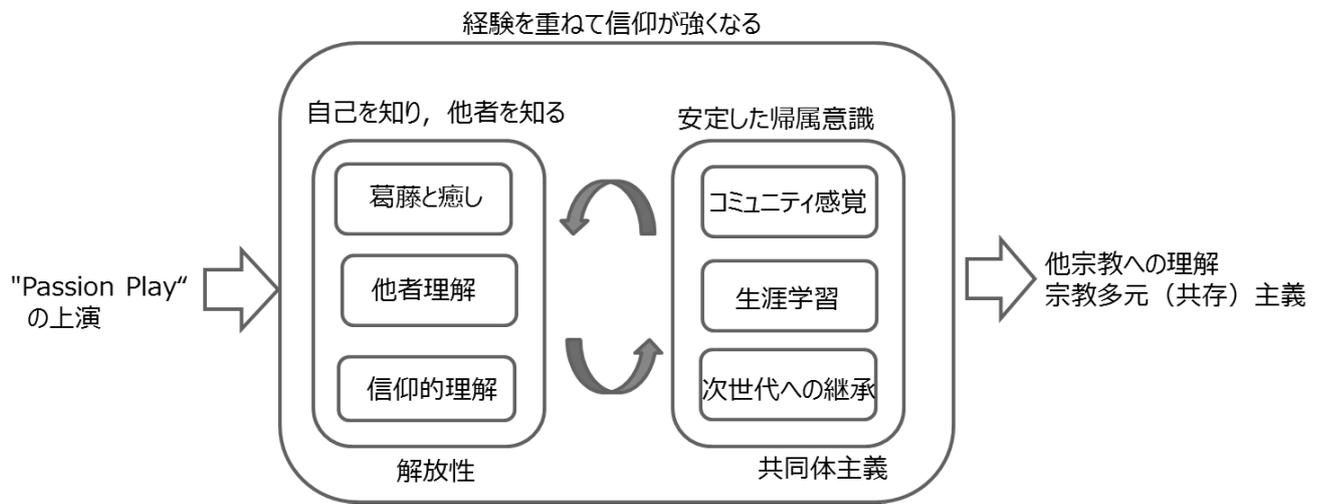


Figure 5-2 オーバーアマガウ村人の宗教性発達過程

第3節 総合考察

第2章では、宗教的意味システムでは祈りが「媒介」として重要な宗教体験であることから、意味システムにおける「霊操」(祈り)に注目して、その構造と機能を検討してきた。

研究1では、「霊操」プログラムの構造の構造分析から、「霊操」体験の全プロセスのダイナミズムを人がどのようにとらえ、どのように意味づけ、宗教性発達に影響しているかを検討した。「霊操」の構造を分析するためにプログラム評価を用いて、黙想者が過去を振り返ることで、根拠のある生路の選択が行い、さらに祈りを深め生きている意味づけをしていくプロセスが明らかになった。「霊操」が過去・現在・未来のメンタルタイムトラベルを促すプログラム構成になっていること、さらに前半の第1, 2週は神の視点で「私の人生」を見るというパーソナルな内省に対し、後半の第3, 4週は神の視点で「他者や社会との関わり」を見るという共同体感覚が促される内省が行われていることが示唆された。「霊操」プログラムにはこのような社会的視点調整能力の発達を促す機能があることが仮定される。

『霊操』第3, 4週はメインテーマとして受難と復活が描かれているが、イグナチオが祈りの準備として勧めている「場所の設定」として、受難と復活の聖書物語に該当する **Passion Play** を研究4で取り上げた。『霊操』の特徴の一つとして挙げられるのが、「場所を見る」という場所的なイメージを創ることによって、不可視的、長時間的現実に触れ、キリストの現存に直接関わる体験を促すことである。カトリック教会には伝統的に聖書劇の上演があり、「場所の設定」が祈りにもたらし得る宗教性発達への利点について検討した。「**Passion Play** はムスリムもカトリックも、プロテスタントも宗教を問わない。異なる宗教でも、神の概念は同じだからだ」と語られているように、「ディスカッションを生むための機会」としても仮定される。聖書劇の演劇という経験は、現実の世界の経験と同じように鮮明な記憶を残し、それぞれの人々の人生経験のひとつとして意味づけされていることが示唆された。この経験は自分とは異なる立場を理解し、他者理解に開かれた宗教性の発達に繋がっている。

以上、『霊操』の構造はメンタルタイムトラベルや祈りの準備として「場所の設定」を設定し、そこに自分自身を置くことなどで他者の視点を獲得する、社会的視点調整能力の発達を促す機能があることが示唆された。今日の宗教性は社会の断片化を増長させるものではなく、普遍的な善を探し求めることであることが見出された。

第3章 「霊操」(祈り)の一般化による宗教性発達支援の検討

第1節 ミッションスクールにおける教育の中の宗教性発達の検討 青年期の意味形成の質問紙調査(研究5-1)

第1章では、宗教的意味システムのプロセスを検討してきた。人生の危機において祈りが重要な宗教的体験であることが示唆されたとともに、複線径路等至性アプローチ(TEA)において先行研究でも挙げられているように、学校や友人などが第一次宗教的社会化に影響を及ぼしていることが示唆された。第2章では、宗教的意味システムにおける「霊操」(祈り)に注目して、その構造と機能を明らかにした。『霊操』の構造は過去・現在・未来を移動するメンタルタイムトラベルや祈りの準備として「場所の設定」を設定し、そこに自分自身を置くことで、社会的視点調整能力の発達を促す機能があることが示唆された。

そこで、本章では『霊操』の構造や機能の一般化ということで、『霊操』などイグナチオの霊的ビジョンを応用した教育を特徴に掲げる、イエズス会の学校教育を取り上げて教育の中の宗教性を検討する。

第1項 問題と目的

今日のミッションスクールの役割の一つは、私たちが日常を生きるなかで生まれるさまざまな問いを、人生の意味と目的の追究に関わる問いにつないでいく教育をすることが挙げられる。カトリック教会は第二バチカン公会議(1962~65年)以降、カトリック教育に関する文書をいくつも公布してきており、1988年公布のカトリック教育文書では「カトリック学校は他の学校と同一の様々な教育活動を行う公益施設としての目的を持つが、同時に様々な活動に福音的価値が浸透しており、また秘跡と宗教・信仰教育があり、それらの教育プロセスの実践を通して福音宣教に関わるカトリック学校の究極的な教育目的が達成されてゆく。そこにカトリック学校における教育の特徴がある」としている。

カトリック教育文書では、キリスト教的教育と宗教的次元を持たない人間形成という二つの教育は、交わることなく並行する個別のものではないと明示し、カトリック学校の教育目標として次のような視座があると提言している。

- ・学校のアイデンティティ，とりわけその精神である福音的価値観を明示する。
- ・学校の教育方法のねらい，および教育的，文化的ねらいを明確に示す。
- ・授業内容およびそれを通して伝えられるべき価値を提示する。
- ・学校組織や経営について説明する。
- ・学校方針に関して，専門スタッフ（管理職や教職員）に留保されるべきものと，保護者と生徒の協力を得て練られるべきものとを定め，さらに教師や保護者や生徒の自由な自発性に委ねられるべき活動についても定める。
- ・生徒の達成度を試験し評価する方法を公表する。

浦（2013）は，1929年以降公布されてきたカトリック教育に関するバチカン公文書を要約し，文書に示される理念を教育現場にいかに対応できるか解説を試みて，カトリック学校の歴史を理解しかつ現状分析を行う研究と並んで，近年では研究者と学校現場が協力し，実際に日常の教育活動の変革に至るまでの試行錯誤を伴う研究（**action research**）がなされていることを紹介している。それらの研究ではカトリック学校の教育理念をそれぞれの場で展開し，教育をよりいっそう「カトリック的なもの」に変えて行こうとする試みが行われており，具体的にはカトリック教育を実践するうえでも効果的な教育学や心理学などが取り上げられていることを挙げている。さらに今後，非信徒の教職員にカトリックの教育理念を発展させていく試みが委ねられていることを指摘している。

今日，ミッション校はキリスト教主義の維持に腐心している。例えばカトリック校ではカトリックの理念を体現する司祭やシスターなどの修道者の姿が，キャンパス内で少なくなった。このように宗教色が薄まるなかで，建学の精神を伝え，キリスト教的価値観を広めるというミッションは今後，具体的には何をどのように果たそうとしているのかが問われている。そこで改めて問われるのが建学の精神によるミッション校のアイデンティティである。69カ国で，231の大学，462の中高等学校，187の小学校，70の専門学校の設立母体である，カトリック・イエズス会（**Societas Jesu**）が掲げる教育の目的は「正義の連鎖をもたらす人」（**multiplying agents**），「他者に仕える人」（**men and women for others**）を育成することとしている。さらに，その学校教育を特徴づけるものとして，イエズス会の初代総長であったイグナチオらしさ（**Ignatianidad**）を挙げている（**Arrupe, 2013**）。イエズス会の学校教育の特徴がイグナチオの霊的ビジョンを応用したものである。

本調査の協力校の教育が目指す人間像は，イエズス会設立の姉妹校とも共通した「**Men for Others, with others. (他者のために，他者とともに生きる人間)**」で，その育成を通し

て、世界をよりよくしていくために貢献できることを喜びとする人間になるように導くことを使命として掲げている。自ら考え、自ら動くことを目標に、中高一貫のゆとりある時間の中で、学びへの興味をふくらませ、何事にも積極的に取り組む姿勢を養う。

具体的な 取組内容としては、

(1) ILP : Ignatian Leadership Program を実施している。これはイエズス会の創設者イグナチオ・デ・ロヨラの『靈操』の方法を教育に応用した、全世界のイエズス会学校で共有する Ignatian Pedagogy (イグナチオ的教授法：経験→内省→実践→評価のプロセスを通じ、物事を深く徹底的に知る方法) に基づいて、生徒が「他者のために、他者のために、他者ととも **Men for Others, with Others**」という言葉を実現することが出来るリーダーとして育つことを目指すプログラムである。同校では倫理(道徳)と総合学習を統合した形でこの ILP を実施している。中学では、家族・友人など自分の身近な「他者」からはじまり(家族・友人・地域理解)、障害者や元ハンセン病患者の人々(アイマスク体験、盲導犬体験、車椅子体験など)、フィリピン・ネパールなどの途上国やアフリカ難民など(異文化理解・平和学習)、さまざまな立場の人々について体験的に学び、自己中心的な自分から次第に視野を広げていく。高校では、キリスト教的世界観をもとに、自分に何が出来るかを考え、より広い意味で「他者」を考える中で、将来の自分の生き方へとつなげていく。高1は生き方・使命に対する洞察を深め、大学訪問や卒業生(大学生・社会人)の講演などを行いつつ、自分の進路を探る。高2では、自分が興味・関心のある学問分野について少人数のゼミで研究することで知的な深みを体験し、最終的に論文作成を行う。高3では哲学を学び、生きる意味や目的について思索する。この6年間の ILP を通じて、「**Men for Others, with others**」の価値観をもち、それを実践できる人間を育てることを目指している。

(2) 国際交流：フィリピンのイエズス会姉妹校との国際交流を通じて、国際理解教育を実施。希望者を対象として、フィリピン体験学習(ハンセン病療養所や難民共同体、農村共同体などでの体験)やフィリピン姉妹校生徒の受け入れを実施している。この活動を通じて、「本当の豊かさとは何か」を学ぶ。

(3) 社会奉仕活動：「**Be Men for Others, with Others**」の精神を実践する活動として、社会奉仕を重要なものと考えている。物質的な風潮の広がる現代社会にあって、奉仕的な生き方を選び取り、人間的で幸福な社会を築くために仕える人間が育つように配慮している。ボランティアサークル(G. S. S.)、災害ボランティア、障害児サマースクール、老人ホ

ーム・保育園・作業所などでのワークキャンプ，街頭募金，児童施設を招いてのクリスマス会など。

(4) 宗教活動：聖書やイエズス会の精神，奉仕的な生き方を学ぶことで，豊かな宗教観・価値観・世界観の形成を目指す（以上，学校案内より抜粋）。また，イエズス会学校の特徴的な取り組みとして瞑目といって，授業の初めと終わりには目を閉じて心を静かにする時間を持つことや，2時間目と3時間目に間にシャツ1枚または上半身裸で全員がグラウンドに出て学院体操を行うという，中間体操の時間がある。

キリスト教的教育と宗教的次元を持たない人間形成という二つの教育の交流を「日常を生きるなかで生まれるさまざまな問いを，人生の意味と目的の追究に関わる問いにつないでいく」教育と仮定し，カトリックの教育理念を発展させていく試みとして，イグナチオの『靈操』の靈的ビジョンを応用した教育を特徴としているイエズス会学校における，教育の中の宗教的社会化を質問紙調査によって探り，宗教性の発芽の要因を分析することが本調査の目的である。

第2項 方法

1. 調査協力者

対象はイエズス会系のミッションスクール中高一貫校の高校1年生187名を対象とし，187名の有効回答数を得た。男子187名（平均年齢15.74歳，SD.441歳）であった。

2. 調査時期および手続き

2016年11月に実施した。授業時間を使って調査の主旨と方法の説明を記載した書面を担当教員に配布してもらったうえで了解を得た後，質問紙によりアンケート調査を実施した。質問紙の最初には調査の目的や注意を明記し，回答は無記名で行った。回答時間は約20分であった。結果はSPSS Statistics24を使用し，分析を行った。

3. 調査内容

(1) **共同体感覚尺度** 高坂（2011）が作成した共同体感覚尺度を使用した。共同体感覚とは，Adlerの個人心理学における中心的理論概念のひとつである。Adlerは「他の人の目で見えて，他の人の耳で聞き，他の人の心で感じる」という言葉が共同体感覚の寛容し得る定義であるとしている。先行研究では，共同体感覚は肯定的な社会適応の基準であるとされている。

る。「所属感・信頼感」,「自己受容」,「貢献感」の3因子構造が確認され,22項目から構成されている。「とても当てはまる」から「全く当てはまらない」までの5件法で回答を求めた。

(2) 自我体験尺度 天谷(2005)が作成した自我体験尺度を使用した。自我体験とは「私」への問いで、自己理解に関する認知的な側面の発達に寄与している可能性があると考えられており、こども時代に生起する自我体験での問いを青年期ではより実践的な問い「どのように」「どのような」への問いに変更することが考えられている。自我体験を経た人の中には、自我体験がその後の生き方や世界観に影響を与える場合があり、問いの変更が発達の契機と捉えることができるのではないかとされている。15項目から構成されており、「思ったことがある」から「わからない・覚えていない」の5件法で自我体験の喚起について回答を求めた。さらに、15項目のうちでその体験が最も印象に残っている項目において、その体験が何かをきっかけにどのような状況のなかで生じたのか、ということについて具体的に記述をしてもらった。

(3) 人生の意味 (MLQ) 島井・大井(2005)が作成した日本版「人生の意味」(Meaning in Life Questionnaire:MLQ)尺度を使用した。意味への意志、意味の追求については、意味の「保有」と「追求」の2側面を見る先行研究では発達的には意味の保有は加齢に従って増加する一方、追求は低くなることや日本とアメリカの比較ではアメリカは保有が高く、日本では追求が高いことなどが示されている。MLQは10項目で構成され、「非常によく当てはまる」から「全く当てはまらない」までの7件法で回答を求めた。

(4) Important Meaning Index (IMI) 浦田(2013)が作成した人生の意味の源に関する尺度を使用した。IMIは人が人生の意味をどのように捉えているのか、人生の意味にいかにか答えているか、人生の意味の源に関するものである。意味の「保有」と「追求」を測るMLQの意味の内容の構造を掘り下げるものとして用いた。「ウィルビーイングと共同性」「自己実現」,「自己超越」,「現世利益」の4因子構造が確認されており,31項目に対して「追求」の程度と「実現」の程度を「非常に追求している」から「全く追求していない」「完全に実現している」から「全く実現していない」まで7件法で回答を求めた。

(5) フェイスシート すべての対象者に、学年、年齢、性別、自身がキリスト教信者か、家族でキリスト教信者がいるか、親しい友人でキリスト教信者がいるか、キリスト教について知ったきっかけは何かの記入を求めた。

第3項 結果と考察

1. キリスト教との接点

本調査の回答は187名から得られた。男子187名（平均年齢15.74歳，SD.441歳）であった。我が国においてキリスト教はマイノリティーであるが，そのキリスト教についてどこで接点があったと認識しているのかを確認した。

回答者187名中キリスト教信者は5名であった（Table 6-1）。キリスト教を知るきっかけで最も多かったのは幼稚園や学校（122名），次いでマスメディア（24名）であった。先行研究でも明らかになっているように，第一次宗教的社会化に影響を及ぼす学校が最も高い接点であることが本調査でも確認できた（Figure 6-1）。

Table 6-1 キリスト教信者認識の有無

	キリスト教信者認識有	キリスト教信者認識無
自分自身（信者）	5名	182名
家族（信者）	8名	179名
親しい友人（信者）	63名	124名

N=187

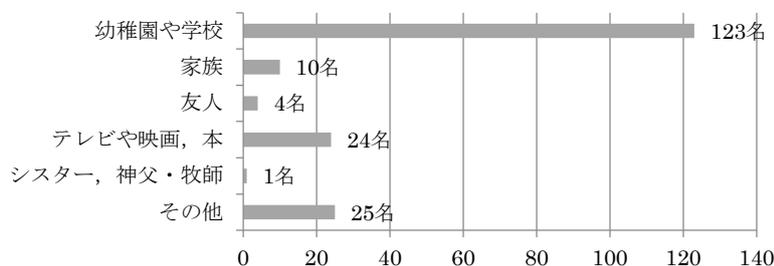


Figure 6-1 キリスト教を知るきっかけ

2. 共同体感覚の測定

宗教的社会化では，第一次的社会化の要因として学校や友人が挙がっており，研究1においてもそれらの要因が抽出された。そこで所属するコミュニティへの肯定的な捉え方を共同体感覚尺度で確認した。

高坂（2011）が作成した共同体感覚の22項目の構成を検討するため，因子抽出法プロマックス回転による因子分析を行った。因子負荷量が.40に満たない項目を削除し，再度因子

分析を行った結果 21 項目、3 因子が抽出された。因子間相関を Table 6-2 に示す。第 1 因子は「所属感・信頼感」で 9 項目、第 2 因子は「自己受容」で 6 項目、第 3 因子は「貢献感」で 6 項目であった。共同体感覚尺度の 3 つの下位尺度に相当する項目の平均値を算出し、「所属感・信頼感」下位尺度得点 ($M=21.8$, $SD=6.6$) , 「自己受容」下位尺度得点 ($M=11.4$, $SD=4.7$) , 「貢献感」下位尺度得点 ($M=11.4$, $SD=4.5$) とした。内的整合性を検討するために各下位尺度の α 係数を算出したところ、「所属感・信頼感」で $\alpha=.91$, 「自己受容」で $\alpha=.85$, 「貢献感」で $\alpha=.91$ と十分な値が得られた。共同体感覚の下位尺度間相関を Table6-3 に示す。

「所属感・信頼感」は「やや当てはまる」以上が 59.4% (110 名)であった。一方、「自己受容」は「やや当てはまる」以上が 42% (79 名) , 「貢献感」は「やや当てはまる」以上が 40.5% (75 名) と過半数を下回った。併せて、「貢献感」で「どちらとも言えない」が 38% (71 名) , 「自己受容」で 29% (54 名) と高く、その結果を示す (Figure 6-2, Figure 6-3 Figure 6-4) 。

Table 6-2 共同体感覚因子分析結果（最尤法・プロマックス回転）

N=181 $\alpha = .92$	1	2	3	共通性
第1因子「所属感・信頼感」 ($\alpha = .905$)				
1. 自分から進んで人の輪に入ることができている	.861	-.002	-.042	.688
3. 積極的に周りとの関わりをもつことができている	.857	-.029	-.049	.690
2. 自分から進んで人との信頼関係をつくることができている	.817	.040	-.050	.725
6. 今自分がいるグループや集団に自主的に加わっている	.751	.009	-.020	.566
7. 自分が今いるグループや集団の一員であることを実感している	.679	-.032	.147	.502
8. 周囲の人との活動に積極的に参加している	.658	.214	-.206	.599
4. 自分が今いるグループや集団の人たちを信頼することができる	.646	-.145	.178	.396
9. 頼りにできる人がいる	.488	.169	.076	.397
5. 全体的に他人を信じることができている	.404	.215	.019	.320
第2因子「貢献感」 ($\alpha = .906$)				
19. 困っている人に対して積極的に手助けすることができる	-.069	.905	-.024	.737
18. 人のためになることを積極的にすることができる	-.021	.877	.048	.775
20. 他人のためでも自ら進んで力を尽くすことができる	-.006	.873	-.053	.730
17. 進んで人の役に立つことをすることができる	.014	.780	.072	.661
21. 周囲の人々のために自主的に行動することができる	.125	.72	-.075	.620
22. 誰に対しても思いやりをもって接することができる	.200	.414	.045	.330
第3因子「自己受容」 ($\alpha = .857$)				
12. 自分でも自分自身を認めることが出来ている	.068	-.140	.869	.721
11. 自分自身に納得している	.062	-.180	.775	.560
13. 欠点も含めて自分のことが好きだ	-.108	.197	.762	.659
14. 今の自分に満足している	-.073	.041	.633	.398
15. 今の自分を大切にしている	.072	.105	.629	.483
16. 自分には何かしら誇れるものがある	.049	.313	.447	.417
累積寄与率	36.098	48.084	55.188	
因子相関行列				
1	-	.604	.238	
2	.604	-	.309	
3	.238	.309	-	

Table 6-3 共同体感覚の下位尺度間相関

	所属感・信頼感	自己受容	貢献感
所属感・信頼感	—	.22**	.59**
自己受容		—	.27**
貢献感			—

** $p < .01$

N=184

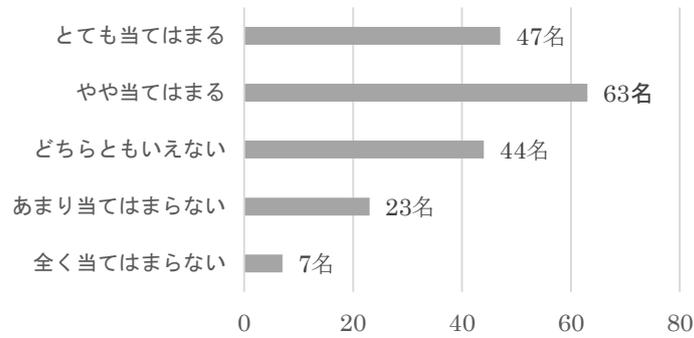


Figure 6-2 共同体感覚の所属感・信頼感

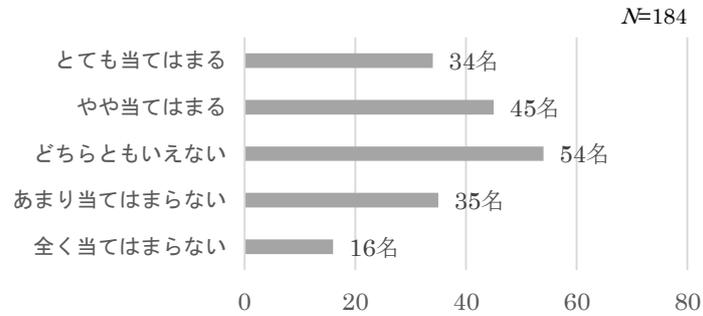


Figure 6-3 共同体感覚の自己受容

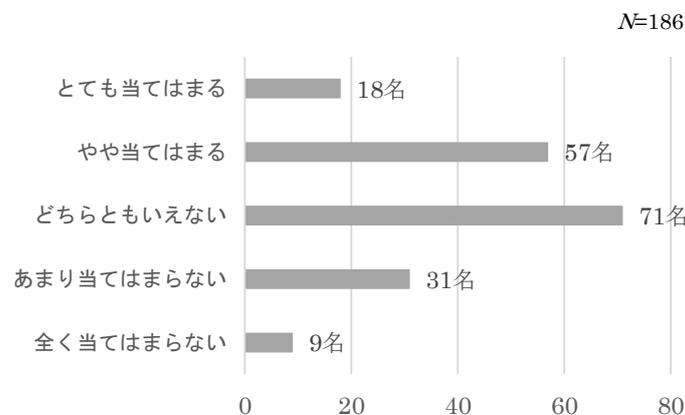


Figure 6-4 共同体感覚の貢献感

高坂（2011）によると、共同体感覚の一側面としての所属感は単にコミュニティの中にいるという感覚ではなくて、自らの選択と責任において、現在のコミュニティの一員であると自覚している感覚のこととされている。本調査では、中高一貫校に約4年間（高校1年の11月の調査実施）在籍している環境において〈所属感・信頼感〉は高いと想定されたが、約6割の生徒が所属するコミュニティを肯定的に捉えている。一方、他者を援助や協力してくれる仲間であると見なしているものの、自分自身に対する信頼感である自己受容や貢献感については低い傾向が見られる。自分自身を信頼する自己受容によって具体的な行動をするといった貢献感に繋がっていくなど、2つの側面は相互に関連していると考えられる。

3. 自我体験の体験喚起の測定

天谷（2005）が作成した自我体験尺度の15項目の構成を検討するため、プロマックス回転による因子分析を行った。天谷（2011）によると、自我体験には『私1』はなぜ『私2』なのか」といった存在への問い、『私1』はなぜこの時代に存在しているのか」といった起源・場所への問い、『私1』はなぜ〇〇という名前（『私2』の名前）なのか」といった存在への感覚的違和感と、3つの側面があるとされる。因子量が.40に満たない項目を削除し、再度因子分析を行った結果14項目、3因子が抽出された。因子間相関をTable 6-4に示す。第1因子は「存在感への感覚的違和感」で7項目、第2因子は「起源・場所への問い」で4項目、第3因子は「存在への問い」で3項目であった。自我体験尺度の3つの下位尺度に

相当する項目の平均値を算出し、「存在への感覚的違和感」下位尺度得点 ($M=11.1$, $SD=5.8$), 「起源・場所への問い」下位尺度得点 ($M=6.1$, $SD=3.4$), 「存在への問い」下位尺度得点 ($M=5.1$, $SD=2.6$) とした。内的整合性を検討するために各下位尺度の α 係数を算出したところ, 「所属感・信頼感」で $\alpha=.90$, 「自己受容」で $\alpha=.78$, 「貢献感」で $\alpha=.82$ と十分な値が得られた。共同体感覚の下位尺度間相関を Table6-3 に示す。3つの下位尺度は互いに有意な正の相関を示した。

天谷は自我体験尺度での質問紙調査から, 自我体験の喚起やその内容の検討, 体験の意味づけや時間的経過による変化を自由記述やインタビュー調査で行い, 〈私〉への問いの変化を縦断的に研究している。また, 自我体験と人生の意味への問いとの関連を調べた浦田 (2013) の先行研究でも天谷の自我体験尺度を用いて自我体験の喚起や「体験した」と回答している項目の自由記述からその体験がその後の人生観などにどのような影響を及ぼしているのか, インタビュー調査を行っている。そこで本調査でも, 〈私〉への問いは意味探求へと繋がるものと仮定し, 自我体験喚起率や自我体験の内容について検討した。

天谷 (2011) は中学・高校・大学生を対象に調査を行っているが, 自我体験喚起は約 4割強前後としている。先行研究と比べると本調査における自我体験と思われる体験率は高く, 7割 ($N=131$) が何らかの体験をし, 記憶していることが示唆された (Table 6-6)。自我体験 15項目の中で最も印象に残っている体験は「自分はなぜ他の国や他の時代ではなく, たまたま日本のこの時代に生まれたのか」と思ったが 25.2%で, 「起源・場所への問い」であった。次いで「自分はどこに行くのだろう」と思ったが 13.0%, 「自分は何だろう」8.4%であった。これらの「存在への問い」の項目の自由記述の原文を確認すると, 過去・現在・未来における自分の存在への問いとなっている。続いて「何をもって『自分』としているのだろう」7.6%, 「自分が本当に自分か」6.9%と「存在への感覚的違和感」であった。

宗教を宗教的意味システムとして, 意味形成や意味価値の相互の影響を検討するうえで意味形成処理の際, 宗教について知っている情報は取り込まれやすい (Goldsten, 2011)。個人の欲求に宗教が提示するものが合致し, 意味をもたらすものとして知覚されうる時, 回心や意味形成処理のトリガーになることが明らかになっている。宗教的社会化は意味システムを検討するうえで重要な要件となるが, 本調査では意味形成処理の際, 個人の欲求のひとつとして, 自我体験も重要な要件であると仮定した。自我体験を発達の観点からアプローチする際に, 発達のどの段階に位置づけられる現象か, 体験の内容や心性, 認知能力の特徴を縦断的に検討する必要があるが, 高い体験喚起率と体験項目から考察すると,

同校が進学校であり、哲学的素養や言語能力、認知力が高いことも関係していると思われる。

Table 6-4 自我体験因子分析結果（最尤法・プロマックス回転）

N=182 $\alpha=.93$	1	2	3	共通性
第1因子「存在への感覚的違和感」（ $\alpha=.90$ ）				
11. 自分が自分であることが不思議だ、と感じた	.919	.090	-.187	.773
9. 自分はなぜ自分なのだろう、と考えた	.910	-.015	-.124	.673
6. 自分の正体って何だろう、と不思議に思った	.664	-.121	.281	.648
8. 自分は本当に自分か、とわからなくなった	.588	.043	.083	.457
5. 一体何をもって「自分」としているのだろうと、おもった	.538	.062	.221	.564
4. 自分は誰だろうと、考えた	.438	.048	.339	.557
7. 自分の存在そのものが不思議だ、と思った	.418	.157	.231	.510
第2因子「起源・場所への問い」（ $\alpha=.78$ ）				
14. いろいろな人がいるのに、なぜたまたま私なのだろう、と不思議に思った	-.086	.941	-.054	.924
13. 私が私としてでなく、他の誰かとして生まれたということもあっていいのに、どうして私となっているのだろう、とふと思った	.069	.677	.084	.600
10. 誰でもなく、どうして自分なのだろう、と考えた	.276	.660	-.127	.627
15. 自分はなぜ他の国や他の時代ではなく、たまたま日本の（または母国の）この時代に生まれたのか、わからないなあと思った	-.070	.478	.246	.353
第3因子「存在への問い」（ $\alpha=.82$ ）				
2. 自分はどこに行くのだろう、と思った	-.204	.123	.861	.640
1. 自分はどこから来たのだろう、と疑問に思った	.130	-.168	.832	.706
3. 自分は何だろうと、考えた	.155	.213	.513	.603
累積寄与率	45.601	54.386	59.145	
因子相関行列				
1	-	.652	.683	
2	.652	-	.539	
3	.683	.539	-	

Table 6-5 自我体験の下位尺度間相関

	存在への感覚的 違和感	起源・場所 への問い	存在への問い
存在への感覚的違和感	—	.64**	.65**
起源・場所への問い		—	.49**
存在への問い			—

** $p < .01$

Table 6-6 自我体験喚起

N=131 単位%

最も印象に残っている体験の項目	喚起の割合
1. 自分はどこから来るのだろう	6.9
2. 自分はどこに行くのだろう	13.0
3. 自分は何だろう	8.4
4. 自分は誰だろう	6.1
5. 何をもって「自分」としているのだろう	7.6
6. 自分の正体って何だろう	4.6
7. 自分の存在そのものが不思議だ	5.3
8. 自分は本当に自分か	6.9
9. 自分はなぜ自分なのだろう	2.3
10. 誰でもなくどうして自分なのだろう	2.3
11. 自分が自分であることが不思議だ	1.5
12. なぜ私はこの体を選んだのか	4.6
13. 私が私としてではなく、他の誰かとして生まれたということもあっていいのに、どうして私となっているのだろう	3.8
14. いろいろな人がいるのに、なぜたまたま私なのだろう	1.5
15. 自分はなぜ他の国や他の時代ではなく、たまたま日本のこの時代に生まれたのか	25.2

4. 自我体験と人生の意味への問い

自我体験は「『私1』について『なぜ』という問いや感覚的違和感を持ち始める体験」と定義され、私という存在への問いであることから自我体験があると記憶している者は人生の意味への問いを意識すると考えられる。天谷はより明確な自我体験を精査する方法として、最も印象に残っている項目のその体験状況を問う自由記述を重視しているが、本調査においても同様に自由記述に回答を求めた。182名中自我体験喚起者131名、さらに自由記述に回答した者は130名で、71.4%と高い回答率であった。これを自我体験有群とした。自我体験と人生の問いとの関連を検討するために、自我体験（自由記述）有群と自我体験無群のMLQ人生の意味（島井・大竹2005）の差を検討した。

島井・大竹が作成したMLQ尺度の10項目の構成を検討するため、因子抽出法プロマックス回転による因子分析を行った。因子量が.40に満たない項目を削除し、再度因子分析を行った結果9項目、2因子が抽出された。プロマックス回転と因子間相関をTable 6-7に示す。第1因子は「意味探求」で5項目、第2因子は「意味保有」で4項目であった。人生の意味（MQL）尺度の2つの下位尺度に相当する項目の平均値を算出し、「意味探求」下位尺度得点（ $M=20.3$, $SD=6.2$ ）, 「意味保有」下位尺度得点（ $M=12.3$, $SD=4.9$ ）とした。内的整合性を検討するために各下位尺度の α 係数を算出したところ、「意味探求」で $\alpha=.83$, 「意味保有」で $\alpha=.89$ と十分な値が得られた。人生の意味（MLQ）の下位尺度間相関をTable 6-8に示す。

「意味保有」については、自我体験無群が「少し当てはまる」から「非常によく当てはまる」に対して、自我体験有群は「少し当てはまる」から「非常によく当てはまる」は1.2倍高い値であった。「意味探求」については、自我体験無群が「少し当てはまる」から「非常に当てはまる」に対して、自我体験有群は「少し当てはまる」から「非常によく当てはまる」は1.5倍高い値であった。先行研究から追求（探求）と実現（保有）の側面は、発達に従って変化していき、追求が減り、実現が増える変化になることがわかっている。したがって調査対象年齢（平均年齢15.74歳）からも「意味探求」が上回るであることが想定されたが、結果は先行研究と同様に「意味探求」は「意味保有」より1.4倍高い値であった。その結果を示す（Figure 6-5, Figure 6-6）。

結果から自我体験有群は「意味保有」も「意味探求」も自我体験無群に比べて高い値であることから、私という存在への問いは人生の意味への問いに繋がるものであることが示唆された。

Table 6-7 人生の意味 (MLQ) 因子分析結果 (最尤法・プロマックス回転)

N=185 $\alpha = .81$	1	2	共通性
第1因子「意味探求」 ($\alpha = .83$)			
10. 私は自分の人生の意味を見つけようとしている	.829	-.204	.729
9. 私は自分の人生の目的や目標を探している	.807	-.284	.731
7. 私はいつも自分の人生を意味を見つけたいと思っている	.787	-.187	.654
8. 私はいつも自分の人生を有意義にする何かを探している	.754	-.125	.584
6. 私は人生を有意義なものにする何かを見つけたいと思っている	.556	-.293	.396
第2因子「意味保有」 ($\alpha = .89$)			
2. 私の人生ははっきりした目的がある	.385	.782	.760
4. 私は充実した人生の目標を見いだしている	.326	.667	.551
1. 私は人生の意味を理解している	.316	.601	.461
3. 私はいつも自分の人生が有意義なものであると十分に感じている	.292	.589	.432
累積寄与率	32.759	54.230	
因子相関行列	1	2	
	-	.179	
	.179	-	

Table 6-8 人生の意味 (MLQ) の下位尺度間相関

	意味探求	意味保有
意味探求	—	.129
意味保有		—

単位% : 5つの質問項目に対するの累計 (各項目 100%)

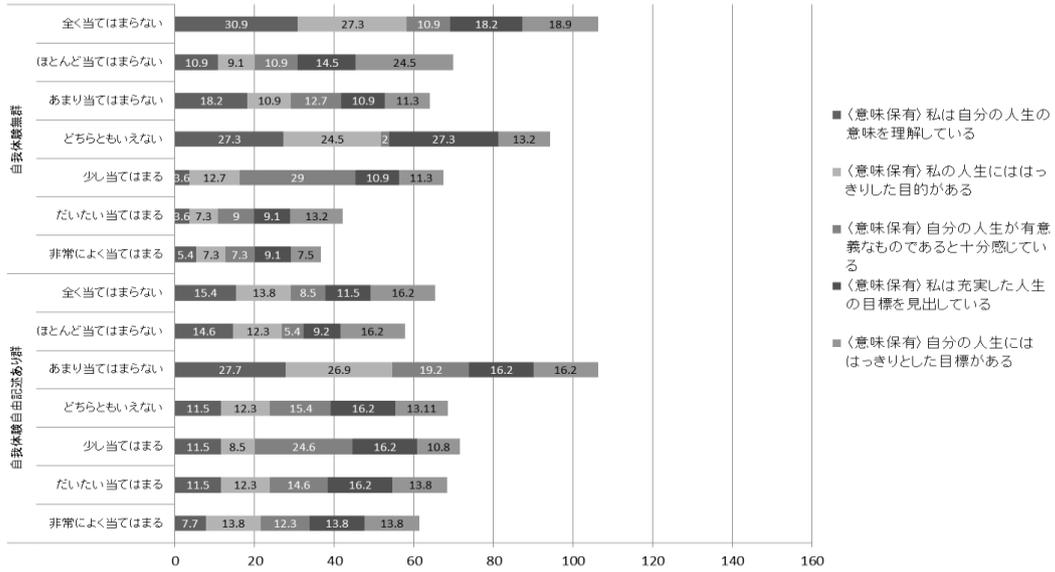


Figure 6-5 自我体験と意味保有 (MLQ)

単位% : 5つの質問項目に対するの累計 (各項目 100%)

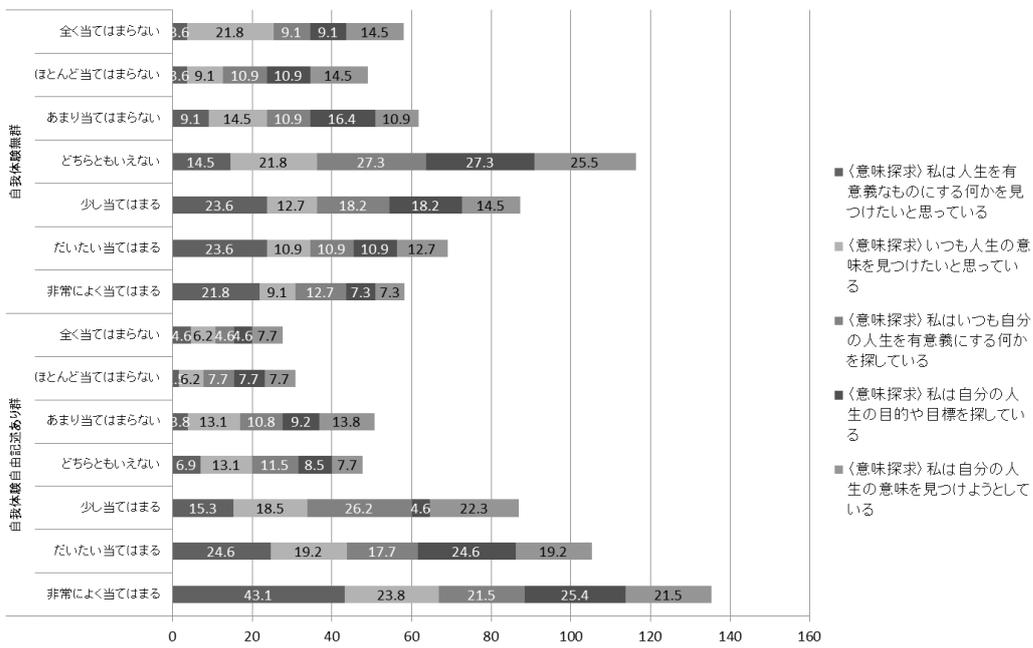


Figure 6-6 自我体験と意味探求 (MLQ)

5. MLQの保有・探求とIMIの追求・実現得点と関係

意味の探求（追求）と意味の保有（実現）の側面は、発達に従って変化していく。意味を追求し、どのような意味を実現しているか。浦田（2013）が作成した、人生の意味の源に関する尺度（Important Meaning Index:IMI）は意味の源の追求と実現の双方を測定することを目的としたもので横断的に見ることにより、意味の追求を実現の発達的变化の一端を探るものである。問い（追求）の側面と答え（保有）の関係を見ることで、実現と追求の差が大きいことへのリスクの示唆が得られるとしている。本調査では、自我体験とMQLから得られた探求（追求）と保有（実現）の意味の源を確認するために、IMIを用いた。

浦田が作成した人生の意味の源に関する尺度（IMI）の31項目の構成を検討するため、追求得点を元にプロマックス回転による因子分析を行ったが、「自己実現」「ウィルビーイングと共同性」「自己超越」「現世利益」因子など先行知見が見いだされなかったため、IMIの4因子の項目に対して、「少し追求している」から「非常に追求している」を追求しているとカウントし、意味の源を確認した。その結果を示す（Figure 6-7, Figure 6-8）

意味の源として追求（問い）しているのは、「ウィルビーイングと共同性」の友人と楽しく過ごすこと、喜びや満足を感じることや「自己実現」の能力や技能を身につけて成長すること、知識を広げて多くのことを理解することであった。そしてその答えとなる実現では、家族と仲良く暮らすこと、喜びや満足を感じること、友人と楽しく過ごすことなどが挙げられている。

追求と実現の差を見てみると、「現世利益」のお金をたくさん稼ぐことや他者から認められ尊敬されること、他人に対する影響力を持つことなどの項目の差が大きく（105～74ポイント差）、対象年齢（平均年齢15.74歳）を勘案すると現在の環境の中で実現することが難しいことが伺える。「自己実現」の能力や技能を身につけて成長することは162得点と追求傾向に対して、実現は92得点と「自己実現」項目の中では追求と実現の差は大きい（70ポイント差）。一方、「自己超越」の項目は追求も実現も低く、関心を示すものは少数ではあったが、追求と実現の差は少なく（23～0ポイント差）、神仏を信じてその教えを守ることやスピリチュアルな次元に気づきつながりを持つこと、自然とつながりを持つことを追求している者にとっては実現されていることが示された。

単位人数

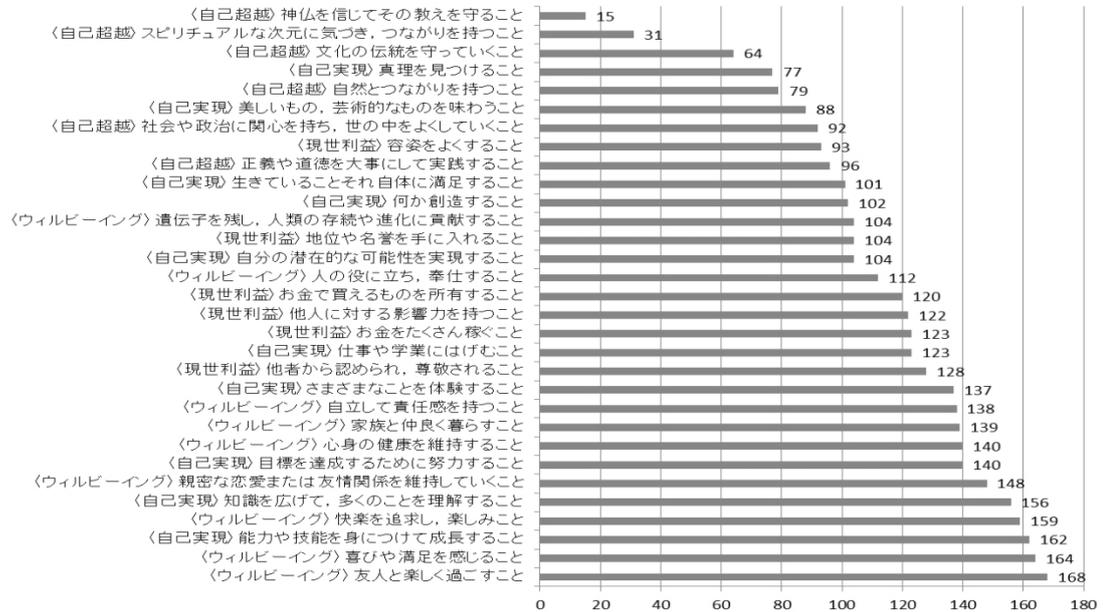


Figure 6-7 MLQ の追求得点

単位人数

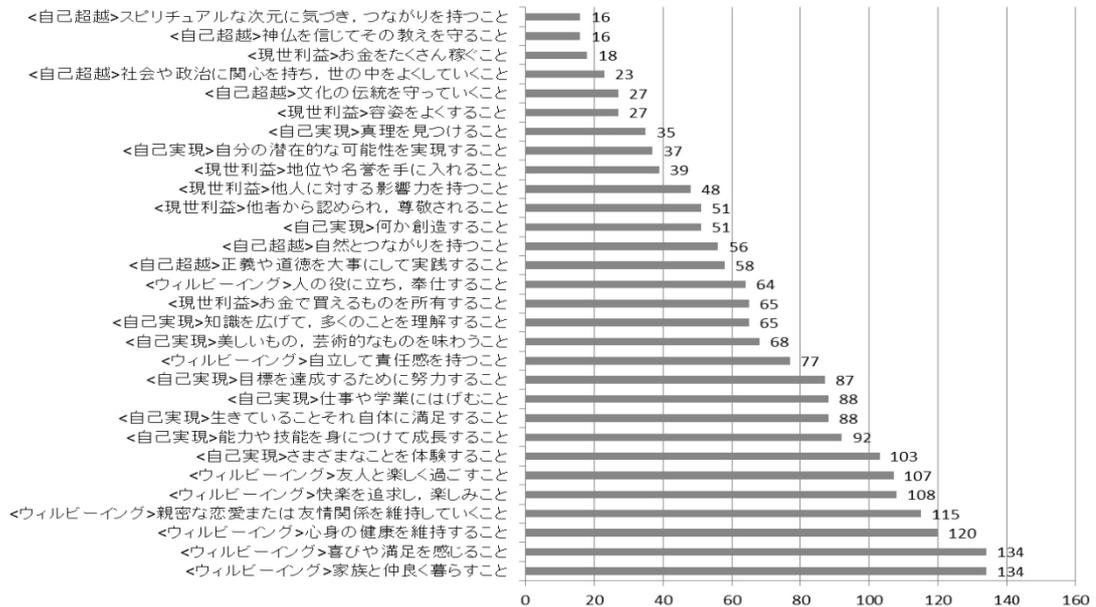


Figure 6-8 MLQ の実現得点

第4項 結論

本研究の目的は、キリスト教的教育と宗教的次元を持たない人間形成という二つの教育の交流を「日常を生きるなかで生まれるさまざまな問いを、人生の意味と目的の追究に関わる問いにつないでいく」教育と仮定し、カトリックの教育理念を発展させていく試みとして、イグナチオの『靈操』の靈的ビジョンを応用した教育を特徴としているイエズス会学校における、教育の中の宗教的社会化を質問紙調査によって探り、宗教性の発芽の要因を分析することであった。

宗教について知っている情報は取り込まれやすいため、宗教的社会化は意味システムを検討するうえで重要な要件と考えられ、宗教的社会化の環境の検討を行った。共同体感覚尺度を用いて、イエズス会学校は宗教的社会化としての前提となる友人・学校への信頼感や所属感が高い環境であることが明らかになった。宗教的意味システムにおける意味形成処理の際、個人の欲求に宗教が提示するものが合致し、意味をもたらすものとして知覚されうる時、回心や意味形成処理のトリガーになるため、個人の欲求と仮定した自我体験も重要な要件であるとして、自我体験尺度を用いて自我体験喚起を確認した。自我体験の中に『靈操』の構造と機能にある、過去・現在・未来を見る「存在への問い」が見られた。先行研究では約4割強の体験喚起率に対して、本調査では7割の体験喚起率が見られたことが特徴的である。発達の観点からアプローチする自我体験という現象は、体験の内容や心性を認知し、言語化できる能力も問われる。イエズス会学校はそれらの能力が高い生徒が集まっていることが示された。

自我体験とは「私」という存在への問いであることから、自我体験有群は人生の意味への問いを意識すると仮定し、MQL尺度を用いて人生の意味の保有や探求について検討した。自我体験有群は自我体験無群に比べて意味保有は1.2倍、意味探求は1.5倍高く、「私」という存在を問う自我体験を喚起し記憶している者は人生の意味の保有や探求をしていることが示唆された。また先行研究と同様に、調査対象年齢（平均年齢15.74歳）から意味の探求は保有の1.4倍高い値を示した。さらに、自我体験有群・無群が示した保有や探求の意味の源については、MIM尺度を用いてその内容を精査した。追求（探求）としては「ウィルビーイングと共同性」の友人と楽しく過ごすこと、喜びや満足を感じることや「自己実現」の能力や技能を身につけて成長すること、知識を広げて多くのことを理解することが挙げられ、その答えとなる実現（保有）では、家族と仲良く暮らすこと、喜びや満足を感じることで、友人と楽しく過ごすことなどが挙がってきている。「現世利益」や「自己実現」

の項目は追求と実現の差が多いことが示唆された。一方、神仏を信じてその教えを守ることやスピリチュアルな次元に気づきつながりを持つこと、自然とつながりを持つことなどの「自己超越」を追求している者は少数であったが、追求と実現の差は4因子の中で最も少なく、これらを追求している者にとっては実現されていることが示された。

以上の結果から、『霊操』の霊的ビジョンを一般化した教育を特徴としているイエズス会学校において、「私」の存在を問う自我体験が宗教性発芽の要因となる可能性が示唆された。「日常を生きるなかで生まれるさまざまな問いを、人生の意味と目的の追究に関わる問いにつないでいく」教育の土壌がそこにあることが示された。

第2節 ミッションスクールにおける教育の中の宗教性発達の検討 自我体験と意味形成（研究5-2）

第1項 問題と目的

渡辺(2004)は社会学や発達心理学の領域では「自己」とはそれ自体として存在するものではなく、他者との社会的関係の一つの結び目として作られたり、物語られたりしていくものであるという、「関係論的アプローチ」が盛んであることを紹介している。そのうえで自我体験を「なぜ私は…なのか」「私は本当に…なのか」「私とはいったい何か」といった違和感や懷疑や否定形を表現様式とする、問いかけの体験としてのみ、自らを顕し示すものと定義し、「自我の発見」「自我体験」の「今、ここにこうしている私はそもそもいったい何なのだ」という問いに対しての答えとして、「関係論的アプローチ」は答えていないと指摘している。

ミッションスクールの教育の意義のひとつとして、私たちが日常を生きるなかで生まれるさまざまな問いを、人生の意味と目的の追究に関わる問いにつないでいくことが挙げられているが、その問いのひとつとして挙げられるのが、「私はなぜ私なのか（私はだれか？なぜここにいるのか）」という自我体験（相対的な世界の獲得）である（天谷，2011；高井2004）。

本研究ではどのような自我体験が生じているか、その内容と心性について発達の意義を検討する。

第2項 方法

1. 調査手続き

テキストマイニングによる内容分析の対象は、イエズス会系学校の中高一貫の男子校の高校1年生187名を対象とした質問紙調査（2016年11月実施）のうち、有効回答181名中自我体験の自由記述の130名のテキストデータを分析対象とした。

分析にあたっては、研究上の主旨・データは研究目的でしか使用しないこと、個人を特定できないようにすることを説明し、了解を得た。IBM SPSS Text Analytics for Surveysを使用し、引用する場合も改編し、個人を特定できないように改編するなど倫理的配慮を行い、分析の内容からしても倫理的問題はないものと判断した。

2. 分析手続き

自由記述のテキストデータを分け、以下の手順で分析を行った。

(a) 構造化していないテキストデータを、統計解析・データマイニング手法を適用するために、自由記述回答者 ID=パラグラフ ID を持つデータに Excel での前処理を行い、IBM SPSS Text Analytics for Surveys にインポートした。質問紙の自由記述回答が短い記入が多いため、自由記述回答者 ID=パラグラフ ID とした。

(b) 「コンセプト」と呼ばれる、自然言語処理（人間が持っている言語をコンピューターで処理すること）した語彙をカテゴリ化する、「単語抽出」の一次分析を自由記述回答者 ID で行った。

(c) 「単語抽出」後、同じ意味合いの語彙を、原文参照機能を活用し、テキストに戻り確認し、類義語としてまとめる作業を行った。類義語および不要語を設定したうえで、再度「単語抽出」を行った。

(d) 「タイプ」と呼ばれる、品詞分析の一次分析を自由記述回答者 ID で行った。「名詞」タイプは名詞的表現を含み、原文を参照しながら、どのような文脈で語られているか確認するためにカテゴリ分類器を作った。「形容動詞」は「静かだ」のように「だ」で終わることが可能なもの、「形容詞」は「良い」のように「い」で終わることが可能なもので、ともに物事の特徴や状況を説明し、感情を表す品詞である。感情や心の状態について分析をするために「形容動詞」「形容詞」を中心にカテゴリ分類器を作った。また、動詞は「う」の段で終わり、動作、作用、存在を説明するという特徴があり、「動詞」を中心にカテゴリ分類器を作り、動作や行動についての分析も確認した。

(e) 係る語と受ける語の関係を「パターン」と呼ぶ「係り受け解析」の、二次分析を自由記述回答者 ID で行い、行為・動作とその対象を確認した。

(f) 「感性分析」で二次分析を自由記述回答者 ID で行い、「単語抽出」と「感性分析」を融合した結果を確認した。「感性分析」は文章中に含まれる、人間の心の快適・不快を表明している部分や、その心の動きによって生じた行動を報告している部分を抽出できる。抽出結果の表示をコンセプトパターン（受ける語+係る語の関係）にして、心の動きに焦点をあてて分析を行った。

(g) 抽出された結果をグラフによる視覚化で確認をした。

いずれの段階においても随時テキストデータを参照しながら作業を進めることで、分析がデータに基づいているかに注意した。

3. データ分析と方法論的妥当性の検討

本研究では、文字データにおける頻度や関係から探索的な発見に有効な方法である、テキストマイニングを採用した。テキストデータを統計的に解析するには、2つのステップで行う。(a) テキスト分析ツールである IBM SPSS Text Analytics for Surveys を用いて、文章をカテゴリ化する。(b) カテゴリ化したデータに統計的方法を用いて解析する。IBM SPSS Text Analytics for Surveys は構造化されていないテキストデータを、統計解析・データマイニング手法を適用するためのカテゴリ分類ソフトで、(a) 主要キーワードの抽出、結果の調整、回答のカテゴリ化、(b) 主要キーワードの頻度やキーワード間の関係把握を行うことができる。

カテゴリ化は分析者にとって意味のある語彙であることを検討しながら行われる。非構造データ（自然に書かれたテキストデータ）を、構造化データにするために、名義尺度のデータに変換する処理を行い、データを計数値化する。

テキストマイニングで明らかになることは、まず基本統計量の記載によって、コメントの文字数や文の数など対象となるテキストデータの特徴を全般的に把握することが可能であり、総行数や総文字数などにより分析の単位を示すことができる（城丸・水谷・いとう・門林・佐藤・小平・本間，2013）。さらに、単語頻度分析では文章の中でどのような単語が用いられているか探索することで、過去の振り返りや過去と現在との関係性といった主観的な個人の内的世界を扱う意味領域全体の単語頻度を検討することができる。

また IBM SPSS Text Analytics for Surveys では、「キーワード抽出」を一次分析、「係り受け解析」と「感性分析」を二次分析と呼んでおり、「キーワード抽出」や「係り受け解析」だけでは不十分な場合、「感性分析」によって、一次分析であるキーワード抽出結果と、二次分析である「感性分析」結果を結合した形での抽出結果が検討でき、意味領域を丁寧に扱える利点がある。一方テキストマイニングの限界として、同文字意義語や類義語の問題、意味的にその文が何について言及しているのか、主題の省略によって見えにくくなるという点が挙げられる（いとう，2013）。本研究においては、分析対象となるテキストを意味的にまとまった複数の文章単位であるパラグラフ単位で分析を行うことや適宜、原文参照機能を活用しテキストに戻り、その内容を確認して意味的に質の高い読み込みをすることに努めた。

第3項 結果と考察

1. 全体分析

(1) 自我体験の体験率と喚起

自由記述内容の分類の結果、体験率は71.4%（130名）であった。天谷（2011）の先行研究では高校生では46.6%、大学生では46.4%であることから高い体験喚起率である（Figure 7-1）。

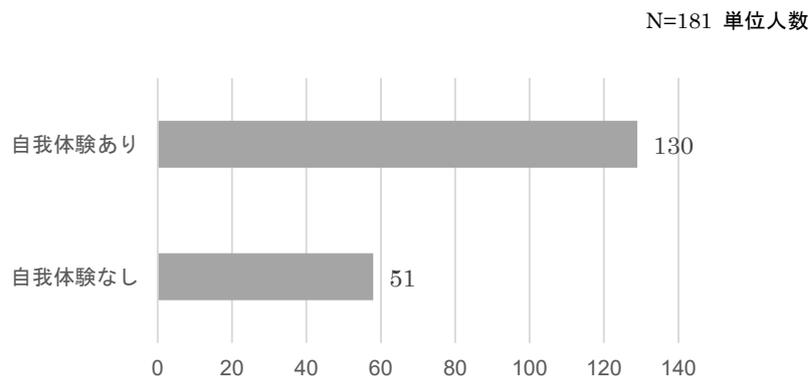


Figure 7-1 自我体験の体験率

130名の自我体験の喚起については「世界の現況は歴史を学んで」22.4%(29名)、「身体や脳、哲学的な知識」17.8%(23名)と知識が自我体験の喚起となるものと、「具体的なきっかけはなく、ふと思う」19.3%(25名)が報告された（Figure 7-2）。知識が自我体験喚起となるものは体験群の4割を占める。「私はなぜ私なのか（私はだれか？なぜここにいるのか）」という自我体験（相対的な世界の獲得）は、先行研究から年齢が低い場合は具体的なきっかけが無いことが多く、年齢が上がると学校教育などがその喚起に関連していることも考えられる。

N=130

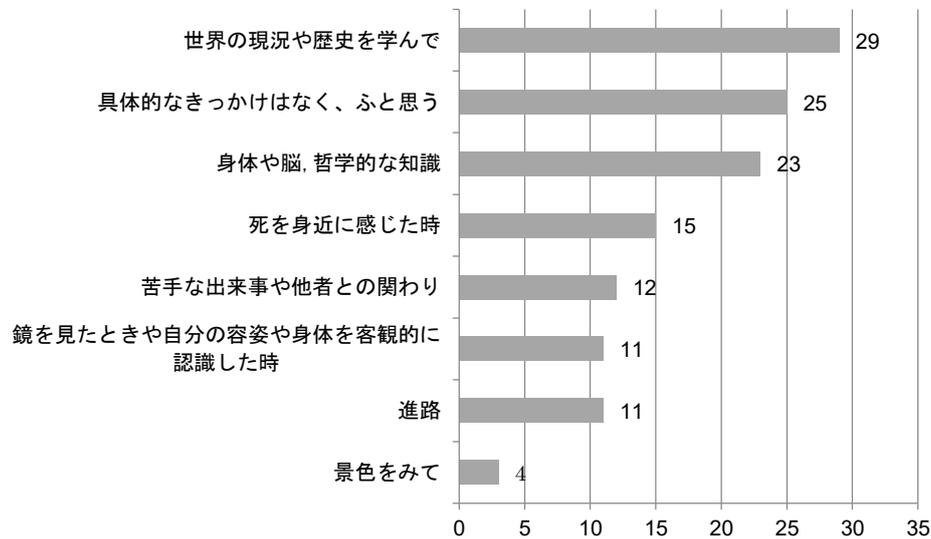


Figure 7-2 自己体験カテゴリと体験率

(2)基本情報

構造化されていないテキストデータを、一意の意味のある文脈ごとの自由記述回答者 ID 変数=パラグラフ ID 変数を持つ Excel で前処理を行い、IBM SPSS Text Analytics for Surveys で、単語の抽出を行った。テキストの基本情報は、総パラグラフ (すべてのレコード数) は 129 で、1 パラグラフの平均文字は、1 パラグラフ (1 サンプル) の平均文字は 57 文字であった。総文字数は 7,401 文字であった。抽出された述べ単語数は 2,592 単語で、IBM SPSS Text Analytics for Surveys で設定された品詞及びポジティブ、ネガティブなどの単語種別数は 30 種となった(Table7-1)。

テキスト情報の品詞出現数は、名詞がレコード数 129 で選択率 41.2%，動詞がレコード数 118 で選択率 37.7%，形容詞のレコード数 40 で選択率 12.8%，形容動詞のレコード数は 26 で選択率 8.3%であった。

Table7-1 テキスト基本統計量

N=130

項目	値
総パラグラフ数	129
総文字数	7,401
1パラグラフの平均文字数	57
抽出述べ単語数	2,592
単語種別（品詞・ポジティブ・ネガティブなど）	30

(3) 出現頻度分析

「コンセプト」と呼ばれる単語の出現頻度の一次分析を行い、次いで「タイプ」と呼ばれる品詞毎の単語出現頻度の一次分析を行った。品詞はデータ内の「コンセプト」に類似する概念の単語を類義語として定義した。たとえば「人」という代表語に対して類義語は他人、人間である。

名詞の単語頻度を見る（Figure 7-3）。名詞はどのような文脈で語られているかを説明している。解析の結果より、自我体験の主題となる「自分」（74回、選択率 39.6%）、「人・他人・人間」（24回、出現頻度 12.8%）、の2語が上位を占めている。次いで、「時代」（12回、出現頻度 5.9%）と続く。

原文参照機能を活用し、テキストに戻り確認を行ったところ、「自分」の「存在」と「人」の「存在」を「不思議」に思ったこと・考えことが自我体験であることが示唆される。どうしてこの「時代」に生まれたのか。「世界」は自分が捉えている実存的な世界、自分の世界とは異なる現実にある貧困の世界、そして死後や幻かもしれないという感じられる世界など異なる視点の行き来をしている。自分の存在の不確かさを「不思議」さとして「意識」や「体」の感覚を挙げている。また、「世界」をこの「時代」「将来」と時間軸でと捉えており、それは「本・テレビ」、「歴史」からの学びの影響があるとしている。

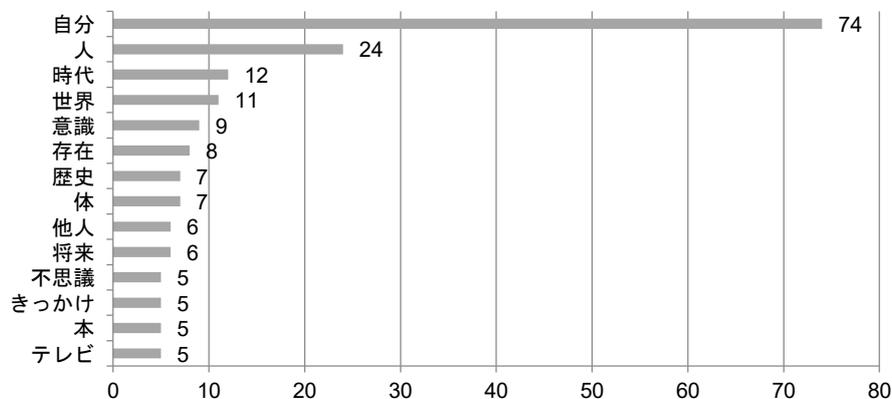


Figure 7-3 名詞出現頻度分析 (5回以上)

形容詞・形容動詞の単語出現頻度を見る (Figure 7-4)。形容詞・形容動詞は感情や心の状態について分析ができる。解析の結果より、出現頻度は「ない」(28回, 58.3%)が最も多かった。原文参照機能を活用し、テキストに戻り確認を行ったところ、夢なのではないのか、自分ではないのか、わからない、自分ではない、消えてなくなるのではないかという不定状態などが語られている。次いで多かったのが「よい」(6回, 12.5%)であった。出来たらよい、あったらよいなどの望みが語られていた。

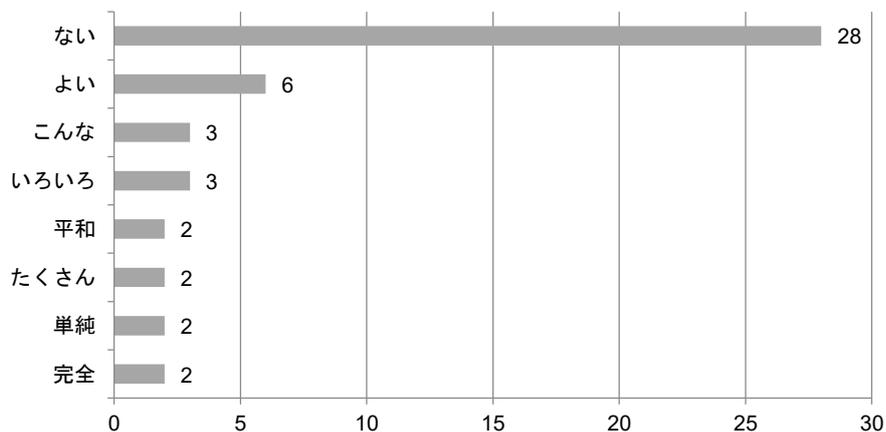


Figure 7-4 形容詞・形容動詞出現頻度分析 (2回以上)

係り受け頻度を見る (Table 7-2)。係り受け頻度解析とは、テキストに出現する係り受け頻度の出現回数をカウントする分析である。IBM SPSS Text Analytics for Surveys ではコンセプト (係り元) 語彙+タイプ (係り先) 名詞の解析となる。原文参照機能を活用し、テキストに戻り確認を行ったところ、紛争など悲惨な外国のニュースを見たときに、AIの番組を見たときに、何もすることがないときなどに、自分の存在に疑問を持ち、世界の貧困地域を知ってどうして自分はここに生まれたのかという不思議さを感じている。また、自分が見ている世界と弟 (他人) が見ている世界は同じ世界なのか、どうして自分は他人になれないのだろうかなど、自分以外の存在や行動、感情が自分完全に同じであるはずがないがかとってまったく違うのかと不思議に感じる他者と自分とが捉える世界や感覚への違和感などが見られた。

Table 7-2 係り受け解析

係り元	係り先(名詞)	係り元	係り先(名詞)
疑問に思った	ニュース	いるのだろうか	暇なとき
	自分		用
	見たとき		自分
	時間		過ごすため
疑問に思い	世界	違うのだろうか	感情
	弟		自分
	自分		行動
どうして	生まれること	なぜ	自分
	他人		考え

(4) 感性分析

二次分析である感性分析をパラグラフ ID 単位で行った。感性分析はポジティブやネガティブといった感情を表明している部分や、その心の動きによって生じた行動を報告している部分を抽出できる (Table 7-3, Table 7-4)。〈悪い〉とネガティブ感情を表明しているパターンは 17 パターンあった。一方〈良い〉とポジティブ感情を表明しているパターンは 7 パターンと少ない。自我体験が違和感や懷疑や否定形を表現様式とする、問いかけの体験であることが示唆された。

原文参照機能を活用し、テキストに戻り確認を行ったところ、ネガティブパターンは、「死」「進路」など「先」が見えないこと、考えると不安になることが語られており、「ちっぽけ」を感じる、言語化できない、安定しない「自分」「キャラ」が挙げられている。ポジティブパターンは「きれい」な「夜空」を見た時、他に人は「いっぱい」「存在」していると感じた時に自分がここに存在している不思議。この「時代」に生まれた「ラッキー」さや、この「時代」に生まれて周りの人々と出会い過ごす「奇跡」を語っている。

Table 7-3 パターン分析 〈悪い-悪い〉 〈悪い-不満〉

係り元 (感性)	係り先 (名詞)	係り元 (感性)	係り先 (名詞)
名すらわからない	人	ちっぽけを感じる	自分
安定していなかった	キャラ	血がつながっていない	親
明確に言語化できない	自分	生まれていれば	違う時代
死	自分	考えづらい	先
絶えられない	死	考えていかなければ	進路
見えない	先		

Table 7-4 パターン分析 〈良い-賞賛〉 〈良い-幸福〉

係り元 (感性)	係り先 (名詞)	係り元 (感性)	係り先 (名詞)
きれい	夜空	ラッキーなんだ	時代
いっぱい	存在	奇跡だ	時代

(5) 注目語分析

注目語分析とは、注目したある単語について分析するものである。注目語の設定は自我体験の主題である「自分」とし、共起関係（注目した単語が他のどのような単語と同時に出現しているか）の上位をカテゴリ Web で見た (Figure 7-5)。共通する出現頻度の多いものは、「自分」-「人」で共通する回答は 12 であった。自分と他者との視点、意識、存在の違いが語られていることが示唆された。次いで「自分」-「世界」が 8、「周り」3 を含めると 11 で、自分の周りの人々、そしてさらに広い世界の中の自分の存在が語られている。次に「自分」-「疑問」の出現は 7 で、自分の存在への疑問が語られている。

注目語「自分」との共起関係を見ると、「自己」とはそれ自体として存在するものではな

く、他者との社会的関係の一つの結び目として作られたり、物語られたりしていくものであるという、「関係論的アプローチ」で「自分」が語られていることが示唆された。

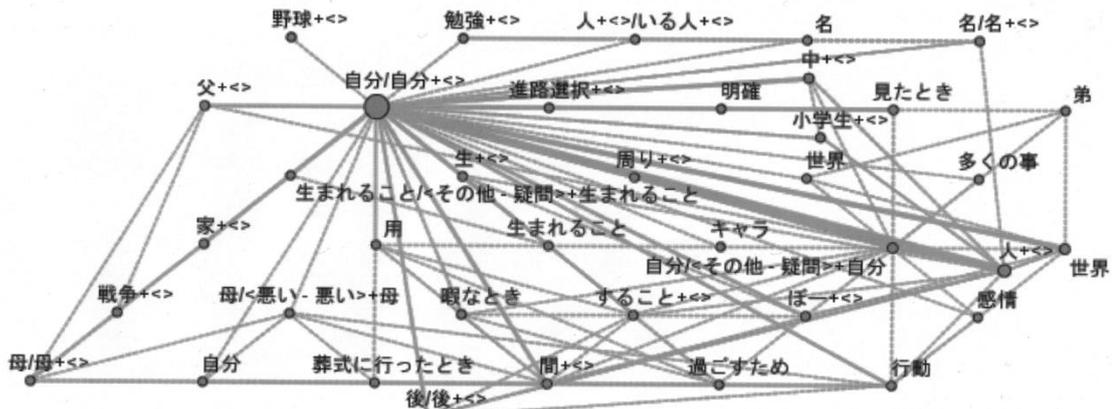


Figure 7-5 「自分」注目語情報

第4項 結論

本研究の目的は、「霊操」をはじめイグナチオの霊的ビジョンを応用した教育を特徴に掲げる、イエズス会の学校教育を取り上げて教育の中の宗教性を検討するうえで、自我体験に注目し、どのような自我体験が生じているか、その内容と心性について発達の意義を検討することであった。

本研究では自我体験の体験率が先行研究の一般の高校生の 46.6%を超えて、68.9%と高く、自我体験想起の内容では世界の現況や歴史、身体や脳、哲学的な知識が自我体験の喚起となるものが 40.3%、他者との関係性、13%、進路 8.5%と他者との社会的関係の一つの結び目として作られたり、物語られたりしていくものであるという「関係論的アプローチ」的な体験が見られる。これは自分が世界の中にどのように位置づけられたかの認識の体験と言えるだろう。一方、具体的なきっかけはなく、ふと思うものが 19.4%、鏡を見たときや自分の容姿や身体を客観的に認識したときが 8.5%、景色をみて 2.3%という自己の存在の不確かさの中で自分が今ここに存在しているという感覚を持つ体験と言える。

高石 (2004) の調査では自我体験は 10 歳頃が最も多いとされる。自我体験を体験しても記憶している者やそうでない者いる、さらにそれを言語化できるかどうかも問われる。本研究の高い体験率は本研究対象校が進学校であることも関係しているかもしれない。また、

自我体験の語りの中に、『霊操』の構造と機能に見られた過去・現在・未来を移動するメンタルタイムトラベルや世界の中の自分という社会的視点調整能力の発達を見ることができた。自我体験は人生の意味と目的の追究に関わる問いの体験である。その体験はその後に生き方や価値観にも影響を及ぼすとされる。イグナチオのいう体験とは物事を「内定に味わうこと」まで意味しており、このイグナチオの指導方法に基づいたイエズス会学校教育では、体験→内省→実践によって成長発展することを狙っている（イエズス会中等教育推進委員会，2013）。『霊操』などイグナチオの霊的ビジョンを応用した教育を特徴に掲げる、イエズス会の学校教育の中に自己を知り、世界の中の自分という他者にかかれた自己へ向かう発芽が示唆された。

第3節

ミッションスクールで過ごす青年期の宗教性発達の可能性（研究6）

第1項 問題と目的

キリスト教人口が1%弱の我が国にあって、キリスト教主義の学校（ミッションスクール）は、「一人ひとりを大切に」というキリスト教精神に基づいた建学の理念を掲げ、他者を大切に、社会に貢献する人間形成を目指してきた。日本ではキリスト教の信徒数と比べてキリスト教系大学が多い。文化庁の宗教統計調査（2016）では、国内のキリスト教信者数は人口の1.5%（約200万人）で、我が国においてキリスト者はマイノリティーであると言える。一方、公益財団法人国際宗教研究所の調査（2016）では、キリスト教系大学・短大は全私学の1割超（約120校）を占め、ミッション校の教育を受けてきた者は多く、ミッション校の「人格教育」（*cura personalis*）の果たしてきた役割は小さくはない。

川村（2015）は、アメリカ合衆国社会におけるカトリック教会とその教育について考察した、O’Gormanの図式に基づき、日本におけるカトリック教会のアイデンティティとその教育についての歴史学的な解釈と分析を行い、近代日本の中のカトリック史を3つの時代に分けている。個人の魂の救いを草の根的努力によって実現した第1期(1854～1890)、国粹主義と偏見の間で生きた第2期(1890～1945)、そして1945年～現在に至る第3期は、教会外の他者を認め、互いに尊敬し合いながら共存する、兄弟・姉妹の関係性が示された第二バチカン公会議（1962～1965）の影響を受けて、社会の中で独自の地位を構築する時代としている。この第3期のカトリックの教育目標は、社会の中で影響力をもつ人材の養成であり、具体的には語学教育の充実による国際的な人材養成を挙げている。ミッション校が「一流校」とみなされる背景には「語学教育」と「国際性を意識した教育」の先取りがあったと指摘している。

今日、ミッション校は何を実現していこうとしているのか。イエズス会中等教育推進委員会（2013）による『イエズス会教育の特徴』では、1993年に開催されたイエズス会教育の国際研修でのコルベンバツハイエズス会総長の講演内容を今日のイエズス会的教育方法という形でまとめている。教育方法の基本指針として、「イエズス会学校の教師に求められているのは、生徒たちが人生をめぐる意味の世界を発見できるよう、それらすべての多面的次元をしっかりと統合すること」を明示している。「人生の意味を発見すれば、それが方向づけとなって、私（たち）とは何もので、なぜここに存在しているのか、を理

解できる。それは人生のいろいろな意味での分岐点で、何を優先させて何を真に選び取るか、というときの選択基準となるはず」としている。

具体的にはイグナチオ自身が経験し、祈りによって深められた『靈操』を学校で教える時の方法として活用できないかと考えられたのが「イグナチオ的教授法」(Ignatian Pedagogy)である(李, 2016)。「靈操」の特徴である経験, そして経験から生まれる問い, 問いに対する内省, 答えを見いだした知識を通して行動し, 実践していき, それを評価していくというものである。「経験」-「内省」-「実践」-「評価」というサイクルを繰り返しながら知るというプロセスを歩むことが「イグナチオ的教授法」と言われるものである。その教育を通して, イエズス会学校のマottoである「Men for others」, 社会に仕え, 他者ととともに歩むことができる「Ignatian Leadership」を育てることをイエズス会学校の特徴としている。

そこで本研究では, イエズス会学校を卒業して成人期・老年期になってから青年期を過ごしたイエズス会学校の教育的環境を振り返ったとき, どのような意味形成を成すのかを検討する。

第2項 方法

1. 分析対象

テキストマイニングによる内容分析の対象は, カトリック・イエズス会(Society of Jesus)が設立母体である国内にある4校のイエズス会学校のうちの2校の卒業生のエッセイや対談集『栄光学園物語』, 『建築家走る』, 『僕の居場所』, 『日本人はどう住まうべきか』, 『日本人はどう死ぬべきか』, 『日刊建設工業新聞』および卒業生のインタビューをまとめたブックレット『Rokko Spirit』である。それらのテキストを精読し, 在学中を振り返っての感想や現在との関係性を語っている箇所, そして在校生である後輩に向けて語っている箇所を抜粋した36名分(男性)のテキストデータを分析対象とした。分析にあたっては, IBM SPSS Text Analytics for Surveys を使用し, 個人を特定できないように改編するなど倫理的配慮を行った。

2. 分析手続き

分析は在学中を振り返っての感想や現在との関係性を語っている箇所と在校生である後輩に向けて語っている箇所のテキストデータを分け, 以下の手順で分析を行った。

(a) 構造化していないテキストデータを、統計解析・データマイニング手法を適用するために、発話者・執筆者 ID と意味ある文脈ごとのパラグラフ単位 ID を持つデータに Excel での前処理を行い、IBM SPSS Text Analytics for Surveys にインポートした。

(b) 「コンセプト」と呼ばれる、自然言語処理（人間が持っている言語をコンピューターで処理すること）した語彙をカテゴリ化する、「単語抽出」の一次分析をパラグラフ単位 ID で行った。

(c) 「単語抽出」後、同じ意味合いの語彙を、原文参照機能を活用し、テキストに戻り確認し、類義語としてまとめる作業を行った。類義語および不要語を設定したうえで、再度「単語抽出」を行った。

(d) 「タイプ」と呼ばれる、品詞分析の一次分析をパラグラフ単位 ID で行った。「名詞」タイプは名詞的表現を含み、原文を参照しながら、どのような文脈で語られているか確認するためにカテゴリ分類器を作った。「形容動詞」は「静かだ」のように「だ」で終わることが可能なもの、「形容詞」は「良い」のように「い」で終わることが可能なもので、ともに物事の特徴や状況を説明し、感情を表す品詞である。感情や心の状態について分析をするために「形容動詞」「形容詞」を中心にカテゴリ分類器を作った。また、動詞は「う」の段で終わり、動作、作用、存在を説明するという特徴があり、「動詞」を中心にカテゴリ分類器を作り、動作や行動についての分析も確認した。

(e) 係る語と受ける語の関係を「パターン」と呼ぶ「係り受け解析」の、二次分析をパラグラフ単位 ID で行い、行為・動作とその対象を確認した。

(f) 「感性分析」で二次分析をパラグラフ単位 ID で行い、「単語抽出」と「感性分析」を融合した結果を確認した。「感性分析」は文章中に含まれる、人間の心の快適・不快を表明している部分や、その心の動きによって生じた行動を報告している部分を抽出できる。抽出結果の表示をコンセプトパターン（受ける語＋係る語の関係）にして、心の動きに焦点をあてて分析を行った。

(g) 抽出された結果をグラフによる視覚化で確認をした。

いずれの段階においても随時テキストデータを参照しながら作業を進めることで、分析がデータに基づいているかに注意した。

3. 方法論的妥当性の検討

研究 5 と同様に、本研究では、大量の文字データにおける頻度や関係から探索的な発見

に有効な方法である、テキストマイニングを採用した。テキストデータを統計的に解析するには、2つのステップで行う。(a) テキスト分析ツールである IBM SPSS Text Analytics for Surveys を用いて、文章をカテゴリ化する。(b) カテゴリ化したデータを統計的方法を用いて解析する。IBM SPSS Text Analytics for Surveys は構造化されていないテキストデータを、統計解析・データマイニング手法を適用するためのカテゴリ分類ソフトで、(1) 主要キーワードの抽出、結果の調整、回答のカテゴリ化、(c) 主要キーワードの頻度やキーワード間の関係把握を行うことができる。単語頻度分析では文章の中でどのような単語が用いられているか探索することで、過去の振り返りや過去と現在との関係性といった主観的な個人の内的世界を扱う意味領域全体の単語頻度を検討することができる。

本研究においても、分析対象となるテキストを意味的にまとまった複数の文章単位であるパラグラフ単位で分析を行うことや適宜、原文参照機能を活用しテキストに戻り、その内容を確認して意味的に質の高い読み込みをすることに努めた。

第3項 結果と考察

1. 全体分析

(1) 基本情報

構造化されていないテキストデータを、一意の意味のある文脈ごとのパラグラフ ID 変数を持つ Excel で前処理を行い、IBM SPSS Text Analytics for Surveys で、単語の抽出を行った。テキストの基本情報は、総パラグラフ (すべてのレコード数) は 204 で、1 パラグラフの平均文字は、105 文字であった。総文字数は 21,854 文字であった。抽出された述べ単語数は 4,054 単語で、IBM SPSS Text Analytics for Surveys で設定された品詞及びポジティブ、ネガティブなどの単語種別数は 49 種となった (Table8-1)。

テキスト情報の品詞出現数は、名詞がレコード数 203 で選択率 24.1%、動詞がレコード数 199 で選択率 23.6%、形容詞のレコード数 104 で選択率 13.4%、形容動詞のレコード数は 102 で選択率 12.1%であった。

Table8-1 テキスト基本統計量

項目	値
総パラグラフ数	204
総文字数	21,854
1パラグラフの平均文字数	105
抽出述べ単語数	4,054
単語種別（品詞・ポジティブ・ネガティブなど）	49

(2) 出現頻度分析

「コンセプト」と呼ばれる単語の出現頻度の一次分析を行い、次いで「タイプ」と呼ばれる品詞毎の単語出現頻度の一次分析を行った。品詞はデータ内の「コンセプト」に類似する概念の単語を類義語として定義した。たとえば「人」という代表語に対して類義語は他人、人間である。

名詞の単語頻度を見る（Figure8-1）。名詞はどのような文脈で語られているかを説明している。解析の結果より名詞はどのような文脈で語られているかを説明している。解析の結果より、「自分・僕・私」（102回、選択率46.8%）、「学校・学校時代・6年間」（102回、選択率46.8%）の2語が上位を占めている。次いで、「先生・神父」（54回、選択率26.6%）、「人間・真理・原点・大事」（51回、選択率25.1%）、「生徒・みんな・友人・先輩・仲間・後輩・卒業生・つながり」（47回、選択率23.2%）と続く。

原文参照機能を活用し、テキストに戻り確認を行ったところ、「自分・僕・私」の「学校・学校時代・6年間」では「神父・先生」や「先輩」が人に仕えるリーダーを体現されていたことや学校というものは人間と人間が会う場で、イエズス会学校は「人間」が見える学校だったと振りかえる。イエズス会学校は生徒にとって「世界」そのもので、自分が世界とつながっている実感をもたせてくれる学校であることが語られている。何か深い「意味」があったのかもしれないと毎日行う中間体操を懐かしんでいる。「学校には実に多様な側面があり、そこで生活した者の経験にも大きな落差があるものである」との語りが表しているように、その6年間に馴染めなかったもの、人生に影響を与えたと感じているものと実に多様な経験が語られている。

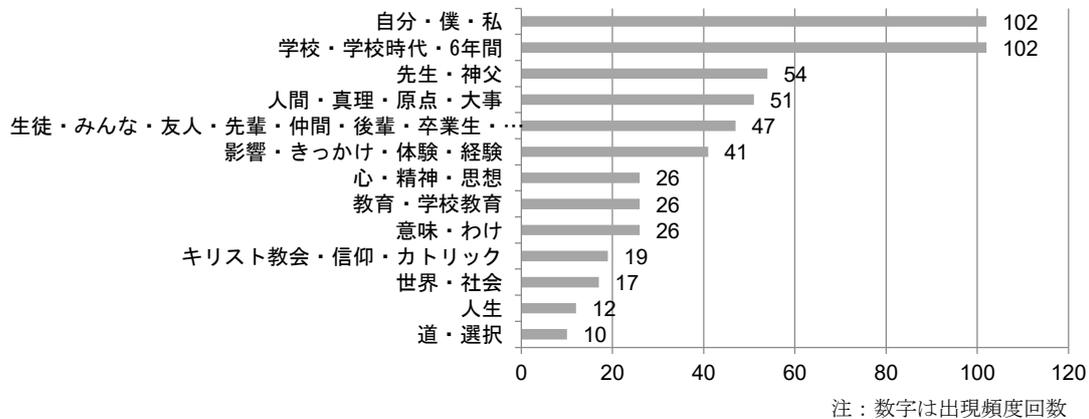


Figure 8-1 名詞出現頻度分析（10回以上）

形容詞・形容動詞の単語出現頻度を見る（Figure8-2）。形容詞・形容動詞は感情や心の状態について分析ができる。解析の結果より、出現頻度は「ない」（53回，選択率 50.9%）が最も多かった。原文参照機能を活用し，テキストに戻り確認を行ったところ，「違うない」…でないか」などを断定して言い切った語りが多かった。次いで多かったのが「強い」（9回，選択率 8.6%）で，精神的にも肉体的にも「強い」人間を育てる，そして強い立場の人は弱い立場にいる人のケアをするのは当たり前だと学んだ場であったことが語られている。「高い」モチベーション，理想，レベルで「いい」教育だったと振り返る。

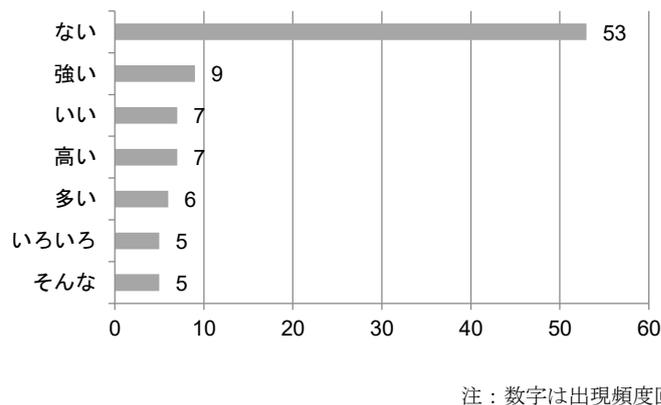


Figure8-2 形容詞・形容動詞出現頻度分析（5回以上）

係り受け頻度を見る (Figure 8-2)。係り受け頻度解析とは、テキストに出現する係り受け頻度の出現回数をカウントする分析である。IBM SPSS Text Analytics for Surveys ではコンセプト (係り元) 語彙+タイプ (係り先) 名詞の解析となる。原文参照機能を活用し、テキストに戻り確認を行ったところ、中高校時代は真理を一生懸命求める時代であることから、神父である先生の人間 (自分, 君たち) は必ず死ぬという話が記憶に残る。学校生活は厳しかったけれど、規律を守るのは自分を律するためであり、みんなのことや人類や世界のことを考える世界観を持つことは良かったという、6年間の学校生活を振り返ったときに記憶に残っている内容から、教育の意味が見えてくる。

Table 8-2 係り受け解析

係り元	係り先(名詞)	係り元	係り先(名詞)
死ぬ	人間	求める	意味
	自分		真理
	君たち		学校生活
良かった	世界	厳しかった	規律
	みんな		

(3) 感性分析

二次分析である感性分析をパラグラフ ID 単位で行った。感性分析はポジティブやネガティブといった感情を表明している部分や、その心の動きによって生じた行動を報告している部分を抽出できる (Table 8-3, Table 8-4)。〈良い〉とポジティブ感情を表明しているパターンは 23 パターン、〈悪い〉とネガティブ感情を表明しているパターンは 22 パターンとほぼ同等の抽出が出来た。

原文参照機能を活用し、テキストに戻り確認を行ったところ、「自分の中に芽生えたエネルギーが否定されるが、否定されればされるほど、むしろ強くなった。このせめぎ合いで否定され続けたものが、学校を出た時やってやるぞという逆のエネルギーになった」などの語りに見られるように、〈悪い〉とネガティブ感情を表明している内容でも、肯定的に捉えている内容も多く、過去の学生生活を振り返るとネガティブ感情がポジティブ感情に反転する傾向があることが見られた。

ポジティブ感情が表明されているものとしては、「やらなくて後悔するより、どんなに苦

第4項 結論

本研究の目的は、イエズス会学校を卒業して成人期・老年期になってから青年期を過ごしたイエズス会学校の教育的環境を振り返ったとき、どのような意味形成を成すのかを検討することであった。

研究1にも見られたように宗教性発達において重要な他者として、イエズス会学校の先生である神父の名前が具体的に挙がってきている。そこから何を学んだのか。強い精神力、奉仕の精神や人に仕えるリーダーシップの体現を見ている。卒業生のコメントはイエズス会学校が世界に広がっている、自分が世界とつながっていることを体感できた場であったことが語られている。かつてイエズス会学校の教員は世界各国から日本に来ているイエズス会士であった。その学校環境を取り巻く豊かな国際性から世界と繋がっていること、そして世界の中の自分というものを問う機会となったのではないかと思われる。川村(2015)の先行研究ではミッションスクールは「語学教育」と「国際性を意識した教育」の先取りがあったと指摘しているが、イエズス会学校はまさに「国際性を意識した教育」環境にあったと言える。

学校時代に経験した数々の行事や出来事は、在学時代には意味を持たなかったとしても、成人期・老年期にそれを振り返ると意味が形成される。今の「私」を育てたものは何か。その振り返りこそ、イグナチオ的教授法と言われる体験→内省→実践→評価というプロセスそのものかも知れない。イグナチオはこのプロセスによって人生の意味を見出していった。信仰を持つ者も、持たない者も人は人生の意味を問う。イエズス会学校の『教育方法の基本指針』(2013)として、「人生の意味を発見すれば、それが方向づけとなって、私(たち)とは何もので、なぜここに存在しているのか、を理解できる。それは人生のいろいろな意味での分岐点で、何を優先させて何を真に選び取るか、というときの選択基準となるはず」としているように、このかけがえのない学校時代に触れた精神性や出会いは、人生の分岐点に意味を持つのかも知れない。

宗教とは宗教的意味システムの形成であることから、イエズス会学校のモットーである「Men for others」、社会に仕え、他者とともに歩むことができる「Ignatian Leadership」が人生の意味形成に影響を与えているとするならば、それは教育の中の宗教性であり、たとえキリスト教信者でなくてもその精神性に、宗教性発達(成熟)を見ることが出来ると言えよう。

第4節 総合考察

第3章では、「霊操」の構造や機能の一般化ということで、「霊操」をはじめイグナチオの霊的ビジョンを応用した教育を特徴に掲げる、イエズス会の学校教育を取り上げて教育の中の宗教性を検討してきた。

研究5-1では「霊操」を始めイグナチオの霊的ビジョンを応用した教育を特徴としているイエズス会学校における、宗教性の発芽の要因を分析した。意味形成処理の際、宗教について知っている情報は取り込まれやすく（Goldsten,2011）、個人の欲求に宗教が提示するものが合致し、意味をもたらすものとして知覚されうるとき、回心や意味形成処理のトリガーになることが明らかになっているが意味形成処理のトリガーになる要因として、個人の欲求としての自我体験も重要な要件のひとつであろうと思われる。イエズス会学校の生徒の自我体験喚起率は先行研究で示されている4割強を超える、7割と高いことが示された。自我体験は「存在への問い」「起源・場所への問い」「存在への感覚的違和感」として捉えることが出来るが、その「私」への問いである自我体験には、『霊操』の機能である過去・現在・未来のメンタルタイムトラベルも含まれていることが確認できた。

研究5-2では、どのような自我体験が生じているか、その内容と心性に焦点を当て発達の意義を検討した。自我体験の語りの中に、『霊操』の構造と機能に見られた過去・現在・未来を移動するメンタルタイムトラベルとともに、世界の中の自分という社会的視点調整能力の発達を見ることができた。自己を知り、世界の中の自分という他者に開かれた自己へ向かう発芽が示唆された。自我体験は人生の意味と目的の追究に関わる問いの体験である。その体験はその後に生き方や価値観にも影響を及ぼすとされる。問いに答えるものとして、宗教的意味システムがその機能を果たすことが出来る可能性も示唆された。

今の「私」を育てたものは何か。学校時代に経験した数々の行事や出来事は、在学時代には意味を持たなかったとしても、成人期・老年期にそれを振り返ると意味が形成される。

研究6では、イエズス会学校を卒業して成人期・老年期になってから青年期を過ごしたイエズス会学校の教育的環境を振り返ったとき、どのような意味形成を成すのかを検討した。その振り返りそのものこそが、イグナチオ的教授法と言われる体験→内省→実践→評価というプロセスである。「学校には実に多様な側面があり、そこで生活した者の経験にも大きな落差があるものである」との語りが表示しているように、その6年間に馴染めなかったも

の、人生に影響を与えたと感じているものと実に多様な経験が語られていたが、イエズス会学校は世界に広がっている、「世界」の中の自分を感じることができ、その「意味」や奉仕の「精神」を学んだことの振り返りが行われていることが明らかになった。

以上、『靈操』の構造や機能の一般化ということで、『靈操』などイグナチオの靈的ビジョンを応用したイエズス会の学校教育を取り上げて教育の中の宗教性を検討してきた。イエズス会学校の教育方法の基本指針として、「生徒たちが人生をめぐる意味の世界を発見できるよう、それらすべての多面的次元をしっかりと統合すること」を明示している。イグナチオが人生の意味を宗教的識別によって見出していったように、自己を知り（メンタルタイムトラベル）、世界の中の自分という他者に開かれた自己（社会的視点調整能力）への働きかけは、人生の方向付けや人生の分岐点で、何を優先させて何を真に選び取るか、というときの選択基準なる「人生の意味」の発見を促す、社会的助勢（Social Guidance）になると考えられる。

終章 総合考察

第1節 本研究のまとめ

本節では、第1章・第2章・第3章における各研究の成果をまとめる。その上で、これらの研究結果から、宗教的意味システムの発達モデルの実証的研究によって得られた知見に基づいて、心理学の立場から宗教的に解釈された人間の在り方および今日の宗教の諸相を考察する。

本研究は、第1に、宗教的意味システムのプロセスを検討すること、第2に、意味システムにおける「祈り」に注目して、その構造と機能を明らかにすること、第3に、「祈り」の一般化としての宗教教育について検討してきた。「祈り」という媒介によって、どのような宗教的意味形成、意味価値が生じ、宗教性発達に影響を及ぼすかを検討し、宗教的意味システムの発達モデルの仮説を生成することを全体目的とした。具体的にはカトリック教会を取り上げ、ロヨラのイグナチオの『靈操』による宗教的意味システムの形成を検討した。

研究1において検討したのは、非キリスト教会文化の中で、カトリックの信仰を選んでいく経路から、宗教性発達の仮説モデルを生成し、宗教的意味形成プロセスであった。研究1が明らかにしたのは、祈りの体験による変容プロセスは、混沌とした未定状態から日々の出来事や個人史のつながりに気づいていく「漸次的な回心」であり、それは統合的課程であることである。「靈操」という祈りの体験を通して、記号の読み解きである、意味形成のプロセスが促進的記号発生の上層モデルである。靈操プログラムは黙想で与えられた『聖書』のメッセージを受け取り、個人史とのすり合わせで、意味づけがされ「同伴するイエス」という促進的記号が発生することで、宗教的価値観へ統合されていくことが明らかになった。

研究2では、自己の体験から編み出され、人々を霊的に助ける主な手段とした祈りのプログラム『靈操』の著者であるイグナチオ・デ・ロヨラの伝記資料から個人と歴史の相互性の中から信仰を深め、信仰に生きる人の特徴を明らかにし、その宗教性発達を検討した。研究2が明らかにしたのは、宗教的識別という習慣が、すべての出来事に神を見るという人格特性の形成に繋がっていることである。世界や出来事に宗教的意味づけをしていく宗教性発達について検討することは、意味を作り出そうとし、意味の世界に生きる人間を理解するうえでも重要な問いと言えるだろう。

研究 3 で検討したのは、『霊操』のプログラム構造に連動して宗教的意味づけがどのように変容していくのか、どのように宗教性が深まるかである。研究 3 で明らかになったのは、「霊操」プログラムの構造には、心理学的解釈すると過去・現在・未来、時空を超えるメンタルタイムトラベルが組み立てられており、社会的視点調整能力の発達を促すものであり、その構造は宗教的意味システムの形成を成すものであることであった。

研究 4 では、『霊操』第 3, 4 週の「場所の設定」によって実存的な理解、宗教的意味づけがどのように深まるのかを検討した。具体的にはオーバーアマガウという 10 年ごとに上演される **Passion Play** を取り上げた。研究 4 で明らかになったのは、『霊操』の第 3 週、第 4 週の宗教的体験に該当する **Passion Play** の受難と復活の物語体験を通して「人間の尊厳と地球の尊厳」「寛容」「正義」「連帯」といった「地球市民の霊性」(**Civic Spirituality**) が培われていることである。他者理解に開かれた宗教性の発達に繋がっており、今日の宗教性は社会の断片化を増長させるものではなく、普遍的な善を探し求めることであると言えるだろう。

研究 5 では、『霊操』の構造や機能の一般化ということで、『霊操』などイグナチオの霊的ビジョンを応用した教育を特徴とするイエズス会の学校教育を取り上げて教育の中の宗教性を検討した。研究 5 で明らかになったのは宗教性の発芽として自我体験である。イエズス会学校の生徒の自我体験喚起率は先行研究と比べて 7 割と高く、自我体験有群は「意味保有」や「意味探求」に対して自我体験無群よりも高い値を示した。さらに、どのような自我体験が生じているか、その発達の意義を検討した。自我体験の語りの中に過去・現在・未来を移動するメンタルタイムトラベルや世界の中の自分という社会的視点調整能力の発達を見ることができた。自我体験は人生の意味と目的の追究に関わる問いの体験でありイエズス会の学校教育の中に自己を知り、世界の中の自分という他者に関わった自己へ向かう発芽が見出された。

研究 6 で検討したのは、イエズス会学校を卒業して成人期・老年期になってから青年期を過ごしたイエズス会学校の教育的環境を振り返ったとき、どのような意味形成を成すのかである。研究 6 で明らかになったのは、イエズス会学校が世界に広がっている、自分が世界とつながっていることを体感する場であったことで、かけがえのない学校時代に触れた精神性や出会いは、人生の分岐点に意味を持つ。イエズス会学校のモットーである「**Men for Others**」、社会に仕え、他者とともに歩むことができる「**Ignatian Leadership**」が人生の意味形成に影響を与えているならば、それは教育の中の宗教性であり、キリスト教信者で

なくてもそこに宗教性発達（成熟）を見ることが出来ると言えるだろう。

以上、本研究において宗教的意味システムのプロセスを検討し、意味システムにおける「祈り」に注目して、その構造と機能を明らかにした。さらに「祈り」の一般化としての宗教教育について検討してきた。「祈り」という媒介によって、どのような宗教的意味形成、意味価値が生じ、宗教性発達に影響を及ぼすかを検討し、宗教的意味システムの発達モデルの生成と検証が出来たものであると考える。これらの研究結果から得られた知見に基づいて、心理学の立場から宗教的に解釈された人間の在り方および今日の宗教の諸相を考察したい。

本研究は、日本における宗教的意味形成や意味価値、宗教性発達の実証的な研究の知見の蓄積がまだ少ない状況であることから、世界や出来事に宗教的意味づけをしていく宗教性発達について検討するものであった。このことは意味を作り出そうとし、意味の世界に生きる人間を理解するうえでも重要な問いであると考えられる。「意味」は、文化心理学の中核的概念である。文化は記号の総体であるが、その記号の読み解きは人によって、また同じ人でも時空の範囲においても異なり、その記号の読みときが意味形成と捉えることができる。

心理学的アプローチでは宗教を宗教的意味システムの発達モデルとして、意味形成や意味価値の相互の影響を検討してきたが、宗教的意味システムでは祈りが「媒介」として重要であることが明らかになった。そして祈りのプログラムの一つである『霊操』は宗教的意味システムの形成を成すもので、その構造から明らかになったのは心理学的に解釈すると過去・現在・未来、時空を超えるメンタルタイムトラベルであり、社会的視点調整能力の発達を促すものであった。宗教的意味システムの意味処理の際に、トリガーのひとつになるであろうと考えられる自我体験においても、過去・現在・未来、時空を超えるメンタルタイムトラベルや社会的視点調整能力が包括されていた。自己を知り、他者に開かれた自己、共通善に向かうものである。私たちが日常を生きるなかで生まれるさまざまな問いを、人生の意味と目的の追究に関わる問いに繋げていくこと、意味を生き、自己と世界の理解を宗教的に解釈することは信仰者にとっては宗教性発達と捉えることが出来る。そして、信仰を持たない者にとっても人生の意味を見出していくことは、意味の世界に生きる人間の成熟への歩みであると言えよう。

第2節 今後の展望

本研究はいくつかの課題が残されている。

1つめの課題としては、1つめの課題としては、カトリック教会は多様な伝統的な祈りの歴史を持っているおり、「霊操」はその一つに過ぎないことである。「霊操」による宗教的意味システム形成を見てきたが、例えば「ロザリオの祈り」や「9日間のノベナ」「執り成しの祈り」などはどうだろうか。それらの祈りにも深い霊性がある。しかし、祈りの目的が異なることから、祈りによる心の変容過程も異なると考えられる。また、仏教からは一般化されたマインドフルネスといった瞑想法が話題となっている。ターミナルケアなどを担当する医療者が緩和ケアとして取り入れようという動きも顕著である。カトリック教会においても「祈り」を特定の宗教団体のものにせず、祈りの一般化を検討していくことも望まれる。

2つめの課題は、今日のカトリック校における建学の霊性の継承と維持についてである。本研究では、カトリック校の一つとしてイエズス会学校を取り上げたが、各カトリック校にはそれぞれの修道会を母体とした建学の霊性がある。学校運営に携わる修道者が減少していくなかで、それは信徒または、信者でない教職員との協働という体制を整えることで可能なのだろうか。この研究を第1歩としてカトリック校の霊性や今日的な教育の意義を検討していきたい。

3つめの課題としては、心理学的アプローチは本研究対象となる神学の領域とアカデミックな協働が出来るか否かという点である。宗教的現象としての信仰や宗教教育を社会学、心理学、教育学との協働で検討していくことが今後、望まれているとしながらも、伝統的に哲学的を基盤とする神学は心理学の方法論に疑念を示す傾向がある。学際的な研究を発展、深めていくうえでも、本研究で扱ったような宗教性発達や宗教的意味システムを神学的な側面からも説明が可能となるように神学、宗教学、心理学の知見の交流を図っていく必要がある。

発達心理学の知見を生かし、本研究がカトリック学校ネットワーク支援の研究の一つとなることを願うものである。

文献

- 青野太潮 (2002). 回心 大貫隆・名取四郎・宮本久雄・百瀬文晃 (編) キリスト教辞典 (p.194)
岩波書店
- Allport, G.W., & Ross, J.M. (1967). *Personal Religious Orientation and Prejudice*.
Journal of personality and social psychology, 5(4).
- Arrupe, P. (2013). イエズス会の中等教育-現状と展望 梶山義夫(編) イエズス会教育
の特徴 (pp.132-157) ドン・ボスコ社
- 荒川歩・安田裕子・サトウタツヤ (2012). 複線経路・等至性モデルの TEM 図の描き方の一
例 立命館人間科学研究, 25, 95-107.
- 天野裕子 (2005). 自己意識と自我体験「私」への「なぜ」という問い-関連 パーソナリ
ティ研究, 13, 197-207.
- 天野裕子 (2011). 私はなぜ私なのか—自我体験の発達心理学 ナカニシヤ出版
- 安藤花恵 (2005). 演劇の心理学—演劇の熟達者とは 子安増生 (編) 芸術心理学の新しい
いかたち (pp.199-224) 誠信書房
- Berger, P.L., & Lukmann, T. (1966). *The social construction of reality: A treatise in the
sociology of knowledge*. New York : Doubleday.
(バーガー, P.L. & ルックマン, T. 山口節郎(訳) (1977). 日常世界の構成 新曜社)
- Bruner, J.S (1999). *Acts of Meaning*.
(ブルーナー, J. 岡本夏木・仲渡一美・吉村啓子 (訳) (2016) 意味の復権 ミネルヴァ書
房)
- Baumeister, R.F. (1991). *Meanings in life*. New York: Guilford Press
- カトリック中央協議会 (2002). カトリック教会のカテキズム カトリック中央協議会
カトリック教育省 (1988). カトリック学校における教育の宗教的次元-評価と刷新のため
のガイドライン 浦善孝 (訳). 神学ダイジェスト 114. 上智大学
- Cabrrus R. (2015). 地球市民の霊性：世界を変容させるための社会政治学的ネットワー
クを築こと グアテマラ・ラファエル・ランディバル大学開講記念講義改訂冊子
- Catret, J. (1985). 高橋敦子(訳) 聖イグナチオ・デ・ロヨラの道 新世社
- Clark, Beverley. Hick, John (2011). *The New Frontier of Religion and Science*.
(間瀬啓允・稲田実 (訳) 人はいかにして神と出会うか 仏藏館)

- Coathaem,H (1996). ホセ・ミゲル・バラ (訳) 聖イグナチオ・デ・ロヨラの『靈操』の解説 新世社
- Dezutter, J., Luyckx,K.,Schaap-Jonker,H.,Bussing,A.,Corveleyn,Corveleyn,J., &Hutsebaut,D. (2010) .*God image and happiness in chronic pain patients:The mediating role of disease interoretation*.Pain Medicine,11,765-773.
- Dilthey,W. (1900). 西村皓・牧野英二(編) (2003). デイルタイ全集第3巻論理学・心理学論集 法政大学出版局
- デベラ・M・ホセ (1993). イエズス会の教育における劇の役割 J・カスタニダ・高祖敏明 (編) イエズス会教育のこころ (pp.145-162) みくに書房
- Erikson,E.H. (1950). *Childhood and society* New York: Norton
(エリクソン,E.H.仁科弥 (訳) (1980) 幼児期と社会 1・2.みすず書房)
- Evangelista A. (1966). ロヨラのイグナチオ その自伝と日記 佐々木孝 (訳). 桂書房.
(自叙伝『ロヨラの巡礼者』含む)
- 江原武一 (2003). 世界の公教育と宗教 東信堂
- Fleming,L.D (1986). ネメシュ・エドモンド(訳) 1990 靈操の現代的読み方 新世社
- Falkner A. (2014). イエズス会 富田裕 (訳) Dinzeltbacher, P. &Hogg L. J. (編) 朝倉文市 (監修) 修道院文化史事典 (pp.444 - 490) 八坂書房
- Fowler,J.W. (1981). *Stage of faith –the psychology of human development and the quest for meaning*. Harper One.
- Gleitman, H. (1990). *Some reflections on drama and dramaticexperience*.In I.Rock,(Ed.) The legacy of Solomon Asch:Essays in cognition and social psychology. (pp.127-142) Hillsdale,NJ: Laarence Erlbaum Associates. .
- Glock,C.Y. (1962). *On the study of religious commitment*. Religious Education ResearchSupplement Smyth & Helwys Pub.
- Gomez,Luis (2000). *When is religion a mental disorder? The disease or ritual*. Diana Jonte-Pace,William B.Parsons.Religion and Psychology Mapping the Terrain.
(pp.201-226). London and New York.
- Guibert, J. (1963). 聖イグナチオの靈性 倉田清 (訳) 中央出版社
- 華園聰麿 (2016). 宗教現象学入門 人間学への視線から 平凡社
- Hood,R.W.,Jr,Hill,P.C., & Williamson,W.P. (2005). *The psychology of religious*

fundamentalism.New York:Guilford Press.

- 保呂篤彦 (2008). 現代の要請としての宗教多元主義 間瀬啓允 (編) 宗教多元主義を学ぶ
人のために 世界思想社
- 伊賀光屋 (2013). 解釈学的現象学的 (IPA) の方法論 新潟大学教育学部研究紀要 第 6
巻 第 2 号
- 伊藤久男 (編) 青山学院大学総合研究所キリスト教文化研究センター キリスト教教育思想
研究プロジェクト (1996). 現代におけるキリスト教教育の展望 ヨルダン社
- 石盛真徳 (2015). システム論と TEA 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ (編), TEA
理論編・複線経路等至性アプローチの基礎を学ぶ (pp.122-127) 新曜社
- Ignacio de Loyola (1986). ホセ・ミゲル・バラ (訳) 霊操 (改定版) 新世社
- イエズス会 (編). 聖イグナチオ・デ・ロヨラ書簡集 平凡社
- 稲葉陽二 (2008). ソーシャル・キャピタルの潜在力 日本評論社
- 岩壁茂 (2010). はじめて学ぶ臨床心理学の質的研究方法とプロセス 岩崎学術出版
- 抱井尚子 (2015). 混合研究法と TEA 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ (編)
TEA 理論編・複線経路等至性アプローチの基礎を学ぶ (pp.172-179) 新曜社
- 金児曉嗣 (1997). 日本人の宗教性—オカゲとタタリの社会心理学 新曜社
- 金児曉嗣 (2011). 宗教とメンタルヘルス 金児曉嗣監修・松島公望・河野由美・杉山幸子・西
脇良 (編), 宗教心理学概論 (pp.141-163) ナカニシヤ出版
- 垣花秀武 (1984). イグナティウス・デ・ロヨラ 人類の知的遺産 27. 講談社
- 菊池章夫 (2011). 社会化研究 川島書店
- 川村信三 (2015). 日本近代社会におけるカトリック・アイデンティティとカトリック教 高
祖敏明・Sali Augustine (編), アジアにおけるイエズス会大学の役割 (pp.22-47) ぎょう
せい
- 河竹登志夫 (1978). 演劇概論 東京大学出版
- 隈研吾 (2014). 僕の居場所 大和書房
- Knorn, Bernhaed. (2013). 神に向かい神と語り合う・霊操による対話・中村秀樹 (訳), 神学ダ
イジェスト 115 47-65.
- 高坂康雅 (2001). 共同体感尺度の作成, 教育心理学研究, 59, 88-99
- 高坂康雅 (2011). アドラー心理学によるコミュニティ援助 いたうたけひこ (編) コミュ
ニティ援助への展望 (pp.202-215) 角川学芸出版

- Levant.F.R, Barbanel. L., De Leon. H.P. (2008). テロリズムへの心理学の対応 釘原直樹 (監訳) テロリズムを理解する 社会心理学からのアプローチ ナカニシヤ出版
- Levevson , R.Michael.,Aldwin,M.Carolyn. & Igarashi . Heidi. (2013). *Religious Development From Adolescence to Middle Adulthood. Religion and Meaning Ramond F.Paloutzaian&Crystal L. Park(Eds). Handbook of The Psychology of Religion and Spirituality.* (pp.183-197) Guilford.
- Marttos,T.,Kezdy,A.,&Horvath-Szabo,K. (2011). Religious motivations for everyday goals:Their religious context and potential consequences. *Motivation and Emotion,35,75-88.*
- 松島公望 (2011a). 宗教心理学 河野義章 (編),心理学Ⅱ・その応用 (pp.71-83) 川島書店
- 松島公望 (2011b). 宗教性の発達心理学 ナカニシヤ出版
- McGrath,A.E. (1999). 稲垣久和・岩田三枝子・豊川慎(訳) (2006) キリスト教の霊性 教文館
- 南道子 (1991). オーバーアマガウ受難劇考察. 東京音楽大学. 日本キリスト教団出版
- 三好昭子 (2014). 伝記研究法によるアイデンティティ研究. 鏑幹八郎 (監修) 宮下一博・谷冬彦・大倉得史(編) アイデンティティ研究ハンドブック ナカニシヤ出版
- 望月一靖・丸茂湛祥 (1987). 宗教性の心理学.恒星社厚生閣
- 森岡正芳 (2011). 宗教と物語 (ナラティブ) 金子曉嗣・松島公望・河野由美・杉山幸子・西脇良編. 宗教心理学概論 (p.25) ナカニシヤ出版 .
- Mussen,P (1967). *Eary socialization:Learning and identification.*In G.Mandler,P. Mussen, N.Kogan&M.Wallach,M. A new directons in psychology:Ⅲ (pp51-110). Holt, Rinehart &Winston.
- 森本真由美 (2013). 日本におけるカトリック信者の宗教性発達の検討. 目白大学大学院 心理学研究科現代心理学専攻修士論文 (未発表)
- 永野藤夫 (1984). オーバーアマガウ受難劇研究 中央出版
- 西脇良 (1998). J.W.ファウラーの信仰発達理論に関する文献研究ー共同体と共にある信仰発達.カトリック教育研究,15.21-30.
- 西脇良 (2004). 日本人の宗教的自然観ー意識調査による実証的研究 ミネルヴァ書房
- 西脇良 (2005). 宗教性発達の研究動向 浦上昌則・神谷俊次・中村和彦 (編),心理学

- (pp.122-123) ナカニシヤ出版
- 西平直喜 (1996). 生育史心理学序説-伝記研究から自分史制作へ 金子書房
- Noice,H.,&Noice,T.(1997a).Long-term retention of theatrical roles. *Memory*,7,357-382.
- Noice,T.,&Noice,H.(1997b).Effort and active experiencing as factors in verbatim recall.*Discourse Processes*,23,149-167.
- 日刊建設工業新聞 (2017). 栄光学園中学高等学校 70 周年事業新校舎完成. 3.17 発行.日刊建設工業新聞社
- 無藤隆 (1990). 発達心理学への第一歩 無藤隆・高橋恵子・田島信元 (編) 発達心理学入門 I (pp.1-9) 東京大学出版会
- 岡本裕子 (2007). アイデンティティ生涯発達論の展開 ミネルヴァ書房
- 大野久 (2008). 伝記により自己をとらえる 榎本博明・岡田努(編),自己心理学研究の歴史と方法 (pp129-149) 金子書房
- Oman, Dong. (2013). *Defining Religion and Spirituality*.Ramond F.Paloutzaian,Crystal L. Park. *Handbook of The Psychology of Religion and Spirituality*.Guilford.
- 大江篤志 (2010). 社会化概念再考 菊池章夫・二宮克美・堀毛一也・斎藤耕二 (編) 社会化の心理学ハンドブック (pp.3-18) 川島書店
- Pargament,K.I. (1992). Of means and end: Religion and the search for significance. *The International Journal for the Psychology of Religion*,2,201-229.
- Pargament,K.I. (1997). *The psychology of religion and oping:Theory,research,practice*. New York:Guilford Press.
- Paragment,K.I.,&Mahoney,A. (2005). Sacred matters:Sanctification as a vital topic for the psychology of religion.*The International Journal for the Psychology of Religion*,15(3),179-198.
- Park, L.L. (2010). Making sense of the meaning literature:An intergrative review of meaning making and its effects on adjustment to stressful life events.*Psycholgical Bulletin*,136,257-301.
- Park,L.Crystal. (2004). The notion of growth following stressful life experiences: Problem and prospect.*Psychological Inquiry*,15,69-76.
- Park, L.Crystal. (2005a). Religion and meaning,In R.F.Paloutzian&, C.L.Park(Eds.) *Handbook of the psychology of religion and spirituality* (pp.295-314). New

- York:Guilford Press.
- Park, L.Crystal. (2005b). Religion as a meaning-making framework in coping with life stress.*Journal of Social Issues*,61,707-729.
- Paloutzian, F.Raymond&Park. L.Crystal . (2013). Recent Progress and Core Issues in the science of the Psychology of Religion and spirituality. Ramond F.Paloutzaian &Crystal L. Park(Eds) *Handbook of The Psychology of Religion and Spirituality* (pp.3-23). Guilford.
- Paloutzian, F.Raymond.Murken.Sebastian,Streib.Heinz&RoBler-Namini,.Sussan. (2013). Conversion,Deconversion,and Spiritual Transformation:A Multilevel Interdisciplinary View. Ramond F.Paloutzaian&Crystal L. Park(Eds). *Handbook of The Psychology of Religion and Spirituality* (pp.399-421). New York:Guilford Press.
- Park, L.Crystal . (2013). Religion and Meaning. Ramond F.Paloutzaian&Crystal L. Park(Eds) *Handbook of The Psychology of Religion and Spirituality*. (pp.357-379) . New York:Guilford Press.
- Rambo,L.R. (1993). *Understanding religious conversion*. Yale University Press
- Reich,K.H. (1992). Religious development across the life span:Conventional and cognitive development approaches. In D.L Featherman, R.M.Lerner, &M.Perlmutter (Eds.) , *Life-span development and behavior*. Vol.11 Lawrence Erlbaum
- Rahner H. (1974). 教会における奉仕 イグナチオ・ロヨラと霊操の起源 イエズス会 (監修). 岡本和子 (訳) イエズス会出版
- 李聖一 (2016). 神の指ここにあり ドン・ボスコ社
- Rothbaum,Weisz,&Snyder;Young&Morris. (1982). Changing the word and changing the self: A two-process model of perceived control. *Journal of Personality and social Psychology*,42,5-37.
- 六甲中学校・高等学校 (2013). Rokko spirit. 学校法人六甲学院
- Sarason,B.Seymour . (1974). *The Psychological Sense of Community*. Brookline Books.
- Saroglou&Cohen. (2013). Cultural and Cross-Cultural Psychology of Religion.Ramond F.Paloutzaian, Crystal L. Park. *Handbook of The Psychology of Religion and Spirituality* (pp.330-354). New York:Guilford Press.
- Sato,T.,Yasuda,Y.,Kanzaki,M.,&Valsiner,J.(2014).From Describing to Reconstructing

- Life Trajectories: How the TEA explicates context dependent human phenomena.
 Wagoner B., Culture Psychology and its Future: *Complementarity in a new key*.
 Information Age Publishing pp.93-104
- Starbuck, E.D. (1899). *The Psychology of Religion*. Walter Scott, LTD, 1.
- Selbie, W.B. (1926). *The psychology of Religion*. Oxford Univ. Press.
- Standaert, Nicolas. (2013). イエスと出会うために - 霊操における「場所の設定」 - 角田 祐一 (訳). 神学ダイジェスト 115, 66-78.
- Stanislavski. (1924). *MY life in art*. Boston: Little, Brown.
- Stanislavski. (1936). *An actor prepares*. New York: Theatre Arts.
- 杉山幸子 (2004). 新宗教とアイデンティティ 新曜社
- 杉山幸子 (2011). 青年と宗教. 金児曉嗣監修・松島公望・河野由美・杉山幸子・西脇良 (編), 宗教心理学概論 (pp.108-119) ナカニシヤ出版
- 杉山幸子 (2011). 青年と宗教. 金子曉嗣・松島公望・河野由美・杉山幸子・西脇良 (編). 宗教心理学概論 (pp.108-119) ナカニシヤ出版
- 鈴木忠 (2004). 心と環境はどのように応答し合うのか 鈴木忠・西平直. 生涯発達とライフ サイクル (pp.49-79) 東京大学出版
- サトウタツヤ (2015). 複線径路等至性アプローチ(TEA) 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ (編) 複線径路等至性アプローチの基本を学ぶ TEA 理論 (pp. 4-8) 新曜社
- 江原武一 (2003). 世界の公教育と宗教 東信堂
- 塚本正明 (1995). 現代の解釈学的哲学ーディルタイおよびそれ以後の新展開 世界思想社.
- 島藺進 (2017). 宗教ってなんだろう 平凡社.
- 高石恭子 (2004). 子どもが私と出会うとき. 渡辺恒夫・高石恭子 (編). 私という謎-自我体験の心理学 (pp.43-72) 新曜社
- 橘木俊詔 (2013). 宗教と学校 河出ブックス
- 田辺董 (1986). ロヨラのイグナチオの神秘体験 南窓社
- 田辺董 (1987). ロヨラのイグナチオの巡礼 - 場所の象徴- 聖心女子大学キリスト教文化研究所 (編) 巡礼と文明 (pp.163-187) 春秋社
- Thouless, R.H. (1971). *An introduction to psychology of religion*. 3rd ed. London: Cambridge University Press.

- 徳田幸雄 (2010). 回心 星野英紀・池上良正・氣多雅子・島菌進・鶴岡賀雄 (編),宗教学辞典 (pp.256-159) 丸善出版
- 地の塩 CLC (2009). 混沌の中の光り-信徒が歩んだ『靈操』の道- 地の塩 CLC
- 宇都宮輝夫 (2012). 宗教の見方一人はなぜ信じるのか 勁草社
- 浦善孝(2013). カトリック教育に関するバチカン公文書 神学ダイジェスト 114, 64-81
上智大学
- Vandendenbroucke.Francois. (1997). 新たな環境・新たな問題[12-16世紀]第8章後継者たち.上智大学中世思想研究所(監訳/監修).キリスト教会神秘思想史 2 中世の靈性 (pp.665-714) 平凡社
- Waardenburg,J. (1993). *Perspektiven der sligionswissenschaft*,Wurzburg,Echter Verlag.
- 渡辺恒夫 (2004). プロローグ-スフィンクスの謎から.渡辺恒夫・高石恭子(編).私とい
謎-自我体験の心理学 (pp.1-13) 新曜社
- 山本洋三 (2004). 栄光学園物語 かまくら春秋社
- 安田裕子・滑田明陽・福田茉莉・サトウタツヤ (編) (2015). T E A理論編 新曜社
- 養老孟司・隈研吾 (2012). 日本人はどう住まうべきか? 日経 BP 社
- 養老孟司・隈研吾 (2014). 日本人はどう死ぬべきか? 日経 BP 社
- Young,M.J.,&Morris,M.W. (2004). Existential meanings and cultural models: The interplay of personal and supernatural agency in American and Hindu ways of responding to uncertainty In Greenberg,S.L.Koole,&T.Pyszczynski(Eds.),*Handbook of experimental existential psychology* (pp.215-230) New York: Guilford Press.
- 山崎渾子 (2009). 靈操 上智学院 (編) 新カトリック大事典 (pp.1381-183) 研究社
- Zinnbauer,B.J.,&Pargament,K.I. (2005). Religiousness and spirituality. In R.F.Paloutzian&C.L.Park(Eds.),*Handbook of the psychology of religion and spirituality*. (pp.21-42) New York:Guilford Press.

要約

本研究は、心理学からみた宗教性発達について、実証的研究に基づき、その宗教性発達の諸相について調べ、発達の意義を検討するものである。心理学ではある宗教に対して信仰を持つという宗教性がどのように意識され、表出されるのかという過程を宗教的意味システムとして捉えることが出来る。意味が生み出されるプロセスの「媒介」に注目して、どのようにして宗教性を帯びた人格が形成されるのかを見ていくことは、生涯発達という視点からも考察が可能である。

そこで本研究では、ある宗教の理解の深化をはかることは、他宗教を理解する手立てとなるという、デルタイモデルに依拠し、特定の宗教・教団に限定しながらも、そこに特異的な心理過程であることを承知した上で探索的にデータ収集を行い、第1に、宗教的意味システムのプロセスを検討すること、第2に、意味システムにおける「祈り」に注目して、その構造と機能を明らかにすること、第3に、「祈り」の一般化としての宗教教育について検討する。「祈り」という媒介によって、どのような宗教的意味形成、意味価値が生じ、宗教性発達に影響を及ぼすかを検討し、宗教的意味システムの発達モデルの仮説を生成することを全体目的とする。宗教という現象を扱う宗教学、神学、社会学とは異なるアプローチで、その現象の心性の記述に関しての新たな知見を提供できる。具体的には、本研究ではカトリック教会の黙想の一つである『霊操』を取り上げる。

序章では、宗教は意味を作り出そうとする人間の試みの一部であり、移ろいやすい意味の世界に生きている人間が、意味を生き、自己と世界の理解を解釈する方法であるとし、宗教的意味づけとそれによって何がもたらされるのかを先行研究を整理しながら、宗教性発達に関しての問題意識を述べた。世界や出来事に宗教的意味づけをしていく宗教性発達について検討することは、意味を作り出そうとし、意味の世界に生きる人間を理解するうえでも重要な問いである。

第1章では、人生においての様々な出来事や節目に祈りに向かう動機と促進的記号の発生の仮説モデルを提示し、意味形成がどのように行われるのか、宗教性を帯びた人格がどのように形成されるのか、宗教的意味システムのプロセスを検討することを目的とした。研究1では、カトリックの信仰を選んでいく径路を、非クリスチャン家庭で育ち、成人洗礼によりカトリック信者になった語りを分析対象に、TEAの概念ツールを用いて記述することで、宗教性発達の仮説モデルを生成し、宗教的意味形成プロセスの知見を提出することを目的とした。祈りによる変容プロセスは「漸次的な回心」であり、統合的過程であるこ

とが示唆された。また、促進的記号発生 of 三層モデルにより、記号の読み解きである意味形成のプロセスで「同伴するイエス」という促進的記号が発生し、宗教的価値観への統合過程が確認された。研究2では、『靈操』の著者であるイグナチオの伝記資料を、TEAを用いた生育分析によって心理学的に考察し、個人と歴史の相互性の中から信仰を深め、信仰に生きる人の特徴を明らかにし、その宗教性発達を検討することを目的とした。神への希求とその反対へと押しやるものとのせめぎ合いは対話的自己による「識別」と解釈できた。識別という習慣が、すべての出来事に神を見るという人格特性の形成に繋がっていることが示唆された。

第2章では、意味システムにおける『靈操』に注目して、その構造と機能を明らかにすることを目的とした。研究3は、『靈操』のプログラム構造に連動して宗教的意味づけがどのように変容していくのか、黙想を介してどのような心の変容過程が担保されれば、宗教性発達が促進するのかを明らかにすることを目的とした。プログラム評価とIPAを用いて構造と機能、影響と効果を確認し、『靈操』の構造は過去・現在・未来、時空を超えるメンタルタイムトラベルであり、社会的視点調整能力の発達を促し、宗教的意味システムの形成を成すものであることが示唆された。研究4は、『靈操』第3、4週の「場所の設定」によって実存的な理解、宗教的意味づけがどのように深まるのかを検討した。『靈操』の第3週、第4週の宗教的体験に該当するPassion Playの受難と復活の物語体験を通して「人間の尊厳と地球の尊厳」「寛容」「正義」「連帯」といった「地球市民の靈性」が培われていることが示唆された。

第3章では、『靈操』の構造や機能の一般化ということで、イグナチオの靈的ビジョンを応用した教育を特徴に掲げる、イエズス会学校の教育の中の宗教性を検討することを目的とした。研究5はイエズス会学校にて質問紙調査を用いて、意味形成に影響を及ぼすと言われている自我体験の想起と人生の意味づけを検討した。高い想起体験率の回答が得られ、自我体験の語りの中に過去・現在・未来を移動するメンタルタイムトラベルや世界の中の自分という社会的視点調整能力の発達を見ることができた。研究6は、成人期・老年期になってから青年期を過ごしたイエズス会学校の教育的環境を振り返ったとき、どのような意味形成を成すのかを検討した。卒業生のエッセイをテキストマイニングで分析を行い、自分が世界と繋がっていることを体感できた経験と意味づけていることが見出された。これらの結果からイエズス会学校教育には自己を知り、世界の中の自分という他者にかかれた自己の確立の発芽が示唆された。

終章では、研究 6 までから得られた知見に基づいて、祈りによる心の変容過程が宗教性発達に及ぼす影響を考察した。宗教的意味システムでは祈りが「媒介」として重要であり、祈りのプログラムの一つである『靈操』は宗教的意味システムの形成を成すもので、その構造から明らかになったのは心理学的に解釈すると過去・現在・未来、時空を超えるメンタルタイムトラベルであり、社会的視点調整能力の発達を促すものであった。『靈操』が一般化された教育の場においても、メンタルタイムトラベルや社会的視点調整能力の発達が促され、日常を生きるなかで生まれるさまざまな問いを、人生の意味と目的の追究に関わる問いに繋げていくことは自己を知り、他者に開かれた自己、共通善に向かうものであることが示唆された。

青年期の生活意識調査

本日は調査にご協力いただき、ありがとうございます。

この調査は、ミッションスクールで学んでいる学生の皆さんが日常生活を営む中でどのように考え、行動するものであるかを調べるために行うものです。正しい答えや、間違っただけの答えというものはありません。思った通りに答えてください。

この調査は5つのパートで構成されています。また、表紙を含めて7ページからなっていますので、乱丁・落丁等がありましたら申し出てください。

回答は全て研究室の厳重な管理のもとで、直ちに記号化され、コンピューターにより統計的に分析されます。ご協力いただいた方にご迷惑をおかけすることは決してありませんので、日頃お感じになっていることを率直にお答えください。またこの調査は、コンピューターにデータを入力後、シュレッダーにて処分するなど、個人情報の保護に最大限の配慮をいたします。

それぞれの質問をよく読み、全ての質問について答えてください。回答もれのないようお願いします。

* 以下の欄を記入してください。

学校 ()

学年 () 年 年齢 () 歳 性別 (男・女)

白百合女子大学大学院発達心理学専攻
田島信元教授研究室

(東京都調布市緑ヶ丘 1-25)

博士課程 3年 森本真由美

I. 次の各項目はあなたにどの程度当てはまりますか。「4：思ったことがある」から「0わからない・覚えていない」までのうち、最も当てはまると思う数字に○をつけてください。

思 近 な 思 わ
 っ い ん っ か
 た こ と た ら
 こ と な こ な
 と を く と い
 が 思 あ が ・
 あ っ っ な 覚
 る た た い え
 こ よ て
 と う い
 が な な
 あ 気 い
 る が
 す
 る

1. 自分はどこから来たのだろう、と疑問に思った。	4	3	2	1	0
2. 自分はどこに行くのだろう、と不思議に思った。	4	3	2	1	0
3. 自分は何だろう、とふと思った。	4	3	2	1	0
4. 自分誰だろう、と考えた。	4	3	2	1	0
5. 一体何をもって「自分」としているのだろう、と思った。	4	3	2	1	0
6. 自分の正体って何だろう、と不思議に思った。	4	3	2	1	0
7. 自分の存在そのものが不思議だ、と思った。	4	3	2	1	0
8. 自分は本当に自分か、とわからなくなった。	4	3	2	1	0
9. 自分はなぜ自分なのだろう、と疑問に思った。	4	3	2	1	0
10. だれでもなく、どうして自分なのだろう、と考えた。	4	3	2	1	0
11. 自分が自分であることが不思議だ、と感じた。	4	3	2	1	0
12. なぜ私はこの体を選んだのか？と不思議に思った。	4	3	2	1	0
13. 私が私としてではなく、他のだれかとして生まれたということもあっていいのに、どうして私となっているのだろう、とふと思った。	4	3	2	1	0
14. いろいろな人がいるのに、なぜたまたま私なのだろう、と不思議に思った。	4	3	2	1	0
15. 自分はなぜ他の国や他の時代ではなく、たまたま日本の(または母国の)、この時代に生まれたのか、わからないなあと思った。	4	3	2	1	0

16. 以上において、あなたが「思ったことがある」「近いことを思ったことがある」と答えた項目のうちその体験が最も印象に残っている項目において、その体験が何をきっかけに、どのような状況のなかで生じたのか、ということについて、具体的に以下にご記入ください。

体験が最も印象に残っている項目は_____番の項目

体験のきっかけと、体験時の状況

- II. 次の項目はあなたにどの程度当てはまりますか。「4：とても当てはまる」から「0：全く当てはまらない」までのうち、最も当てはまると思う数字に○をつけてください。

	と	や	ど	あ	全
	て	や	ち	ま	く
	も	当	ら	り	当
	当	て	と	当	て
	て	は	も	て	は
	は	ま	い	は	ま
	ま	る	え	ま	ら
	る		な	ら	な
			い	な	い
				い	
1. 自分から進んで人の輪の中に入ることができる。	4	3	2	1	0
2. 自分から進んで人との信頼関係をつくることができる。	4	3	2	1	0
3. 積極的に周り人との関わりをもつことができる。	4	3	2	1	0
4. 自分が今いるグループや集団の人たちを信頼することができる。	4	3	2	1	0
5. 全体的に他人を信じている。	4	3	2	1	0
6. 今自分がいるグループや集団に自主的に加わっている。	4	3	2	1	0
7. 自分が今いるグループや集団の一員であることを実感している。	4	3	2	1	0
8. 周囲の人との活動に積極的に参加している。	4	3	2	1	0
9. 頼りにできる人がいる。	4	3	2	1	0
10. 周りの人をむやみに疑ったりは決してしない。	4	3	2	1	0
11. 自分自身に納得している。	4	3	2	1	0

と や ど あ 全
 て や ち ま く
 も 当 ら り 当
 当 て と 当 て は
 て は も て は
 は ま い は ま
 ま る え ま ら
 る な ら な
 い な い
 い

12. 自分でも自分自身を認めることができる。	4	3	2	1	0
13. 欠点も含めて自分のことが好きだ。	4	3	2	1	0
14. 今の自分に満足している。	4	3	2	1	0
15. 今の自分を大切にしている。	4	3	2	1	0
16. 自分には何かしら誇れるものがある。	4	3	2	1	0
17. 進んで人の役に立つことをすることができる。	4	3	2	1	0
18. 人のためになることを積極的にすることができる。	4	3	2	1	0
19. 困っている人に対して積極的に手助けすることができる。	4	3	2	1	0
20. 他人のためでも自ら進んで力を尽くすことができる。	4	3	2	1	0
21. 周囲の人々のために自主的に行動することができる。	4	3	2	1	0
22. 誰に対しても思いやりをもって接することができる。	4	3	2	1	0

Ⅲ. あなた自身の人生を意味や目的のあるものにするために、以下の項目はどのくらい追求しているでしょうか。追求の程度と実現の程度の両方について、当てはまると思う数字に○をつけてください。

	<u>追求</u>						<u>実現</u>							
	非 常 に 追 求 し て い る	か り 追 求 し て い る	少 し 追 求 し て い る	ど ち ら と も い え ない	あ ま り 追 求 し て い ない	ほ と ん ど 追 求 し て い ない	完 全 に 実 現 し て い る	か り 実 現 し て い る	少 し 実 現 し て い る	ど ち ら と も い ない	あ ま り 実 現 し て い ない	ほ と ん ど 実 現 し て い ない	全 く 実 現 し て い ない	
1. 能力や技能を身につけて成長すること	7	6	5	4	3	2	1	7	6	5	4	3	2	1
2. 知識を広げて、多くのことを理解すること	7	6	5	4	3	2	1	7	6	5	4	3	2	1
3. 何か創造すること	7	6	5	4	3	2	1	7	6	5	4	3	2	1
4. 美しいもの、芸術的なものを味わうこと	7	6	5	4	3	2	1	7	6	5	4	3	2	1
5. さまざまなことを体験すること	7	6	5	4	3	2	1	7	6	5	4	3	2	1
6. 自分の潜在的な可能性を実現すること	7	6	5	4	3	2	1	7	6	5	4	3	2	1
7. 目標を達成するために努力すること	7	6	5	4	3	2	1	7	6	5	4	3	2	1
8. 真理を見つけること	7	6	5	4	3	2	1	7	6	5	4	3	2	1
9. 生きていることそれ自体に満足すること	7	6	5	4	3	2	1	7	6	5	4	3	2	1
10. 仕事や学業にはげむこと	7	6	5	4	3	2	1	7	6	5	4	3	2	1
11. 親密な恋愛または友情関係を維持していくこと	7	6	5	4	3	2	1	7	6	5	4	3	2	1
12. 心身の健康を維持すること	7	6	5	4	3	2	1	7	6	5	4	3	2	1
13. 家族と仲良く暮らすこと	7	6	5	4	3	2	1	7	6	5	4	3	2	1
14. 遺伝子を残し、人類の存続や進化に貢献すること	7	6	5	4	3	2	1	7	6	5	4	3	2	1
15. 友人と楽しく過ごすこと	7	6	5	4	3	2	1	7	6	5	4	3	2	1
16. 自立して責任感を持つこと	7	6	5	4	3	2	1	7	6	5	4	3	2	1
17. 喜びや満足を感じることに	7	6	5	4	3	2	1	7	6	5	4	3	2	1

追求

実現

	非 常 に 追 求 し て い る	か り 追 求 し て い る	少 し 追 求 し て い る	ど ち ら と も い ない	あ ま り 追 求 し て い ない	ほ と ん ど 追 求 し て い ない	全 く 追 求 し て い ない	完 全 に 実 現 し て い る	か り 実 現 し て い る	少 し 実 現 し て い る	ど ち ら と も い ない	あ ま り 実 現 し て い ない	ほ と ん ど 実 現 し て い ない	全 く 実 現 し て い ない
--	---	--------------------------------------	--------------------------------------	----------------------------------	--	---	---------------------------------------	---	--------------------------------------	--------------------------------------	----------------------------------	--	---	---------------------------------------

18. 人の役に立ち、奉仕すること	7	6	5	4	3	2	1	7	6	5	4	3	2	1
19. 快楽を追求し、楽しみこと	7	6	5	4	3	2	1	7	6	5	4	3	2	1
20. 神仏を信じてその教えを守ること	7	6	5	4	3	2	1	7	6	5	4	3	2	1
21. スピリチュアルな次元に気づき、つながりを持つこと	7	6	5	4	3	2	1	7	6	5	4	3	2	1
22. 自然とつながりを持つこと	7	6	5	4	3	2	1	7	6	5	4	3	2	1
23. 社会や政治に関心を持ち、世の中をよくしていくこと	7	6	5	4	3	2	1	7	6	5	4	3	2	1
24. 文化の伝統を守っていくこと	7	6	5	4	3	2	1	7	6	5	4	3	2	1
25. 正義や道徳を大事にして実践すること	7	6	5	4	3	2	1	7	6	5	4	3	2	1
26. 地位や名誉を手に入れること	7	6	5	4	3	2	1	7	6	5	4	3	2	1
27. お金で買えるものを所有すること	7	6	5	4	3	2	1	7	6	5	4	3	2	1
28. 容姿をよくすること	7	6	5	4	3	2	1	7	6	5	4	3	2	1
29. 他者から認められ、尊敬されること	7	6	5	4	3	2	1	7	6	5	4	3	2	1
30. お金をたくさん稼ぐこと	7	6	5	4	3	2	1	7	6	5	4	3	2	1
31. 他人に対する影響力を持つこと	7	6	5	4	3	2	1	7	6	5	4	3	2	1

謝辞

本論文を作成させていただくまでに、多くの方からご指導や励ましをいただきました。この紙上をもちまして厚く御礼申し上げます。

指導教官の田島信元先生には、細やかな御指導と暖かい励ましを頂戴いたしました。発達心理学で宗教というテーマを扱うことを受けとめていただきました。深く感謝申し上げます。これからも引き続き御指導を賜りますようお願い申し上げます。

秦野悦子先生、鈴木忠先生には、お忙しいなかにもかかわらず、論文指導委員会でご指導くださり、折にふれて暖かいお言葉をかけていただきました。ありがとうございました。

また、東京大学の松島公望先生をはじめ宗教心理学研究会の諸先生方には、著者の拙い研究に関心を持っていただいた上、深い示唆と暖かい励ましのお言葉をいただきました。TEA 研究会では立命館大学のサトウタツヤ先生、安田裕子先生にご助言をいただきました。感謝の意を表します。

イエズス会の李聖一師、萱場基師にはひとかたならぬお世話になりました。調査にあたっては、日本 CLC の皆さま、イエズス会学校の多くの方々のご協力を頂きました。インタビューやアンケートに回答して下さった皆様には、感謝の念にたえません。本当にありがとうございました。宗教性発達の研究に取り組むきっかけとなった示唆を与えていただいた、聖心侍女修道会のシスター栗山百合子様には感謝しています。本研究の一部は NHK 番組アーカイブス学術利用トライアル事務局の支援をいただきました。ありがとうございました。

最後に、この論文を聖イグナチオ・デ・ロヨラに捧げたいと思います。

2018年3月30日

森本 真由美